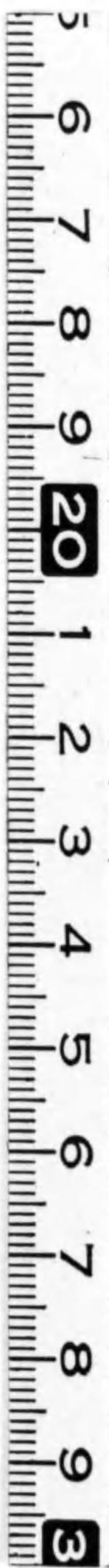


平安朝物語集

竹取物語
伊勢物語
大和物語
堤川物語

67
467

67-467
1200501281676



始





平安胡物語集



解題

國文學史上最も華やかなる平安朝の諸作品中、比較的短篇の竹取・伊勢・大和・堤中納言の四種を集めて、こゝに一冊とする事とした。

『竹取物語』我々が幼時より、御伽噺としてお馴染の作品である。源氏物語繪合の卷には「物語のいでき初めの祖なる竹取の翁」として載つて居り、我が國最古の傳奇小説である。成立期は明瞭でないが、今より大約千數十年前、醍醐天皇の延喜頃か、それ以前かであらう。作者は傳説として源順が擬せられてゐるが、未詳。異本も相當あるが、本書は主として「竹取翁物語解」の本文に據つた。

凡そ總ての藝術作品は、突如として現れ出るものではない。此の物語の先蹤を求めるとならば、異邦にあつては、寶樓閣經をはじめ、華陽國志・幽怪錄・甘蔗氏經・普曜經・搜神記等々に、其の趣向の源を探り得べく、本邦にあつては、古事記・風土記・萬葉集等には、夫々類似せる記事を見出し得る。特に柘の枝の傳説や、竹取翁の歌、浦島子傳などは深い關係があらう。併し是等が作のヒントにはなつたであらうが、此の作品は模倣や綴合せでなく、儼として渾然たる創作を成して

69-467

居る。是を説話として見れば、求婚説話でもあり、人と超人との神婚説話の變形でもあり、白鳥處女説話の系統をひく物でもある。又地名説話・語源説話を含み、不死の藥を焼いたので「ふじの山」と言ふとか、燕の子安貝と思つて取つたのが糞であつたので、其の後思ふに違へる事を「かひなし」といふ様になつたとかいふ如き洒落を形成してゐる。

以上の如く、種々の方面から考察し得るが、此の物語を目するに、單純なお伽噺を以てするのは妥當でない。多くの素材を運行するに際して、作者に王朝的理念の働いてゐる事が認められねばならぬ。即ち貴族の愛慾相の數種を描き出し、ひいて皇室にこれを結合せるは、それが稗拙な恣態であらうとも、なほ且當時の世相を示すものである。

古典に對する態度として、其の當時を熟知し、古人の心になつて見る事も必要であるが、總ての物に煩はされる事なく、直接に現代人の心を以て是に向ふのも亦許さるべきである。竹取物語に關して後者の立場を強調された沼波瓊香氏の文をひいて、竹取物語の解説の結びとする。

「竹取は古きが故に尊いのではない。そこに不朽の常に新しき文藝的價值があるから尊いのである。兎角我が國の古き作品は、學者の争によつてのみ紹介せられて居て、彼等が内容以外の意味以外の穿鑿に偏して居たので、今の若い人々の多くは、我國古文藝の價值を知らず、たまたに讀む者が

あつても、古びと云ふ事、珍しみと云ふ事などにのみ價值を置かうとして居て、そこに今も光りつある光を認めないのは惜しい事である。人間の心は古今一である。大道千古である。古典を見るに、我心を古くして見る必要は無い。今の此の在合せの儘の現代の心を以て直ちに古典に對せよ。驚くべき新しみを其處に發見するであらう。これは決して竹取に就てのみ云ふのでは無い。竹取は淺い滑稽の連続で、輕快に讀んで行ける。そして終に近くなつて、忽として舞臺が變ずる。恐ろしき無限が目の前に展開する。大なる運命の姿が顯はれる。買被つて居た己等の能力が、もはや奈何ともし難き境界線に立つた時の、人間の醜態、それが殘酷な程讀者を脅す。タンタジールの死に對しての二女の悲痛、それよりも更に廣く大きく美しく描き出されて居る。國木田獨歩が竹取物語を讀んで慟哭したのはこの點である。この古代の不知の作者が果して今の我々が感得する如き意を以て書いたか、そんな筈は無い、今の我々が作者の作品から作者の知らない物を拾ひ出すのだ、と云ふ人が多いであらう。成程左う云ふ事もあらう、併し又左うで無い事もある。この小説の如きは確に作者の意を寓したもので、單に怪奇に落ちを取つたものでは無い事は、讀んで見れば解る。」

『伊勢物語』次に述べる「大和物語」と共に、歌物語なる名稱を以て呼ばれる作品である。百二十五節ほどの小話より成り、在原業平の歌を中心とする短篇情話集とも云ふべきものである。かう

云ふ歌物語は、遠く萬葉集あたりから其の系統をひき、其の卷十六の有由縁歌は、この源流とも見られる。特に詞書の「昔者有娘子、字櫻兒也」や、「昔者有壯士」云々の形は、本書の「昔男ありけり」といふ冒頭の文の基をなしたであらう。書名は又歌の作者たる業平にちなんで「在五の物語」「在中將」「在五中將日記」などとも呼ばれる。成初期・作者共に明瞭でないが、業平の時代である文徳・清和兩帝の頃から餘り遠からぬ時代で、恐らく醍醐天皇の頃であらうか。尤もこの原本と目すべきものは、業平が自ら書きとめておいた物であらう。それに後人の手が多く這入つてゐるのである。書中の歌にあつても、業平の作でないのを、其の儘、或は作りかへて、この書の主人公の作なるかの如く書きなしたのがある。文が斷れ／＼になつて、きび／＼してゐる所は、同時代なるが故に竹取に似て、更にそれよりも強みがある。各短篇は獨立するが如くにして、而も各篇聯絡があり、全體を通じての主人公が、一人なる事を印象せしめてゐる。此の一人が即ち業平其人である。豪放洒脱、しかも又多涙多感の斯人の全人格が、躍如としてこの書に浮いてゐる。

書名の由來に就いては、諸説が存するが、もとの本に、伊勢齋宮の事が最初に出て居たからだといふ説が中つてゐるらしい。

成立事情から當然考へられる如く、本書には異本が頗る多い。本文は主として、伊勢物語新釋に

據つたが、新釋では明瞭に後人の註と目される部分は、削り去つてゐるので、流布本によつて之を補ひ、其の部分には括弧を施しておいた。

『大和物語』伊勢物語の系統をひく歌物語であるが、伊勢と異り、全篇を一貫した主人公は存せず、別個の説話を集成したものである。作者は、在原滋春とも言ひ、又花山院の御撰とも言ふが、確證はない。

延喜帝を先帝といふのを見て、天曆の頃何人か書き始め、又藤原實賴を、「今の左のおとゞ」としてゐるのを見て、花山院の寛和・永延の頃の人が、書き添へなどしたと推測される。いつ現在の形になつたかは明でないが、この素材としては、多くの私家集の存在が考へられる。それ等を基として、相當長期にわたつて書き續がれたものであらう。且恐らくは、一人の手に成るものではない。

題號の基く所も異説が多くて明瞭でない。が、伊勢物語に對して、斯く名附けたものであらうか。伊勢物語は、歌が珠玉をなして説話をく／＼つてゐるが、是はさういふ事もなく、文章も彼程に力強いものではない。そして上下二卷のうち、下卷のはじめ二三葉を境として後半の部分は、前半が簡單なるに比して長く、文章の方が主となり、古書口碑に取材して、哀れた物語を記してゐる。後半

は後の今昔物語や古今著聞集など、共通する性質のものである。従つて伊勢よりも、説話を對象としてゐるものと言ふべく、彼とは又異なる興味が見出される。

本文は主として大和物語首書により、大和物語抄及び上田秋成の校定本(享和三年版)によつて補つた。なほ伊勢物語にならつて章段の數を挿入する事とした。

『堤中納言物語』十篇の短篇小説を集めたものである。堤中納言といふのは、大和物語中にも見えるが、延喜頃の人藤原兼輔の事で、この物語は其の人の筆だと云はれたが、さう古いものではない。何故、内容と無關係のかういふ題號がつけられたか、今なほ疑問である。成立期は明かでないが、書中に見えてゐる根合は後冷泉帝の時にはじめて行はれたものゝ如くであるから、本書はそれ以後の成立で、恐らくは平安末期院政時代の頃であらう。いかにも奇警な趣向を捉へて居る所は、物語中の一異彩である。特に作者の持つ皮肉さと耽美的な所とは、注目に値する。「花櫻折る少將」で、少將が戀人と間違へて、其の伯母の老尼を抱いて家に連れ歸るが、終りで作者は「其の人も美しかつたが」と云つて筆を擱いてゐる。又「蟲めづる姫君」には、谷崎潤一郎氏の或作に共通するやうな耽美的な氣分が描き出されてゐる。姫が世俗の慣習に逆らひ、理窟をのべ立て、眉もぬかず、齒も黒めずして人の嫌ふ蟲を愛玩する所が描かれ、篇中でも特異な作である。その結末でも、「續き

は二の巻にある」としてゐて終つてしまふ。作者の皮肉な微笑が見えるやうである。又「このついで」に於いて、多數の人が順次に話をする趣向も面白く、「逢坂越えぬ權中納言」では、當時の貴族の必ず修むべき音楽に無趣味な殿上人を點出して、眠たさうに欠伸をさせてゐる。現今音樂會に於て、時々見かける風景を聯想せしめるものがある。「貝合」では、少年少女のあどけない世界を描出し、「はいすみ」又滑稽の裡に人情の機微をゑがき、「よしなしごと」では、借用を申込む品物が最初は頗る結構な物を望むが如くで、而も結局はどんな破れた物でもいゝ事になつてしまひ、讀者をして自ら滑稽感を催させる。此の外の諸篇皆夫々に面白く、卷末には又書きかけて筆を斷つたと思はれる斷片がついてゐる。徹頭徹尾奇警といふべき作品である。

平安朝物語集 目次

竹取物語

一

伊勢物語

三

大和物語

九五

堤中納言物語

二〇三

目次終

竹取物語

今は昔、竹取の翁と云ふ者ありけり。野山に交りて、竹を取りつゝ、萬の事に使ひけり。名をば
讃岐造と名む云ひける。その竹の中に、本光る竹、一筋ありけり。怪しがりて寄りて見るに、
筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、甚美しうて居たり。翁云ふやう、「我れ朝毎夕
毎に見る竹の中に御座するにて知りぬ。子になり給ふべき人なむめり」とて、手に打ち入れて、家
に持ちて來ぬ。妻の嬪に預けて養はす。美しきこと限りなし。甚幼ければ、籠に入れて養ふ。竹取
の翁、この子を見付けて後に、竹を取るに、節を隔て、筒毎に金ある竹を見付くること重りぬ。
斯くて翁漸り豊になり行く。この兒養ふ程に、急速と大きに成り勝る。三月ばかりになる程に、
よき程なる人になりぬれば、髪上など沙汰して、髪上せさせ、裳著す。帳の内よりも出さず。齋き
傳き養ふ程に、此の兒の容姿、清らなること世になく、家の内は、暗き所なく、光満ちたり。翁心
地悪しく、苦しき時も、此の子を見れば苦しき事も止みぬ。腹立たしき事も慰みけり。翁、竹をと

る事、久しくなりぬ。勢猛の者になりけり。此の子、甚大になりぬれば、名をば三室戸齋部秋田を呼びて附けさす。秋田、弱竹の赫映姫と附けつ。此の程、三日拍ち上げ遊ぶ。萬の遊をぞしける。男女嫌はず呼び集へて、いと甚く遊ぶ。

世界の男、貴なるも賤しきも、争で、此のかぐや姫を得てしがな、見てしがなと、音に聞き愛でて惑ふ。その傍の垣にも、家の外にも居る人だに、容易く見るまじきものを、夜は安き睡も寝ず。闇の夜に出で、も穴を抉り、此處彼處より覗き、垣間見、惑ひ合へり。さる時よりなむ、よばひとは云ひける。人の物ともせぬ處に、惑ひありけども、何の効あるべくも見えず。家の人どもに、物をだに言はむとて、云ひ懸くれども、事ともせず。傍を離れぬ公達、夜を明し、目を暮す人多かり。疎なる人は、益なき步行は、由縁なかりけりとて、來すなりにけり。その中に、猶云ひけるは、色好みと云はる、限り五人、思ひ止む時なく、夜晝來けり。その名、一人は石作皇子、一人は車持皇子、一人は右大臣阿部御主人、一人は大納言大伴御行、一人は中納言石上麻呂、唯この人々なりけり。世の中に、多かる人をだに、少しも容姿よしと聞きては、見ま欲しうする人々なりければ、かぐや姫を見ま欲しうて、物も食はず思ひつゝ、彼の家に行きて、イみ歩きけれども、甲斐あるべくもあらず。文を書きて遣れども、返事もせず。佗歌など書きて遣れども返しもせず。甲斐な

しと思へども、十一月十二月の降り凍り、六月の照り霹靂くにも、障らず來けり。

この人々、或時は、竹取を呼び出で、「娘を我に給べ」と伏し拜み、手を摺り宣へど、「己がなさぬ子なれば、心にも従はずなむある」と云ひて、月日を過す。斯かれば、この人々、家に歸りて物を思ひ、祈禱をし、願を立て、思ひ止めむとすれども、止むべくもあらず。然りとも、遂に男合せざらむやはと思ひて、頼を懸けたり。強に志を見え歩く。これを見付けて、翁、赫映姫に云ふやう、「我が子の佛變化の人と申しながら、甚大さまで養ひ奉る志、疎ならず。翁の申さむこと、聞き給ひてむや」と云へば、かぐや姫、「何事をか、宣はむ事を承らざらむ。變化の者にて侍りけむ身とも知らず。親とこそ思ひまつれ」と云へば、翁、「嬉しくも宣ふものかな」と云ふ。「翁年七十に餘りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、男は女に婚ふことをす。女は男に婚ふことをす。その後なむ、門も廣くなり侍る。争でか、然る事なくてはおはしまさむ」。かぐや姫の曰く、「なでふ、さる事か爲侍らん」と云へば、「變化の人と云ふとも、女の身持ち給へり。翁のあらむ限りは、斯うても在ずかりなむかし。この人々の、年月を経て、斯うのみいました、宣ふことを思ひ定めて、一人々に婚ひ奉り給ひね」と云へば、かぐや姫曰く、「佳くもあらぬ容姿を、深き心も知らで、仇心付きなば、後、悔しき事もあるべきをと思ふ許りなり。世の貴き人なりとも、深き志を知らでは、

婚ひ難しとなむ思ふ」と云ふ。翁曰く「思ひの如くも宜ふかな。抑、如何やうなる志あらむ人にか
婚はむと思す。かばかり志疎ならぬ人々にこそあめれ。かぐや姫の曰く、「何ばかりの深きを見む
と云はむ。些少の事なり。人の志均しかなり。争でか、中に劣勝は知らむ。五人の人の中に、慕
しき物見せ給へらむに、御志勝りたりとて、仕う奉らむと、その來すらむ人々に申し給へ」と云ふ。
「善きことなり」と承けつ。

日暮るゝほど、例の集りぬ。人々、或は笛を吹き、或は歌を歌ひ、或は唱歌をし、或は口笛を吹
き、扇を鳴らしなどするに、翁出で、曰く、「忝くも汚氣なる所に、年月を経て物し給ふ事、極りた
る恐謝」と申す。「翁の命今日明日とも知らぬを、斯く宜ふ君達にも、よく思ひ定めて仕うまつれ」
と申せば、「深き御心を知らでは」となむ申す。さ申すも道理なり。「孰れ劣勝おはしまさねば、慕
しき物見せ給へらむに、御志の程は見ゆべし。仕う奉らん事は、それになむ定むべき」といふ。こ
れ善き事なり。人の恨もあるまじ」と云へば、五人の人々も「善き事なり」と云へば、翁入りて云
ふ。かぐや姫、石作皇子には、「天竺に、佛の御石の鉢と云ふ物あり。夫れを取りて給へ」といふ。
車持皇子には、「東の海に蓬萊と云ふ山あり。それに白銀を根とし、黄金を莖とし、白玉を實とし
て立てる木あり。それ、一枝折りて賜はらむ」と云ふ。今一人には、「唐土にある火鼠の裘を給へ」。

大伴大納言には、「龍の首に五色に光る玉あり。それを取りて給へ」。石上中納言には、「燕の持たる
子安貝、一つ探りて給へ」と云ふ。翁、「難き事共にこそあなれ。此の國にある物にもあらず。斯く
難き事をば、如何に申さむ」と云ふ。かぐや姫、「何か難らむ」と云へば、翁「兎まれ角まれ申さむ」
とて、出で、「斯くなん。聞ゆるやうに見せ給へ」と云へば、皇子達、上達部聞きて、「おいらかに
近邊よりだにな歩きそとやは宣はぬ」と云ひて、倦じて皆歸りぬ。

猶、此の女見では、世にあるまじき心地のしければ、「天竺にある物も持て來ぬものかは」と、思
ひ廻らして、石作皇子は、心の下巧ある人にて、天竺に二つと無き鉢を、百千萬里の程行きたりと
も、争でか、取るべきと思ひて、かぐや姫の許には、「今日なむ天竺へ石の鉢取りに罷る」と聞かせ
て、三年ばかり経て、大和國十市郡にある山寺に、賓頭盧の前なる鉢の、一向黒に煤付きたるを取
りて、錦の袋に入れて、造花の枝に付けて、かぐや姫の家にて來て見せければ、かぐや姫怪しが
りて見るに、鉢の中に文あり。擴げて見れば、

海山の路に心を盡し果て御石のはちの涙流れき

かぐや姫、光やあると見るに、螢ばかりの光だになし。

置く露の光をだにぞ宿さまし小倉の山に何求めけむ

とて、返し出すを、鉢を門に棄て、此の歌の返しをす。

白山にあへば光の失するかと鉢を棄て、も頼まるゝかな

と詠みて入れたたり。かぐや姫、返しもせずなりぬ。耳にも聞き入れざりければ、云ひ煩ひて歸りぬ。彼、鉢を棄て、又云ひけるよりぞ、面目なき事をば「はぢを棄つ」とは云ひける。

車持皇子は、心計畫ある人にて、公には、「筑紫の國に湯浴みに罷らん」とて、暇申して、かぐや姫の家には、「玉の枝採りになむ罷る」と云はせて、下り給ふに、仕う奉るべき人々、皆難波まで送りしけり。皇子「いと忍びて」と宣はせて人も數多率ておはしませず。近う仕う奉る限りして出で給ひぬ。見送りの人々、見奉り送りて歸りぬ。往しましぬと人には見え給ひて、三日ばかりありて漕ぎ歸り給ひぬ。豫て事皆仰せたりければ、その時、一の工匠なりける内膳等六人を召し寄りて、容易く、人寄り來まじき家を作りて、構を三重に爲籠めて、工匠等を入れ給ひて、皇子も同じ所に籠り給ひて、領らせ給ひたる限り、十六所をかみにくどをあけて、玉の枝を作り給ふ。かぐや姫宜ふやうに、違はず作り出でつ。甚賢く計畫りて、難波に密に持て出でぬ。船に乗りて歸り來にけりと、殿に告げ遣りて、最甚く苦しげなる容子して居給へり。迎に人多く参りたり。玉の枝をば、長櫃に入れて、物覆ひて持ちて參る。何時か聞きけむ、「車持皇子は、優曇華の花持ちて、上り給へり」

と喧呼りけり。これをかぐや姫聞きて、「我れはこの皇子に負けぬべし」と、胸潰れて思ひけり。かかる程に門を叩きて、「車持皇子おはしましたり」と告ぐ。「旅の御姿ながらおはしましたり」と云へば、逢ひ奉る。皇子宜く、「命を捨て、彼の玉の枝持ちて來たりとて、赫映姫に見せ奉り給へ」と云へば、翁持ちて入りたり。この玉の枝に、文をぞ附けたりける。

徒に身はなしつとも玉の枝を手折らで更に歸らざらまし

是をも、憐れと見て居るに、竹取の翁、走り入りて曰く、「この皇子に申し給ひし蓬萊の玉の枝を、一つの所も怪しき處なく、過たず以て來しませり。何を持ちてか、左右申すべきにあらず。旅の御姿ながら、我が御家へも寄り給はずして來しましたり。はや此の皇子に婚ひ仕う奉り給へ」と云ふに、物も云はず、頬杖をつきて甚じう歎かしげに思ひたり。この皇子「今更、何かと云ふべからず」と云ふ儘に、縁に這ひ上り給ひぬ。翁、理に思ふ。此の國に見えぬ玉の枝なり。この度は争でか否み申さむ。人柄も善き人に御座す」など云ひ居たり。赫映姫の云ふやう、「親の宣ふ事を、一向に否み申さん事の愍然さに、得難き物を床しとは申しつるを、斯く淺ましく持て來ることをなむ、妬く思ひ侍る」と云へど、猶翁は閨の内準備などす。翁、皇子に申すやう、「如何なる所にか此の木は候ひけん。怪しく麗しくめでたき物にも」と申す。皇子答へて宣はく、「一昨昨年をとしの二月十日頃をころに、難

波より船に乗りて、海中に出で、行かむ方も知らず覺えしかど、思ふこと成らでは、世の中に生きて何かせむ、と思ひしかば、唯空しき風に任せてありく。命死なば、如何はせむ。生きてあらむ限りは、斯く歩いて、蓬萊と云ふらむ山に逢ふやと、浪に漂ひ、漕ぎ歩いて、我が國の内を離れて歩き廻りしに、或時は浪荒れつゝ海の底にも入りぬべく、或時には、風につけて知らぬ國に吹き寄せられて、鬼の様なるもの出で来て、殺さむとしき。或時には、來し方行く末も知らず、海に紛れむとしき。或時には、糧盡きて、草の根を食物としき。或時には、云はむ方なく、むくつけげなるもの来て、食ひ懸からむとしき。或時には、海の貝を探りて、命を繼ぐ。旅の空に、助くべき人もなき所に、種々の病をして、行方すらも覺えず。船の行くに任せて、海に漂ひて、五百日と云ふ辰の時ばかりに、海の中に遙に山見ゆ。舟の中をなむ、強めて見る。海の上に漂へる山、甚大きにてあり。その山の形容、高く麗し。これや、我が覺むる山ならむと思へど、流石に恐しく覺えて、山の周圍を、指し廻らして、二三日ばかり見歩くに、天人の扮装したる女、山の中より出で来て、銀の金碗を以て、水を汲み歩く。これを見て船より下りて、此の山の名を何とか申す」と問ふに、女答へて曰く、「これは蓬萊の山なり」と答ふ。是を聞くに、嬉しきこと限りなし。この女に、「斯く宣ふは誰ぞ」と問ふ。「我が名は、ほうかむるり」と云ひて、ふと山の中に入りぬ。その山を見るに、更に

登るべきやうなし。その山の崖面を廻れば、世の中に無き花の木ども立てり。金、銀、瑠璃色の水流れ出でたり。それには、種々の玉の橋渡せり。その邊に照り輝く木ども立てり。その中に、此の探りて持て參で來たりしは、甚悪かりしかども、宣ひしに違はましかばとて、この花を折りて參で來たるなり。山は限りなく面白し。世に譬ふべきにあらざりしかど、此の枝を折りてしかば、更に心もとなくて、船に乗りて、追風吹きて、四百餘日になむ、參で來にし。大願の力にや、難波より昨日なむ、都に參で來つる。さらに潮に濡れたる衣をだに脱ぎ更へなむ、此方參で來つる」と宣へば、翁聞きて、打ち歎きて詠める。

吳竹の世々の竹取る野山にも然やは侘しき節をのみ見し

これを、皇子聞きて、「數多の日頃、思ひ侘び侍りつる心は、今日なむ落ち居ぬる」と宣ひて、返し、我が袂今日乾ければ侘しさの千種の數も忘れぬべし

と宣ふ。かゝる程に、男ども六人連ねて、庭に出で來たり。一人の男、文挾に文を挟みて申す。作物所の寮の工匠、漢部内鷹申さく、玉の木を作りて仕う奉りし事、心を碎きて、千餘日に力を盡したること少からず。然るに、祿未だ賜はらず。これを賜はりて、分ちて、家子に賜はせむ」と云ひて捧げたり。竹取の翁、この工匠等が申す事は、何事ぞと傾ぶき居り。皇子は、我にもあらぬ氣色

にて、肝消えぬべき心地して居給へり。これを赫映姫聞きて、「この奉る文を取れ」と云ひて見れば、文に申しけるやう、「皇子の君、千餘日、賤しき工匠等と諸共に、同じ所に隠れ居給ひて、莊麗き玉の枝を作らせ給ひて、官も賜はむと仰せ給ひき。是を、此の頃案するに、御妾と成しますべき赫映姫の要し給ふべきなりけりと承りて、此の宮より賜はらむと申して、賜はるべきなり」と云ふを聞きて、かぐや姫、暮る、儘に、思ひ侘びつる心地、笑み榮えて、翁を呼び取りて云ふやう、「誠に、蓬萊の木かところ思ひつれ。斯く淺ましき虚事にてありければ、はや疾く返し給へ」と云へば、翁答ふ、「判然に、作らせたる物と聞きつれば、返さむ事いと易し」と點頭き居り。かぐや姫の心、行き果て、ありつる歌の返し、

誠かと聞きて見つれば言の葉を飾れる玉の枝にぞありける

と云ひて、玉の枝も返しつ。竹取の翁、さばかり語りひつるが、流星に覺えて眠り居り。皇子は立つもはした、居るもはしたにて、居給へり。日の暮れぬれば、滑り出で給ひぬ。彼の歎願せし工匠をば、かぐや姫呼び据ゑて、「嬉しき人どもなり」と云ひて、祿、甚多く取らせ給ふ。工匠等甚じく喜びて、「思ひつる様にもあるかな」と云ひて、歸る道にて、車持皇子、血の流るゝまで打擲せさせ給ふ。祿得し甲斐もなく、皆取り捨てさせ給ひてければ、逃げ失せにけり。斯くてこの皇子「一生の

恥、これに過ぐるはあらじ。女を得ずなりぬるのみにあらず。天の下の人の、見思はむ事の恥かしき事」と宣ひて、たゞ御一人深き山へ入り給ひぬ。宮司候ふ人々、皆手を分ちて、求め奉れども、御薨もやし給ひけむ、得見付け奉らずなりぬ。皇子の御供に隠し給はむとて、年頃見え給はざりけるなりけり。是をなむ、「魂離る」とは云ひ始めける。

右大臣阿部御主人は、財豊に家廣き人にぞ御座しける。その年渡りける唐土船の王卿と云ふ者の許に、文を書きて、「火鼠の裘と云ふなる物、買ひて送來せよ」とて、仕う奉る人の中に、心確實なるを選びて、小野房守と云ふ人を付けて遣はす。持て到りて、彼の浦に居る王卿に金を取らす。王卿文を披けて見て、返事書く。「火鼠の裘、我が國に無き物なり。音には聞けども、未だ見ぬ物なり。世にある物ならば、此の國にも持て參で來なまし。甚難き商法なり。然れども、若し天竺に、偶に持て渡りなば、若し長者の許に訪尋ひ求めむに、無き物ならば、使に添へて金をば返し奉らむ」と云へり。彼の唐土船來けり。小野房守參で來て、參上ると云ふ事を聞きて、歩み疾うする馬を持ちて、走らせ迎へさせ給ふ時に、馬に乗りて、筑紫より唯七日に上り參で來たり。文を見るに曰く、「火鼠の裘、辛うじて、人を出して求め奉る。今の世にも、昔の世にも、この皮は容易く無き物なりけり。昔、貴き天竺の高僧、この國に持て渡りて侍りける、西の山寺にありと聞き及び

て、公に申して、辛うじて買ひ取りて奉る。價の金少しと、國司、使に申し、かば、玉卿が物加へて買ひたり。今、金五十兩賜はるべし。船の歸らむに附けて賜び送れ。若し金賜はぬものならば、裘の質返し給べ」と云へる事を見て、「何おぼす。今、金少しの事にこそあなれ。必ず送るべき物にこそあなれ。嬉しくして、致せたるかな」とて、唐土の方に向ひて伏し拜み給ふ。この裘入れたる箱を見れば、種々の麗しき瑠璃を彩色へて作れり。裘を見れば、紺青の色なり。毛の末には、金の光輝きたり。實に寶と見え、麗しき事比ぶべきものなし。火に焼けぬことよりも、清らなること雙なし、「宜、かぐや姫の好もしがり給ふにこそありけれ」と宣ひて、「あな可畏」とて箱に入れ給ひて、物の枝に附けて、御身の假粧最甚くして、やがて泊りなむものぞと思ひて、歌詠み加へて、持ちていましたり。その歌は、

限りなき思ひに焼けぬ 裘袂乾きて今日こそは見め

と云へり。家の門に、持て至りて立てり。竹取出で来て取り入れて、かぐや姫に見す。かぐや姫、彼の裘を見て曰く、「麗しき皮なめり。別きて誠の皮ならむとも知らず」。竹取答へて曰く、「兎まれ角まれ、先づ請じ入れ奉らむ。世の中に見えぬ裘の様子なれば、是を誠と思ひ給ひね。人な甚く侘びさせ奉らせ給ひそ」と云ひて、呼び据ゑ奉れり。斯く呼び据ゑて、「この度は必ず婚はむ」と、姫の

心にも思ひ居り。この翁は、かぐや姫の寡なるを歎かしければ、よき人に婚はせむと思ひはかれども、切に否と云ふ事なれば、得強ひぬは道理なり。かぐや姫、翁に曰く、「この裘は、火に焼かむに、焼けずはこそ實ならむと思ひて、人の云ふ事にも負けぬ。世になき物なれば、それを實と疑なく思はむと宣へ。猶是を焼きて見む」と云ふ。翁、「それ、然も云はれたり」と云ひて、大臣に「斯くなむ申す」と云ふ。大臣答へて曰く、「この皮は、唐土にも無かりけるを、辛うじて求め尋ね得たるなり。何の疑かあらむ。然は申すとも、はや焼きて見給へ」と云へば、火の中に打ち焚べて焼かせ給ふに、めら／＼と焼けぬ。「さればこそ、異物の皮なりけり」と云ふ。大臣、これを見給ひて、御顔は草の葉の色して居給へり。かぐや姫は、「あな嬉し」と喜びて居たり。彼の詠み給へる歌の返し、箱に入れて返す。

名残なく燃ゆと知りせば 裘思ひの外に置きて見ましを

とぞありける。されば歸りましにけり。世の人々、「安部大臣は、火鼠の裘を持ていまして、かぐや姫に棲み給ふとな、此處にや在す」など問ふ。或人の曰く、「裘は、火に焚べて焼きたりしかば、めら／＼と焼けにしかば、かぐや姫婚ひ給はず」と云ひければ、これを聞きてぞ、利氣なきものをば「あへなし」とは云ひける。

大伴御行の大納言は、我が家にありとある人を召し集めて、宣はく、「龍の首に五色の光ある玉あり。それを取りて奉りたらむ人には、願はむ事を叶へむ」と宣ふ。男ども、仰の事を承りて申さく、「仰の事は最も尊し。但し此の玉、容易く得取らじを、況や龍の首の玉は如何取らむ」と申し合へり。大納言宣ふ、「君の仕人と云はむ者は、命を捨てても、己が君の仰事をば叶へむとこそ思ふべけれ。此の國になき天竺唐土の物にもあらず。此の國の海山より龍は降り昇るものなり。如何に思ひてか、汝等難き物と申すべき」。男ども申すやう、「さらば如何はせむ。難き物なりとも、仰事に従ひて、索めに罷らむ」と申す。大納言は笑ひて、「汝等君の仕人と名を流しつ。君の仰事をば如何は背くべき」と宣ひて、龍の首の玉取りにとて、出し立て給ふ。この人々の、道の糧食物に、殿の内絹・綿・錢など、ある限り取り出で、添へて遣はす。この人々ども、歸るまで、齋居をして、我は居らん。この玉取り得では、家に歸り來な」と宣はせけり。各仰承りて、罷り出でぬ。龍の首の玉取り得ずば、歸り來なと宣へば、何地もく、足の向きたらむ方へ往なむとす。斯かる好色事をし給ふこと」と誹り合へり。賜はせたる物は、各分けつゝ取り、或は己が家に籠り居、或は己が行かま欲しき所へ往ぬ。親君と申すとも、斯く便宜無き事を仰せ給ふ事」と事ゆかぬもの故、大納言を諷り合ひたり。かぐや姫置るむには、例のやうには見悪し」と宣ひて、麗しき屋を造り給ひて、

漆を塗り、蒔繪をし、彩色し給ひて、屋の上には、絲を染めて、色々に葺かせて、内々の装置には、云ふべくもあらぬ綾織物に繪を書きて、間毎に張りたり。從來の妻どもは皆追ひ拂ひて、赫映姫を必ず婚はむ設備して、獨明し暮し給ふ。遣はし、人は、夜晝待ち給ふに、年越ゆるまで音もせず。心もとながりて、甚忍びて、たゞ舍人二人召繼として、微装れ給ひて難波におはしまして、問ひ給ふ事は、「大伴大納言の人や、船に乗りて、龍殺して、そが首の玉取れるとや聞く」と問はするに、船人答へて曰く、「怪しき事かな」と笑ひて、「然る業する船もなし」と答ふるに、懦弱き事する船人にもある哉。得知らで、斯く云ふと思して、「我が弓の力は、龍あらば、ふと射殺して、首の玉は取りてむ。遅く來る奴輩を待たじ」と宣ひて、船に乗りて、海毎に歩き給ふに、甚遠くて、筑紫の方の海に漕ぎ出で給ひぬ。如何しけむ。迅き風吹きて、世界暗がりて、船を吹きもて歩く。何れの方とも知らず、船を海中に罷り出でぬべく吹き廻して、浪は船に打ち懸けつゝ巻き入れ、雷は落ち懸かるやうに、閃き懸かるに、大納言は惑ひて、「未だ斯かる怪しき目は見ず。如何ならむとするぞ」と宣ふ。楫取答へて申す、「多年船に乗りて罷り歩くに、未だ斯く怪しき目を見ず。御船、海の底に入らずは、雷落ち懸かりぬべし。若し幸に神の助あらば、南海に吹かれおはしぬべし。うたてある主の御許に仕へ奉りて、不覺なる死をすべかめる哉」とて、楫取泣く。大納言、これを聞きて宣

はく、「船に乗りては、楫取の申す事をこそ、高き山とも頼め。何故、斯く頼もしげ無き事を申すぞ」と、青嘔吐を吐きて宣ふ。楫取答へて申す、「神ならねば、何事をか仕う奉らむ。風吹き、浪烈しけれども、雷さへ頭上に落ち懸かるやうなるは、龍を殺さむと、求め給ひ候へば、斯くあなり。疾風も、龍の吹かするなり。はや神に祈り給へ」と云へば、「善きことなり」とて、楫取の御神聞し召せ、をぢなく心幼く、龍を殺さむと思ひけり。今より後は、毛の末一筋をだに、動かし奉らじ」と、祝詞を喚叫ちて立ち居、泣く泣く呼ばひ給ふ事、千度ばかり申し給ふ故にやあらむ、漸う雷鳴り止みぬ。少し明りて、風は猶速く吹く。楫取の曰く、「是は、龍の所爲にこそありけれ。此の吹く風は、良き方の風なり。悪しき方の風にはあらず。よき方に赴きて、吹くなり」と云へども、大納言は、是を聞き入れ給はず。三四日吹きて返し寄せたり。濱を見れば播磨の明石の濱なりけり。大納言、南海の濱に吹き寄せられたるにやあらむと思ひて、歎息き臥し給へり。船にある男ども、國司に告げたれば、國の司參で訪ふにも、得起き上り給はで、船底に臥し給へり。松原に御筵敷きて、おろし奉る。その時にぞ、南海にあらざりけりと思ひて、辛うじて起き上り給へるを見れば、風いと重き人にて、腹いとふくれ、此方彼方の目には、李を二つ付けたる様なり。これを見奉りてぞ、國の司も微笑みたる。國司に仰せ給ひて、腰輿作らせ給ひて、呻吟ぶく荷はれて、家に入り給ひぬる

を、争でか聞きけむ。遣はし、男ども、参りて申すやう、「龍の首の玉を得取らざりしかばなむ、殿へも得参らざりし。玉の取り難かりし事を知り給へればなむ、勘當あらじとて、参りつる」と申す。大納言起き出でて宣はく、「汝等、能く持て來ずなりぬ。龍は鳴神の類にてこそありけれ。それが玉を取らむとて、許多の人々の害せられなむとしけり。況して龍を捕へたらましかば、又容易く、われは害せられなまし。能く捕へずなりにけり。赫映姫てふ大盜人の奴が、人を殺さむとするなりけり。家の近邊だに今は通らじ。男共も、な歩きそ」とて、家に少し残りたりける物どもは、龍の玉取らぬ者共に賜びつ。これを聞きて、離れ給ひし舊の室は、腹を切りて笑ひ給ふ。絲を茸かせて造りし屋は、鳶鳥の巢に、皆咋ひ持て往にけり。世界の人の云ひけるは、「大伴大納言は、龍の首の玉や取りておはしたる」。否、然もあらず。御眼二つに、李の様なる玉をぞ添へて在したる」と云ひければ、「あな堪へがた」と云ひけるよりぞ、世に調はぬ事をば、「あなたへがた」とは云ひ始めける。中納言石上麻呂は、家に使はるゝ男どもの許に、「燕の巢咋ひたらば告げよ」と宣ふを、承りて、「何の料にかあらむ」と申す。答へて宣ふやう、「燕の持たる子安貝取らむ料なり」と宣ふ。男ども答へて申す、「燕を數多殺して見るにだにも、腹に無きものなり。但し、子産む時なむ、争でか出すらむ。はらくと人だに見れば失せぬ」と申す。又人の申すやう、「大炊寮の飯炊ぐ屋の棟のつくの

穴毎に燕は巢咋ひ侍り。それに、誠實ならむ男どもを率て罷りて、足場を結ひて、上げて窺はせむに、許多の燕、子産まさらむやは。さてこそ取らしめ給はめ」と申す。中納言喜び給ひて、「面白しき事にもあるかな。道理、得知らざりけり。興あること申したり」と宣ひて、誠實なる男ども、二十人ばかり遣はして、足代に上げ据ゑられたり。殿より使間なく給はせて、「子安貝取りたるか」と問はせ給ふ。燕も、人の數多上り居たるに怖ぢて、巢にのぼり來ず。斯る由の御返事を申しければ、聞き給ひて、如何すべきと思し召し煩ふに、彼の寮の官人、くらつ鷹と申す翁、申すやう「子安貝取らむと思し召さば、謀り申さむ」とて、御前に参りたれば、中納言額を合せて、對ひ給へり。くらつ鷹が申すやう、「この燕の子安貝は、悪しく謀りて取らせ給ふなり。さては、得取らせ給はじ。足代に仰山しく、二十人の人の上りて侍れば、あれて寄り參で來すなむ。爲させ給ふべき様は、この足代を毀ちて、人皆退きて、誠實ならむ一人を、荒籠に載せ据ゑて、綱を構へて、鳥の子産まむ間に、綱を釣り上げさせて、ふと子安貝を取らせ給はむなむ、可かるべき」と申す。中納言宣ふやう、「甚善き事なり」とて、足代を毀ちて、人皆歸り參で來ぬ。中納言、くらつ鷹に宣はく、「燕は、如何なる時にか、子を産むと知りて、人をば上ぐべき」と宣ふ。くらつ鷹申すやう、「燕は子産まむとする時は、尾をさゝげて、七度廻りてなむ、産み落すめる。さて七度廻らむ折、引き上げて、

その折、子安貝は取らせ給へ」と申す。中納言喜び給ひて、萬の人にも知らせ給はで、密に寮に在して、男共の中に交りて、夜を晝になして取らしめ給ふ。くらつ鷹斯く申すを、いといたく喜び給ひて宣ふ、「こゝに使はるゝ人にもなきに、願を叶ふる事の嬉しさ」と云ひて、御衣脱ぎて纏頭け給ひつ。「更に、夜さり此の寮にまうで來」と宣ひて遣はしつ。日暮れぬれば、彼の寮におはして見給ふに、誠に燕巢作り。くらつ鷹申すやうに、尾をさゝげて廻るに、荒籠に人を載せて釣り上げさせて、燕の巢に手を差し入れさせて探るに「物もなし」と申すに、中納言、「悪しく探れば無きなり」と腹立ちて「誰ばかり覺えむに」とて、「我上りて探らん」と宣ひて、籠に乗りて釣られ上りて、窺ひ給へるに、燕、尾をさゝげて、いたく廻るに合せて、手を捧げて探り給ふに、手に平める物觸る時に、「我物握りたり。今は下してよ。翁、爲得たり」と宣ひて、集りて疾く下さむとて、綱を引き過して、綱絶ゆる即時八島の鼎の上に、仰様に落ち給へり。人々淺ましがりて、寄りて抱へ奉れり。御目は白眼にて伏し給へり。人々御口に水を掬ひ入れ奉る。辛うじて息出で給へるに、また鼎の上より、手取り足取りして、下げ下し奉る。辛うじて、「御心地は如何思さるゝ」と問へば、息の下にて、「物は少し覺ゆれど、腰なむ動かれぬ。されど、子安貝をふと握り持たれば、嬉しく覺ゆるなり。先づ脂燭さして來。この貝、顔見む」と、御頭擡げて、御手を擴げ給へるに、燕の放り置ける古糞

を握り給へるなりけり。それを見給ひて、「嗚呼、かひなの所爲や」と宣ひけるよりぞ、思ふに違ふ事をば、「かひなし」とは云ひける。貝にもあらずと見給ひけるに、御心地も違ひて、唐櫃の蓋に入れられ給ふべくもあらず。御腰は折れにけり。中納言は、幼稚たる所爲して病む事を、人に聞かせじとし給ひけれど、それを病にていと弱くなり給ひにけり。貝を得取らずなりにけるよりも、人の聞き笑はむ事を、日に添へて思ひ給ひければ、唯に病み死ぬるよりも、人聞き恥かしく覺え給ふなりけり。これをかぐや姫聞きて、とぶらひに遣る歌、

年を経て浪立ち寄らぬ住の江のまつかひなしと聞くは誠か

とあるを、讀みて聞かす。いと弱き心地に頭擡げて、人に紙を持たせて、苦しき心地に辛うじて書き給ふ。

かひは斯くありける物を侘び果て、死ぬる命をすくひやはせぬと書き果て、絶え入り給ひぬ。これを聞きて、かぐや姫少し憐れと思しけり。それよりなむ、少し嬉しき事をば、「かひあり」とは云ひける。

さて、かぐや姫容姿世に似ずめでたき事を、帝聞し召して、内侍中臣のふさ子に宣ふ。「多くの人の身を徒になして、婚はさなるかぐや姫は、如何ばかりの女ぞと、罷りて見て参れ」と宣ふ。ふ

さ子承りて罷れり。竹取の家に、畏りて、請じ入れて逢へり。姫に内侍宣ふ、「仰言に、かぐや姫の容姿、優に御座すとなり。能く見て参るべき由、宣はせつるになむ、参りつる」と云へば、「さらば、斯くと申し侍らむ」と云ひて入りぬ。赫映姫に、「はや彼の御使に對面し給へ」と云へば、かぐや姫「佳き容姿にもあらず。争でか見ゆべき」と云へば、「うたても宣ふ哉。帝の御使をば、争でか疎にせむ」と云へば、かぐや姫答ふるやう、「帝の召して宣はむ事、恐惶しとも思はず」と云ひて、更に見ゆべくもあらず。産める子の様にはあれど、いと心恥かしげに疎なる様に云ひければ、心の儘にも得責めず。姫、内侍の許に歸り出でて、「口惜しく、此の幼き者は、剛情く侍る者にて、對面すまじきと申す」。内侍、「必ず見奉りて参れと、仰言ありつるものを、見奉らでは、争でか歸りまらむ。國王の仰事を、正に世に住み給はむ人の、承り給はではありなむや。いはれぬ事なし給ひそ」と、詞恥しく云ひければ、これを聞きて、況して、かぐや姫聽くべくもあらず、「國王の仰言を背かば、はや殺し給ひてよかし」と云ふ。この内侍、歸り参りて此の由を奏す。帝、聞し召して、「多くの人を、殺してける心ぞかし」と宣ひて、止みにけれど、猶思し召しおはしまして、「この女の謀にや負けむ」と思し召して、竹取の翁を召して、仰せ給ふ。「汝が持て侍る赫映姫を奉れ。顔容佳しと聞し召して、御使を賜びしかど、甲斐なく見えずなりにけり。かく疎略しくやは、習はすべき」

と仰せらる。翁、畏りて、御返事申すやう、「この女の童は、絶えて宮仕つかう奉るべくもあらず侍るを、持て煩ひ侍り、然りとも、罷りて仰せ給はむ」と奏す。是を聞し召して、仰せ給ふやう、「などか、翁の手に養育てたらむものを、心に任せざらむ。この女、若し奉りたるものならば、翁に冠をなどか賜せざらむ」。翁喜びて、家に歸りて、かぐや姫に語らふやう、「斯くなむ、帝の仰せ給へる。猶やは仕う奉り給はぬ」と云へば、かぐや姫答へて曰く、「専ら左様の宮仕つかう奉らじと思ふを、強ひて仕うまつらせ給はゞ、消え失せなむす。御官冠仕う奉りて、死ぬばかりなり」。翁答ふるやう「勿爲給ひそ。官冠も、我が子を見奉らでは、何にかはせむ。然はありとも、何故か、宮仕をし給はざらむ。死に給ふやうやはあるべき」と云ふ「猶虚言かと、仕うまつらせて、死なずやあると見給へ。數多の人の志、疎ならざりしを、空しく爲してしこそあれ。昨日今日、帝の宣はむ事に従かむ、人間羞し」と云へば、翁答へて曰く、「天の下の事は、とありともかゝりとも、御命の危さこそ、大きな障りなれ。猶仕う奉るまじき事を、参りて申さむ」とて、参りて申すやう、「仰の事の忝さに、彼の童を参らせむとて、仕う奉れば、「宮仕に出し立てなば、死ぬべし」と申す。造鷹が手に産ませたる子にてもあらず。昔、山にて見付けたる。斯かれば心ばせも世の人に似ずぞ侍る」と奏せさす。帝仰せ給はく、「造鷹が家は、山本近かなり。御狩の行幸し給はん様にて、見てむや」と宣はす。造鷹が申すやう、「いと善き事なり。何か心もなくて侍らむに、ふと行幸して、御覽せられなむ」と奏すれば、帝、俄に目を定めて、御狩に出で給ひて、かぐや姫の家に入り給ひて、見給ふに、光満ちて、清らに居たる人あり。是ならむと思して、近く寄せ給ふに、逃げて入る。袖を捕へ給へば面を塞ぎて候へど、初め能く御覽じつれば、類なくめでたく覚えさせ給ひて、「許さじとす」とて、率ておはしまさむとするに、かぐや姫答へて奏す、「己が身は、此の國に生れて侍らばこそ使ひ給はめ。いと率ておはし難くや侍らむ」と奏す。帝「何故か、然あらむ。猶率ておはしまさむ」とて、御輿を寄せ給ふに、此のかぐや姫、きと影になりぬ。果敢なく口惜しと思して、「實に凡人にはあらざりけり」と思して、「さらば、御供には率て行かじ、元の御形となり給ひね。それを見てだに歸りなむ」と仰せらるれば、かぐや姫元の形になりぬ。帝、猶めでたく思し召さるゝ事、堰き止め難し。斯く見せつる造鷹を悦び給ふ。さて、仕う奉る百官の人々に、饗應壯麗しう仕う奉る。帝、かぐや姫を留めて歸り給はむ事を、飽かず口惜しく思しけれど、魂を留めたる心地してなむ、歸らせ給ひける。御輿に奉りて後に、かぐや姫に、

歸るさの行幸物憂く思ほえて背きて留まる赫映姫ゆゑ
御返事を

葎はふ下にも年は経ぬる身の何かは玉の臺をも見む

これを、帝御覽じて、いと歸り給はむ空もなく思さる。御心は、更に立ち歸るべくも思されざりけれど、さりとて、夜を明し給ふべきにもあらねば、歸らせ給ひぬ。常に仕う奉る人を見給ふに、かぐや姫の傍に、寄るべくだにあらざりけり。餘人よりは、清らなりと思しける人の、彼に思し合すれば、人にもあらず。かぐや姫のみ御心に懸かりて、唯一人過し給ふ。よしなくて、御后妃達にも渡り給はず。かぐや姫の御許にぞ、御文を書きて通はさせ給ふ。御返事、流石に憎からず聞え交し給ひて、面白き本草に就けても、御歌を詠みて遣はず。

斯様に、御心を互に慰め給ふ程に、三年ばかりありて、春の初めより、かぐや姫、月の面白う出でたるを見て、常よりも物思ひたる様なり。ある人の、月の顔見るは忌む事と制しけれども、ともすれば、人際には月を見ていみじく泣き給ふ。七月の十五日の月に出で居て、切に物思へる氣色なり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げて曰く「かぐや姫、例も月を哀れがり給ひけれども、此の頃となりては、唯事にも侍らざめり。いみじく思し歎く事あるべし。能く見奉らせ給へ」と云ふを聞きて、かぐや姫に云ふやう、「なでふ心地すれば、斯く物を思ひたる様にて月を見給ふぞ。美しき世に」と云ふ。かぐや姫、「月を見れば、世の中心細く哀れに侍り。なでふ物をか歎き侍るべ

き」と云ふ。かぐや姫の在る所に至りて見れば、猶物思へる氣色なり。これを見て、「吾が佛、何事を思ひ給ふぞ。思すらむ事、何事ぞ」と云へば、「思ふ事もなし。物なむ心細く覺ゆる」と云へば、翁「月な見給ひそ。これを見給へば、物思す氣色はあるぞ」と云へば、「争でか、月を見ずてはあらむ」とて、猶月出づれば、出で居つゝ歎き思へり。夕闇には、物思はぬ氣色なり。月の程になりぬれば、猶、時々は打ち歎き泣きなどす。是を、使ふ者共、「猶物思す事あるべし」と囁けど、親を始めて、何事も知らず。

八月の十五日ばかりの月に出で居て、かぐや姫といたく泣き給ふ。人目も、今は包み給はず泣き給ふ。これを見て親共も「何事ぞ」と問ひ騒ぐ。かぐや姫、泣く／＼云ふ、「先々も申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過し侍りつるなり。然のみやはとて、打ち出で侍りぬるぞ。己が身は此の國の人にもあらず。月の都の人なり。それを、昔の因縁ありけるに因りてなむ、此の世界には參で來たりける。今は歸るべきになりければ、此の月の十五日に、彼の舊の國より、迎へに人々參で來むす。さらす罷りぬべければ、思し歎かむが悲しき事を、此の春より思ひ歎き侍るなり」と、云ひて甚じう泣く。翁「此は、なでふ事を宣ふぞ。竹の中より見付け聞えたりしかど、菜種の大きき御座せしを、我が丈立ち並ぶまで養ひ奉りたる我が子を、何人か迎へ

聞えむ。正に許さむや」と云ひて、「我こそ死なめ」とて、泣き喧呼する事、いと堪へ難げなり。かぐや姫の曰く、「月の都の人にて、父母あり。片時の間とて、彼の國より參で來しかども、斯く此の國には、數多の年を経ぬるになむありける。彼の國の父母の事も思えず。此處には、斯く久しく遊び聞えて、馴ひ奉れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど、己が心ならず、罷りなむとする」と云ひて、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人々も、年頃馴ひて、立ち別れなむ事を、心ばへなど、嬋妍に美しかりつる事を見馴ひて、戀しからむ事の堪へ難く、湯水も飲まれず、同じ心に歎かしがりけり。此の事を帝聞し召して、竹取が家に、御使遣はさせ給ふ。御使に、竹取出で逢ひて、泣くこと限りなし。この事を歎くに、髪も白く、腰も屈り、目も爛れにけり。翁、今年は五十ばかりなりけれども、物思には、片時になむ、老になりけると見ゆ。御使、仰言とて翁に曰く、「いと心苦しく、物思ふなるは、誠にか」と仰せ給ふ。竹取泣くく申す、「この十五日になむ、月の都より、かぐや姫の迎へに參で來なる。尊く問はせ給ふ。この十五日には、人々賜はりて、月の都の人參で來ば、捕へさせむ」と申す。御使歸り参りて、翁の有様申して、奏しつる事ども申すを、聞し召して宣ふ、「一目見給ひし御心にだに忘れ給はぬに、明暮見馴れたるかぐや姫を遣りては、如何思ふべき」。彼の十五日、司々に仰せて、勅使には少將高野大國と云ふ人を遣して、六衛の

司合せて、二千人の人を、竹取が家に遣はす。家に罷りて、築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々いと多かりけるに合せて、空ける隙もなく守らす。この守る人々も、弓矢を帶して居り。母屋の内には、女どもを番に据ゑて守らす。姫、塗籠の内に、かぐや姫を抱かへて居り。翁も、塗籠の戸を鎖して、戸口に居り。翁の曰く、「かばかり守る所に、天の人にも負けむや」と云ひて、屋の上に居る人々に曰く、「露も物空にかけらば、ふと射殺し給へ」。守る人々の曰く、「かばかりして守る所に、蝙蝠一つだにあらば、先づ射殺して、外にさらさむと思ひ侍る」と云ふ。翁、これを聞きて、たのもしがり居り。これを聞きて、かぐや姫は、「鎖し籠めて守り戦ふべき下工をしたりとも、彼の國の人を、得戦はぬなり。弓矢して射られじ。斯く鎖し籠めてありとも、彼の國の人來ば、皆開きなむとす。相戦はむとすとも、彼の國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらじ」。翁の云ふやう、「御迎へに來む人をば、長き爪して、眼を掴み潰さむ。さが髪を取りてかなぐり落さむ。さが尻を搔き出で、許多の公人に見せて、恥見せむ」と腹立ち居り。かぐや姫曰く、「聲高に勿宣ひそ。屋の上に居る人どもの聞くにいとまさなし。いますかりつる志どもを、思ひも知らで罷りなむする事の、口惜しう侍りけり。長き契の無かりければ、程なく罷りぬべきなめり、と思ふが、悲しく侍るなり。親達の眷顧を、些少だに仕う奉らで罷らむ道も、安くもあるまじきに、月頃も出で居て、今年ばか

りの暇を申しつれど、更に許されぬに依りてなむ、斯く思ひ歎き侍る。御心をのみ惑はして、去りなむ事の悲しく堪へ難く侍るなり。彼の都の人は、いと清らにて老いもせずなむ、思ふ事もなく侍るなり。然る所へ罷らむするも、いみじくも侍らす。老い衰へ給へる様を見奉らざらむこそ、戀しからめ」と云ひて泣く。翁、「胸痛き事な爲給ひぞ。麗しき姿したる使にも、障らじ」と嫉み居り。かゝる程に、宵打ち過ぎて、子の時ばかりに、家の邊、晝の明さにも過ぎて光りたり。望月の明さを、十合せたるばかりにて、在る人の毛の穴さへ見ゆる程なり。大空より、人、雲に乗りて、下り来て、地より五尺ばかり上りたる程に、立ち連ねたり。これを見て内外なる人の心ども、物に襲はるゝ様にて、相戦はむ心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢取り立てむとすれども、手に力も無くなりて、痿え屈りたる中に、心賢しき者、念じて射むとすれども、外様へいきければ、荒れも戦はで、心地たゞ痴れに痴れて、守り合へり。立てる人共は、装束の清らなる事、物にも似ず。飛車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に、王と思しき人、家に「造鷹參で來」と云ふに。猛く思ひつる造鷹も、物に酔ひたる心地して、俯伏に伏せり。曰く、「汝幼き人、聊かなる功德を、翁作りけるに由りて、汝が助にとて、片時の程とて降しを、許多の年頃、許多の金賜ひて、身を變へたるが如くなりたり。赫映姫は、罪を作り給へりければ、斯く賤しき汝が許に、暫しおはしつ

るなり。罪の限り果てぬれば、斯く迎ふるを、翁は泣き歎く。能はぬ事なり。はや返し奉れ」と云ふ。翁答へて申す、「かぐや姫を養ひ奉ること二十餘年になりぬ。片時と宣ふに、怪しくなり侍りぬ。また異處にかぐや姫と申す人ぞ御座しますらむ」と云ふ。「此處に御座するかぐや姫は、重き病をし給へば、得出でおはしますまじ」と申せば、その返事はなくて、屋の上へ飛車を寄せて、「いざかぐや姫、穢き所に争で久しく御座せむ」と云ふ。立て籠めたる所の戸、即ちたゞ開きに開きぬ。格子ども、人は無くして開きぬ。姫抱きて居たるかぐや姫、外に出でぬ。得留むまじければ、唯差し仰ぎて、泣き居り。竹取心惑ひて泣き伏せる所に寄りて、かぐや姫云ふ、「此方にも、心にもあらで、斯く罷るに、昇らむをだに見送り給へ」と云へども、「何しに、悲しきに見送り奉らむ。われをば如何にせよとて、棄てゝは昇り給ふぞ。具して率ておはせね」と泣きて伏せば、「御心惑ひぬ。文を書き置きて罷らむ。戀しからん折々、取り出でゝ見給へ」とて、打ち泣きて書く事は、「此の國に生れぬるとならば、數かせ奉らぬ程まで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬる事、返すく本意なくこそ覺え侍れ。脱ぎ置く衣を、形見と見給へ。月の出でたらむ夜は、見遣せ給へ。見捨て奉りて罷る空よりも、落ちぬべき心地す」と書き置く。天人の中に、持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。又あるは、不死の藥入れり。一人の天人云ふ、「壘なる御藥奉れ。汚き所の物、聞し食したれば、御心地

悪しからむものぞ」とて、持て寄りたれば、聊か嘗め給ひて、「少し形見」とて脱ぎ置く衣に包まむとすれば、ある天人包ませず。御衣を取り出で、著せむとす。その時に、かぐや姫、「暫し待て」と云ひて、「衣著つる人は、心異になるなり。物一言、云ひ置くべき事あり」と云ひて文書く。天人、「遅し」と心元ながり給ふ。かぐや姫、「物知らぬ事な宣ひそ」とていみじく静かに天皇に御文奉り給ふ。狼狽てぬ様なり。「斯く數多の人を賜ひて、留めさせ給へど、許さぬ迎へ參で来て、取り率て罷りぬれば、口惜しく悲しき事、宮仕つかう奉らずなりぬるも、斯く煩はしき身にて侍れば、心得ず思し召しつらめども、心強く承らずなりにし事、無禮なる者に思し召し留められぬるなむ、心にとまり侍りぬる」とて、

今はとて天の羽衣著る折ぞ君をあはれと思ひ出でぬる

とて、童の藥添へて、頭中將を呼び寄せて奉らす。中將に、天人取りて傳ふ。中將取りつれば、ふと天の羽衣打ち著せ奉りつれば、翁を愍然し悲しと思しつる事も失せぬ。この衣著つる人は、物思も無くなりければ、車に乗りて、百人ばかり、天人具して昇りぬ。その後、翁姫、血の涙を流して惑へど甲斐なし。彼の書き置きし文を読み聞かせけれど、「何せむにか、命も惜しからむ。誰が爲にか、何事も益もなし」とて藥も喰はず。聽て起きも上らず、病み臥せり。中將、人々を引き

具して、歸り參りて、かぐや姫を得戦ひ留めずなりぬる事を、細々と奏す。藥の童に、御文添へて進らす。披げて御覽じて、いといたくあはれがらせ給ひて、物も聞し食さず、御遊なども無かりけり。大臣上達部を召して、「何れの山か、天に近き」と問はせ給ふに、或人奏す、「駿河の國にある山なむ、此の都も近く、天も近く侍る」と奏す。これを聞かせ給ひて、

逢ふ事も涙に浮かぶ我が身には死なぬ藥も何にかはせむ

彼の奉る不死の藥の童に、御文具して、御使に賜はす。勅使には、調岩笠と云ふ人を召して、駿河の國にあなる山の巔に持て行くべき由、仰せ給ふ。峯にて、爲べきやう教へさせ給ふ。御文、不死の藥の童並べて火を付けて燃やすべき由、仰せ給ふ。その山承りて、兵士ども數多具して、山へ登りけるよりなむ、その山をば、「ふじの山」とは名付けゝる。その煙、未だ雲の中へ立ち昇るとぞ云ひ傳へたる。

竹取物語 終

伊勢物語

第一段

昔、男ありけり。初冠つひかづがかりして、奈良の京みやこ、春日の里しに領る由縁よしして、狩かりに往いにけり。その里いにいと婀娜なまめきたる女同胞をんなはらから住すみけり。かの男、垣間かいま見みてけり。思おもほえず故里ふるさとにいと不は似した合なくてありければ、心地こころ惑まひにけり。男著おたりける狩衣かりぎぬの裾すそを切りて歌を書かきて遣やる。その男お信しん夫ぶ摺ずりの狩衣かりぎぬをなむ著おたりける。

春日野かすがのの若紫わかしほの摺衣ずりぎぬしのぶの亂みだれ限かぎり知しられず

となむ、追お追おぎつて云いひ遣やりける。序面ついで白しろき事こととや思おもひけむ。

陸奥むつの信夫しんぶ摺ずり誰たれ故ゆゑに亂みだれそめにし我われならなくに

と云いふ歌うたの心こころばへなり。昔人むかしびとは斯いく逸い速はやき風雅ふうやをなむしける。

第二段

昔、男ありけり。奈良の京は離れ、此の京は、人の家未だ定らざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世の人には勝れりけり。容姿よりは、心なむ勝りたりける。一人のみにあらずりけらし。それを彼の忠實男うち物語らひて歸り來て、如何思ひけむ、時は三月の朔日、雨そほ降るに遣りける。

起きもせず寝もせて夜を明かしては春のものとながめ暮しつ

第三段

昔、男ありけり。懸想しける女の許に、鹿尾菜と云ふ物を遣るとて、

思ひあらば葎の宿に寝もしなむひしきものには袖をしつゝも

(二條の後の、未だ帝にも仕う奉り給はで、凡人にて御座しましける時の事なり。)

第四段

昔、東の五條に大后の宮御座しましける西の對に住む人ありけり。それを本意にはあらで、行き訪ふ人、志深かりけるを、正月の十日ばかりに外に隠れにけり。在り所は聞けど、人の行き通ふべき所にもあらずりければ、猶憂しと思ひつゝなむありける。又の年の正月に、梅の花盛に、去年を思ひ出で、彼の西の對に往きて、立ちて見、居て見、見れど、去年に似るべくもあらず。打ち泣

きて、荒なる板敷に、月の傾くまで臥せりて、去年を戀ひて詠める、

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つは舊の身にして

と詠みて、夜のほのくと明くるに、泣くく歸りにけり。

第五段

昔、男ありけり。東の五條邊に、いと忍びて行きけり。密なる所なれば、門よりも得入らで童の踏み穿けたる築地の崩れより通ひけり。人繁くもあらねど、度重りければ、主人聞き付けて、その通路に、夜毎に人を据ゑて守らせければ、彼の男往けども得逢はで歸りけり。さて詠める、

人知れぬ我が通路の關守は宵々毎に打ちも寝なむむ

と詠みけるを聞きて、いといたう怨じけり。主人免してけり。

(二條の後に、忍びて參りけるを、世の聞えありければ、兄達の守らせ給ひけるとぞ。)

第六段

昔、男ありけり。女の得逢ふまじかりけるを、年を経て、よばひ渡りけるを、辛うじて、女の心合はせて盗み出でて、いと暗きに率て行きけり。芥川と云ふ河を往きければ、草の上に置きたりける露を、かれは何ぞ」となむ男に問ひけるを、ゆく先はいと遠く、夜も更けにければ、鬼ある所と



も知らで、雷さへいといみじう鳴り、雨も甚う降りければ、荒なる倉のありけるに、女をば奥に押し入れて、男は、弓胡籙を負ひて、戸口に、はや夜も明けなむと思ひつゝ居たりけるに、鬼はや、女をば一口に食ひてけり。「あなや」と云ひけれど、雷の鳴る騒ぎに得聞かざりけり。漸う夜も明け行くに、見れば率て來し女もなし。足摺りをして泣けども甲斐なし。

白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消なまし物を

(是は二條の後の、いとこの女御の御許に、仕う奉るやうにて居給へりけるを、容姿の甚愛たくおはしければ、盗みて負ひて出でたりけるを、御兄堀河の大臣、太郎國經の大納言、未だ下蔭にて、内へ参り給ふ道に、いみじう泣く人あるを聞き付けて、留めて取り返しておはしける。それを斯く鬼とは云ふなりけり。未だ甚若うて、後の常人に御座しける折の事とかや。)

第七段

昔、男ありけり。京にあり侘びて、東に往きけるに、伊勢尾張の境界の海邊に行くに、浪のいと白く立つを見て、

いとゞしく過ぎにし方の悲しきに羨ましくも返る浪かな
となむ詠めりける。

第八段

昔、男ありけり。その男、身を益無きものに思ひ做して、京には居らじ、住むべき所素めむとて往きけり。信濃の國、淺間の嶽に烟の立つを見て、

信濃なる淺間の嶽に立つ煙遠方人の見やは咎めぬ

素より友とする人、一人二人して、諸共に往きけり。道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。三河の國、八橋と云ふ所に到りぬ。其處を八橋と云ふ事は、水の蜘蛛手に流れ別れて、木八つ渡せるによりてなむ八橋とは云へる。その澤の邊の木陰に下り居て、餉食ひけり。その澤に、燕子花甚面白く咲きたり。それを見て、ある人の曰く「かきつばたと云ふ五文字を、句の上に据ゑて、旅の心を詠め」と云ひければ、詠める、

唐衣きつゝ、馴れにしつましあれば遙々來ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人、餉の上に涙落して、潤びにけり。
行きく、駿河の國に到りぬ。宇津の山に到りて、我が入らむとする道は、いと暗う細きに、葛は繁りて、物心細く、すゞろなる目を見る事と思ふに、修行者逢ひたり。「斯かる道には、争でおはする」と云ふに、見れば見し人なりけり。京に、その人の許にとて文書きてつく。

駿河なる宇津の山邊の現にも夢にも人の逢はぬなりけり
富士の山を見れば、五月の下旬に、雪いと白う降れり。

時知らぬ山はふじの嶺いつとてか鹿の子斑に雪の降るらむ

その山は、爰に譬へば、比叡の山を、二十ばかり重ね上げたらむ程して、形は尻鹽の様になむありける。猶行きく、武藏の國と、下總の國との中に、いと大きな川あり。それを隅田川と云ふ。その河の邊に、群れ居て思ひ遣れば、限りなく遠くも來にける哉と、侘びあへるに、渡守「はや船に乗れ。日も暮れなむ」と云ふに、乗りて渡らむとするに、皆人、物侘びしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。然る折しも、白き鳥の、喙と足と赤き、鳴の大ききなる、水の上に遊びつゝ、魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人、見知らず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」と云ふを聞きて、

名にし負はゞいざ言問はむ都鳥我が思ふ人は有りや無しやと

と詠めりければ、船、擧りて泣きにけり。

第九段

昔、男、武藏の國まで惑ひ歩きけり。楮、其の國にある女を結婚ひけり。父は「他人に婚はせむ」

と云ひけるを、母なむ貴なる人にと心付けたりける。父は平人にて、母なむ藤原なりける。扱なむ、貴なる人と思ひける。この婿がねに詠みておこせたりける。住む所なむ、入間の郡、みよし野の里なりける。

みよし野の田の面の雁も一向に君が方にぞ寄ると鳴くなる

婿がね、返し

我が方によると鳴くなるみよし野の田の面の雁を何時か忘れむ

となむ。他の國にても、斯かる事は絶えずぞありける。

第十段

昔、男、東へ行きけるに、友達に道より云ひおこせける、

忘るなよ程は雲井になりぬとも空行く月の廻り逢ふまで

第十一段

昔、男ありけり。人の女を盗みて、武藏野へ率て行く程に、盗人なりければ國の守に搦められにけり。女をば叢の中に隠し置きて逃げにけり。道來る人、「此の野は盗人あなり」とて、火付けむとすれば、女侘びて、

武藏野は今日は勿燒きそわか草の夫も籠れり我も籠れりと詠むを聞きて、女をば取りて、共に率て往にけり。

第十二段

昔、武藏なる男、京なる女の許に、「聞ゆれば恥かし、聞えねば苦し」と書きて、表書に武藏と書き、おこせて後、音もせずなりにければ、京より女、

武藏とすがに懸けて頼むには訪はぬも辛し訪ふも煩しとあるを見てなむ、堪へ難き心地しける。

訪へば云ふ訪はねば恨む武藏と斯かる折にや人は死ぬらむ

第十三段

昔、男、陸奥の國に漫に行き到りにけり。其處なる女、京の人は珍らかにや覺えけむ、切に思へる心なむありける。さて彼の女、

なかくに戀に死なずは蠶にぞ成るべかりける玉の緒ばかり

歌さへぞ鄙びたりける。流石に哀れと思ひけむ、往きて寢にけり。夜深く出でにければ、女、夜も明けば狐に食めなむ腐鶏の未明に鳴きて夫を歸りつる

と云へるに、男、京へなむ往ぬるとて、

栗原の姉波の松の人ならば都の土産にいざと云はましを

と云へりければ、喜びて、「思ひけり」とぞ云ひ居りける。

第十四段

昔、陸奥の國にて、なでふ事なき人の女に通ひけるに、怪しう左様にてあるべき女にはあらず見えければ、

信夫山忍びて通ふ道もがな人の心の奥も見るべく

女、限りなく愛たしと思へど、然るさがなき蝦夷所にて、如何はせむ。

第十五段

昔、紀の有常と云ふ人ありけり。三代の帝に仕う奉りて、時に遇ひけれど、後は世變り、時移りにければ、世の常の人の如もあらず。人柄は、心美しう、上品はかなる事を好みて、他人にも似ず、世の渡らひ心もなく、貧しくても、猶昔よかりし時の心ながらに、世の常の事も知らず。年頃あひ馴れたる妻、漸う床離れて、遂に尼になりて、姉の先立ちて、尼になりけるが許へ行く。男誠に陸まじき事こそなかりけれ。今はとて行くを、いと哀れとは思ひけれど、貧しければ、爲る事もな

かりけり。思ひ侘びて、懇に相語らひける友達の許に、「斯うく、今はとて罷るを、何事も聊かなる事も得爲で、遣はす事」と書きて、奥に、

手を折りて經にける年を數ふれば十と云ひつゝ、四つは經にけり
此の友達、是を見て、いと哀れと思ひて、夜の物まで贈りて詠める、

年だにも十とて四つは經にけるを幾度君を頼みきぬらむ

斯く云ひ遣りたりければ、喜びに添へて、

これやこの天の羽衣宜しこそ君が御衣に奉りけれ

喜びに堪へ兼ねて、また

秋や來る露や紛ふと思ふまであるは涙の降るにぞありける

第十六段

昔、年頃訪れざりける人の、櫻の盛に見に來りければ、主人

仇なりと名にこそ立てれ櫻花年に稀なる人も待ちけり

返し

今日來すば明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや

第十七段

昔、生心ある女ありけり。男近うありけり、女、歌詠む人なりければ、心見むとて、菊の花の移ろへるを折りて、男の許へ遣る。

紅に匂ふは何處白雪の枝も撓に降るかとも見ゆ

男知らず詠みに詠みける、

紅に匂ふが上の白雪は折りける人の袖かとぞ見る

第十八段

昔、男、宮仕しける女のかたに、御達なりける人をあひ知りて、程もなく離れにけり。同じ所なれば、女の目には見ゆるものから、男はあるものにも思ひたらねば、女、

天雲の餘所にも人のなり行くか流石に目には見ゆるものから

と詠めりければ、男、返し

行き返り空にのみして經ることは我が居る山の風迅みなり

と詠めりけるは、數多男ある女になむありける。

第十九段

昔、男、大和にある女を見て、よばひて逢ひにけり。さて程經て、宮仕する人なりければ、歸り來る道に、三月ばかりに、楓の紅葉のいと面白きを折りて女の許に、道より云ひ遣る。

君がため手折れる枝は春ながら斯くこそ秋の紅葉しにけれとて遣りたりければ、返事は、京に著きてなむ、持て來りける。

何日の間に移ろふ色の付きぬらむ君が里には春なかるらし

第二十段

昔、男女、いと好く思ひ交して、異心なかりけり。然るを如何ありけむ、些少なかる事に就けて、世の中を憂しと思ひて、出で、往なむと思ひつゝ、斯かる歌をなむ詠みて、物に書き付けゝる。

出で、往なば心輕しと云ひやせむ世の有様を人は知らずて

と詠み置きて、出でて往にけり。此の男、斯く書き置きたるを見て、怪しう心置かるべき事も覺えぬを、何によりてならむと、いと甚ううち泣きて、何方に求め行かむと、門に出で、と見かう見けれど、何處をはかりとも覺えざりければ、歸り入りて、

思ふ甲斐なき世なりけり年月を徒に契りて我や住ひし

と云ひて眺め居り。

人はいさ思ひやすらむ玉蔓面影にのみ出で、見えつゝ、

此の女、いと久しくありて、念じ侘びてにやありけむ、云ひおこせける。

今はとて忘るゝ草の種をだに人の心に任せずもがな

返し

忘れ草植うとだに聞くものならば思ひけりとは知りもしなまし

又々ありしより、殊に云ひ交して、男

忘るらむと思ふ心の疑ひにありしより殊に物ぞ悲しき

返し

中空に立ちゐる雲の跡もなく身の果敢なくもなりぬべきかな

とは云ひけれど、己が世になりければ、疎くなりけり。

第二十一段

昔、果敢なくて絶えにける中、猶や忘れざりけむ、女の許より、憂きながら人をば得しも忘れねばかつ恨みつゝ猶ぞ戀しきと云へりければ、「さればよ」と思ひて、男、

逢ひは見で心一つを川島の水の流れて絶えじとぞ思ふ

とは云ひけれど、その夜いきて寝にけり。古、行く先の事どもなど云ひて、

秋の夜の千夜を一夜に擬へて八千夜し寝ばや飽く時のあらむ

返し

秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉残りて鳥や鳴きなむ

古よりも、あはれにてなむ通ひける。

第二十二段

昔、田舎行商しける人の子ども、井のもとに出で、遊びけるを、成人になりければ、男も女も恥ぢ交してありけれど、男は此の女をこそ得めと思ひ、女も此の男をこそと思ひつゝ、親の婚はする事も聞かでないありける。さて、此の隣の男の許より斯くなむ、

筒井筒井筒にかけし鷹が丈生ひにけらしなあひ見ざる間に

女返し

較べ來し振分髪も肩過ぎぬ君ならずして誰か撫づべき

斯く云ひくゝて、遂に本意の如く婚ひにけり。さて年頃経る程に、女の親亡くなりて、たよりな

くなる儘に、諸共に、云ふ甲斐なくてあらむやはとて、河内の國高安の郡に、往き通ふ所、出で來にけり。さりけれど、この舊の女、悪しと思へる氣色もなくて、出したて、遣りければ、男、異心ありて、斯かるにやあらむと、思ひ疑ひて、前栽の内に隠れ居て、かの河内へ往ぬる貌にて見れば、この女、いと好う假粧じて、打ち眺めて

風吹けば沖つ白浪たつ田山夜半にや君が一人越ゆらむ

と詠みけるを聞きて、限りなく悲しと思ひて、河内へも、をさく通はずなりにけり。さて、稀々、彼の高安に來て見れば、初めこそ、心にくくも装りけれ。今は打ち解けて、髪を頭に巻き上げて、面長やかなる女の、手づから飯匙を取りて、筒子の器に盛りけるを見て、心憂がりて、行かすなりにけり。さりければ、彼の女、大和の方を見遣りて、

君が邊見つゝを居らむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも

と云ひて見出すに、辛うじて大和人來むと云へり。歡びて待つに、度々過ぎぬれば、

君來むと云ひし夜毎に過ぎぬれば頼まぬもの戀ひつゝぞ居る

と云ひけれど、男通ますなりにけり。

第二十三段

昔、男女、片田舎に住みけり。男宮仕しにとて、別れを惜みて行きける儘に三年來さりければ、待ち侘びたりけるに、又、いと懇ねんごろに云ひける人に、「今宵はあはむ」と契りたりけるに、彼の男來りけり。「この戸開け給へ」と叩きけれど、開けで、歌をなむ詠みて出したりける。

新玉の年の三年を待ち侘びてたゞ今宵こそ新枕すれ

と云ひ出したりければ、

梓弓眞弓つき弓年を経て我がせしが如親愛みせよ

と云ひて、往なむとしければ、女、

梓弓曳けど曳かねど昔より心は君によりにしものを

と云ひけれど、男歸りにけり。女、いと悲しくて、後に立ちて、追ひ往けど、得追ひ付かで、清水のある所に伏しにけり。其處なる石に指の血おまゆして書き付けゝる。

あひ思はで離れぬる人を留め兼ね我が身は今ぞ消え果てぬめる

と書きて、いたづらになりけり。

第二十四段

昔、男ありけり。逢はじとも云はさりける女の、流石ながしなりけるが許に云ひ遣りける。

秋の野に笹分けし朝の袖よりも逢はで寝る夜ぞ濡ち勝りける
色好みなる女、返し
みるめなき我が身をうらと知らねばやかれなで海人の足懈たゆく來る

第二十五段

昔、男、五條邊わたりなりける女を、え得ずなりにける事と、侘びたりける人の返事に、

思ほえず袖そでに湊みなとの騒さわぐかな唐船からぶねの寄りしばかりに

第二十六段

昔、男、女の許もとに一夜往きて、又も往かずなりにければ、女の親腹立ちて、手洗ふ所に、貫簀ぬさを取りて、投げ捨てければ、鹽たぐひの水に、泣く影の見えけるを、自ら

我ばかり物思ふ人は又もあらじと思へば水の下にもありけり

と、詠めりけるを、かの來きこさりける男、聞きて、

水口みなぐちに我や見ゆらむ蛙さへ水の底にて諸聲もろこゑに鳴く

第二十七段

昔、色好みいろこのなりける女、出でて往にければ、云ふ甲斐なくて、男

などて斯く逢ひがたみともなりぬらむ水漏らさじと契りしものを

第二十八段

昔、東宮の女御の御方の花の賀に、召しあげられたりけるに、近衛司なりける人、花に飽かぬ歎息はいつもせしかども今日の今宵に似る時はなし

第二十九段

昔、男、僅なりける女の許に、逢ふ事は玉の緒ばかり思ほえて辛き心の長く見ゆらむ

第三十段

昔、男、宮の中にて、ある御達の局の前を渡りけるに、何の仇にか思ひけむ、よしや草葉のならむさが見む」と云ひければ、男、罪もなき人を咒咀へば忘れ草己が上にぞ生ふと云ふなる
と云ふを、嫉う女も思ひけり。

第三十一段

昔、男、物云ひける女に、年頃ありて

古の倭文の麻環繰り返し昔を今になす由もがな
と云へりけれど、何とも思はずやありけむ。

第三十二段

昔、男、津の國、免原の郡に住みける女に通ひける。此の度歸りなば、又は來じと思へる氣色を見て、女の恨みければ、男、蘆邊より滿ち來る潮の彌増しに君に心を思ひ増すかな
返し

隠江に思ふ心を争でかは船さす棹のさして知るべき

田舎人の詞にては、佳しや悪しや。

第三十三段

昔、男、無情かりける人の許に、云へばえに云はねば胸の騒がれて心一つに歎く頃かな
思ひく／＼て云へるなるべし。

第三十四段

昔、男、心にもあらで絶えたる人の許に、

玉の緒を沫緒あわぢによりて結べれば絶えての後も逢はむとぞ思ふ

第三十五段

昔、男、忘れぬるなめりと問言とことしける女の許に、

谷狭せはみ峯まで這へる玉葛たまかづら絶えむと人を我が思はなくに

第三十六段

昔、男、色好みなりける女に逢へりけり。後うしろめたくや思ひけむ、

われならで下紐したぢ解とくな朝顔あさがおの夕影待たぬ花にはありとも

返し

二人ふたりして結びし紐を一人して逢ひ見るまでは解かじとぞ思ふ

第三十七段

昔、紀きの有常ありつね、物へ往いきて、久しう歸らざりけるに、云ひ遣る。

君により思ひ習ひぬ世の中よの人はこれをや戀と云ふらむ

返し

習はねば世よの人毎ひとごとに何をかも戀とは云ふと問ひし我しも

第三十八段

昔、西院さいいんの帝みかどと申す帝御座みかどがはしましけり。その帝の内親王みに、崇子たかこと申すいまそかりけり。その皇

子こうせ給ひて、御葬おんはふりの夜、その宮の隣なりける男、御葬おんはふり見むとて、女車おんなぐるまに相乗りて、出でた

りけり。いと久しうゐて出で奉らず。打ち歎きて、止みぬべかりける間に、天あめの下の色好いろこのみ、源の

至いたると云ふ人、これも物見るに、この車を、女車と見て、寄り來て、兎角うづつなまめく間あひだに、彼の至いた、螢

を取りて、車に入れたりけるを、車なりける人、この螢の、灯ともす火にや見ゆらむと思ひて、消けちな

むとす。さて乗れる男の詠める。

出で、いなば限りなるべし燈盡ともしつき年經ぬるかと哭なく聲を聞け

彼の至いたる、返し

いと哀れ哭なくぞ聞ゆる燈火の消ゆるものとも我は知らずな

となむ返したりける。天あめの下の色好いろこのみの、歌にては尋常たはぞありける。

第三十九段

昔、若き男、けしうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする親ありて、思ひもぞつくとて、この女

を、外へ逐ひ遣らんとす。然こそ云へ、未だ逐ひ遣らず。人の子なれば、心の勢なくて、得留めず。女も賤しければ、争ふ力なし。然る間に、思ひは、彌勝りに勝る。俄に、親、この女を逐ひうつ。

男、血の涙を流せども、留むる由なし。率て出で、往ぬ。女、歸る人に付けて、
何處まで送りはしつと人間は、飽かぬ別れの涙川まで
男、泣くく詠める、

厭ひては誰か別れの難からむありしに勝る今日は悲しも

と詠みて、絶え入りければ、親あわてにけり。等閑に思ひてこそ云ひしか、いと斯くしもあらじと思ふに、誠に絶え入りたれば、惑ひて願など立てけり。今日の入相ばかりに、絶え入りて、又の日の戌の時ばかりになむ、辛うじて息出でたりける。昔の若人は、然る好ける物思ひをなむしける。今の翁、正に爲なむやは。

第四十段

昔、女同胞二人ありけり。一人は、賤しき男の貧しき、一人は、貴なる男の徳ある持ちたりけり。賤しき男もたる、十二月の晦日に、袍を洗ひて、手づから張りけり。志はいたしけれど、さる賤しき業も習はざりければ、袍の肩を張り破りてけり。せむ方もなくて、たゞ泣きに泣きけり。これ

を彼の貴なる男聞きて、いと心苦しかりければ、いと清らなる緑衫の袍を、たゞ片時に見出で、遺るとて、

紫の色濃き時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

武藏野の心なるべし。

第四十一段

昔、男、色好みと知るく、女を相知れり。されど、憎く、將あざりけり。屢往きけれど、猶いと後めたく、然りとて、往かて將得あるまじかりける中なりければ、二日三日ばかり、障る事ありて、え往かて斯くなむ。

出で、來し跡だに未だ變らじを誰が通路と今はなるらむ

物疑はしさに、詠めるなりけり。

第四十二段

昔、賀陽親王と申す御王おはしましけり。その親王、女を思し召して、いと好く、恵み使う給ひけり。いと婀娜きてありけるを、若き人はゆるさざりけり。我のみと思ひけるを、又人聞き付けて、文遣るとて、郭公の形を作りて、

郭公汝が鳴く里の數多あれば猶疎まれぬ思ふものから
と云へり。この女、機嫌を取りて、

名のみ立つ賤の田長は今朝ぞ鳴く庵數多に疎まれぬれば

時は、五月になむありける。男、返し、

庵多き賤の田長は猶頼む我が住む里に聲し絶えずば

第四十三段

昔、男ありけり。縣へ行く人に、馬の餓せむとて、呼びたりけるに、疎き人にしあらざりければ、家刀自して盃さゝせて、女の装束纏頭けむとす。主人の男、歌詠みて、裳の腰に結び付けさす。

出で、行く君が爲にと脱ぎつれば我さへもなかりにけるかな

(此の歌は、あるが中に、面白ければ、心留めて讀ますば、腹に深き味も出で來じ。)

第四十四段

昔、男ありけり。人の娘の、傳く、争で此の男に物云はむと思ひけり。打ち出でむ事、難くやありけむ。物惱になりて、死ぬべき時に、「斯くこそ思ひしか」と云ひけるを、親聞き付けて、泣く泣く告げたりければ、惑ひ來りけれど、死にければ、徒然と籠り居りけり。時は、六月の晦日、いと暑

きころほひに、宵は遊び居りて、夜更けて、稍涼しき風吹きけり。螢高く飛び上る。この男、見臥りて、

飛ぶ螢雲の上まで往ぬべくば秋風吹くと雁に告げこせ

暮れ難き夏の日ぐらし悵望むればその事となく物ぞ悲しき

第四十五段

昔、男、いと親愛しき友ありけり。片時去らず、相思ひけるを、他の國へ往きけるを、いとあはれと思ひて別れけり。月日經て、送來せたる文に、「あさましよう、得對面せで、月日經にけること、忘れやし給ひにけむと、甚く思ひ侘びてなむ侍る。世の中の人の心は、目離るれば、忘れぬべきものにこそあめれ」と云へりければ、詠みて遣る。

目離るとも思ほえなくに忘らるゝ時しなれば面影に立つ

第四十六段

昔、男、懇に、争でと思ふ女ありけり。されど、此の男を徒なりと聞きて、つれなさのみ勝りつつ云へる。

大幣の引く手あまたに聞ゆれば思へど得こそ頼まさりけれ

返し、男

大幣おほなひと名にこそ立てれ流れても遂に寄る瀬はありてふものを

第四十七段

昔、男ありけり。馬の餞はなむけせむとて、人を待ちけるに、來こざりければ、今ぞ知る苦しきものと人待たむ里をば離わかれず訪たづふべかりけり

第四十八段

昔、男、妹いものいと艶美あやめしげなるが、琴弾かみきけるを見居りて、うら若み寝よげに見ゆる若草を人の結ばむ事をしぞ思ふ返し

初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなく物を思ひけるかな

第四十九段

昔、男ありけり。怨むる人を怨みて、鶏卵とりのたまごを十づゝ十は重ぬとも如何頼いかんまむ人の心をと云へりければ、

朝露は消え残りてもありぬべし誰か此の世を頼み果つべき

又、男

吹く風に去年の櫻は散らすとも噫あな頼たのみ難人の心は

又、女、返し

行く水に數書くよりも果敢なきは思はぬ人を思ふなりけり

(又、男

行く水と過ぐる齡としひと散る花といづれ待ててふ事を聞くらむ) 徒競あだくら互あひにしける男女をとこをんなの、忍しのび歩ありしける事なるべし。

第五十段

昔、男、人の前栽せんざいに、菊植きくえけるに 植うえし植うえば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

第五十一段

昔、男ありけり。人の許ゆるより、飾かざり粽ちまきをおこせたりける返事かへりごとに、菖蒲刈あやめり君は沼にぞ感あひける我は野に出で、かるぞ侘わびしき

とて、雉をなむ遣りける。

第五十二段

昔、男、逢ひ難き女に逢ひて、物語する程に、鶏の鳴きければ
争で斯く鶏の鳴くらむ人知れず思ふ心は未だ夜深きに

第五十三段

昔、男、つれなかりける女に、云ひ遣りける、
行きやらぬ夢路を辿る袂には天つ空なる露や置くらむ

第五十四段

昔、男、思ひ懸けたる女の、え得まじうなりての世に、
思はずばありもすらめど言の葉の折節毎に頼まるゝかな

第五十五段

昔、男、臥して思ひ、起きて思ひ、思ひ餘りて、
我が袖は草の庵にあらねども暮るれば露の宿りなりけり

第五十六段

昔、人知れぬ物思ひする男、つれなき人の許に、

戀ひ侘びぬ海人の刈る藻に宿るてふわれから身をも碎きつるかな

第五十七段

昔、心つきなき色好みなる男、長岡と云ふ所に、家造りて居りけり。其處の隣なりける宮ばらに、
事もなき女どもありけり。田舎なりければ、田刈らすとて、此の男、見居りけるに、「いみじの好色
の所爲や」とて、集り入り來ければ、此の男、逃げて奥に隠れにければ、女

荒れにけりあはれ幾世の宿なれや住みけむ人の音づれもせぬ

と云ひて、集り來居てありければ、此の男、

葎生ひて荒れたる宿の憂たきは假にも鬼の集くなりけり

となむ、云ひ出したりける。此の女ども、穂拾はむと云ひければ、

打ち侘びて落穂拾ふと聞かませば我も田面に行かましものを

第五十八段

昔、男、京を如何思ひけむ、東山に住まむと思ひ入りて、
住み侘びぬ今は限りの山里に身を隠すべき宿索めてむ

斯くて、物いたく病みて、死に入りたりければ、面に水漉ぎなどして、息出で、
我が上に露ぞ置くなる天の川門渡る船の櫂の雫か
と云ひてぞ、息出でたりける。

第五十九段

昔、男ありけり。宮仕忙はしく、心も眞實ならざりければ、家刀自、眞實に思はむと云ふ人に附きて、他國へ往にけり。この男、宇佐の勅使にて往きけるに、或國の祇承の官人の妻にてなむあると聞きて、「主婦に土器受取らせよ、さらすば、飲まじ」と云ひければ、かはらけ取りて、出したりに、肴なりける橘を取りて、

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

と云ひけるにぞ、思ひ出で、尼になりて、山に入りける。

第六十段

昔、男、筑紫までいきたりけるに、「これは、色好むなり、好色家ぞ」と、簾の中なる人の、云ひけるを聞きて、

染川を渡らむ人の争でかは色になるてふ事なかるべき

女、返し、

名にし負はゞ徒にぞあるべきたはれ島浪の濡衣著ると云ふなり

第六十一段

昔、男の年頃音づれざりける女、心賢くやあらざりけむ、果敢なき人の事に付きて、他國なりける人に使はれて、舊見し人の前に出で来て、物食はせなどしけり。長き髪を、布の袋に入れて、遠山摺の長き襖をぞ著たりける。夜さり「此のありつる人給へ」と主人に云ひければ、おこせたりけり。男「我をば知らずや」とて、

古の匂はいづら櫻花散れるが如もなりにけるかな

と云ふを、いと恥かしと思ひて、答もせで居たるを、「何故答へもせぬ」と云へば「涙の零るゝに、目も見えず、物も云はれず」と云ふ。又、男、

これやこの我に逢ふ身を遁れつゝ年月経れど勝り貌なる

と云ひて、衣脱ぎて、與らせけれど、捨て、逃げにけり。いづち往ぬらむとも知らず。

第六十二段

昔、世心ある姫、争で、この情あらむ男に、逢ひ見てしがなと思へど、云ひ出でむにも便なけれ

ば、誠ならぬ夢語りを、息子三人を呼び集めて、語りけり。二人の子は、情なく答へて止みぬ。三郎なりける子なむ、「好き御男ぞ、いで來む」と合はするに、この姫、氣色いとよし。他人はいと情なし。争で、この在五中將に逢はせてしがなと思ふ心あり。狩し歩きける道に、往き會ひにけり。馬の口を取りて、「斯う／＼なむ思ふ」と云ひければ、憐れがりて、往きて寢にけり。さて後、男、見えざりければ、姫、男の家に往きて、垣間見けるを、男、仄に見て、百歳に一歳足らむ九十九髪我を戀ふらし佛に見ゆと云ひて、馬に鞍置かせて、出で立つ氣色を見て、荊枸橋とも知らず、走り惑ひて、家に來て打ち伏せり。男、此の姫の爲しやうに、忍びて立てりて見れば、姫打ち歎きて、寢とて、狭席に衣片敷き今宵もや戀しき人に逢はで我が寢むと、詠みけるを、男、憐れと思ひて、其の夜は寢にけり。世の中の例として、思ひ思はぬ人あるを、此の人は、その差別見せぬ心なむありける。

第六十三段

昔、男、女、密に語らふ行爲もせざりければ、何處なりけむ、怪しさに詠める。
吹く風に我が身をなさば玉簾隙求めつゝ入らましものを

返し

取り留めぬ風にはありとも玉簾誰が許さばか隙求めむべき

第六十四段

昔、帝の時めき使はせ給ふ女の、禁色許されたるありけり。大御息所とて、在すかりける御從妹なりけり。殿上に候ひける在原なりける男の、未だいと若かりけるを、此の女、あひ知りたりけり。男、女方許されたりければ、女のある所に往きて、對ひ居りければ、女、「いと不體裁なり。身も滅びなむ。斯くなせそ」と云ひければ、

思ふには忍ぶる事ぞ負けにける逢ふにし換へば然もあらばあれ
と云ひて、曹司に下り給へば、いと曹司には、人の見るをも忍ばで、上り居ければ、この女、思ひ侘びて里へ行く。されば、何のよき事と思ひて、往き通ひければ、皆人聞きて笑ひけり。早朝、主殿寮の見るに、履は取りて、奥に投げ入れて上りぬ。斯く不體裁にしつゝあり渡るに、身も徒になりぬべければ、遂に亡びぬべしとて、この男、「如何にせむ。我が斯かる心止め給へ」と佛神にも申しけれど、彌勝りにのみ覺えつゝ、猶わりなく戀しうのみ覺えければ、陰陽師、巫呼びて、戀せじと云ふ祓の具してなむ往きける。祓へける儘にいと悲しき事、數勝りて、ありしより殊に戀

しくのみ覚えければ、

戀せじと御手洗川にせし身滌神は受けずもなりにけるかな

と、云ひてなむきにける。

この帝は、御顔貌よく御座しまして、曉には、佛の御名を、御心に入れて、御聲はいと尊くて申し給ふを聞きて、女はいたう泣きけり。斯かる君に仕う奉らで、宿世つたなく悲しき事、この男に絆されて」とてなむ、泣きける。斯かる程に、帝聞し召し付けて、この男を流し遣はしてければ、彼の女をば、従妹の御息所、罷出させて、殿の倉に籠あて、譴責り給ひければ、倉に籠りて泣く。

海人の刈る藻に棲む蟲のわれからと音をこそ泣かめ世をば怨みじ

と泣き居れば、この男、他國より夜毎に来つゝ、笛をいと面白く吹きて、聲はいとをかしうて、歌をぞあはれに歌ひける。斯かれば、此の女、倉に籠りながら、それにぞあなるとは聞けど、あひ見るべきにもあらでなむありける。

然りともと思ふらむこそ悲しけれあるにもあらぬ身をば知らずて

と思ひ居り。男は、女し逢はねば、斯くし歩きつゝ歌ふ。

徒に行きては來ぬるもの故に見まく欲しさに誘はれつゝ

(水尾の御時なるべし。大息所も染殿の後なり。五條の後とも。)

第六十五段

昔、男、津の國に領る所ありけるに、兄・弟・友達など率ゐて、難波の方に往きけり。渚を見れば、船どものあるを見て、

難波津を今日こそ三津の浦毎にこれや此の世をうみ渡る船

これをおはれがりて人々歸りにけり。

第六十六段

昔、男、逍遙しに、思ふどち搔い連ねて、和泉の國へ、二月ばかりに往きけり。河内の國、生駒の山を見れば、曇りみ晴れみ、起ち居る雲止まず、朝より曇りて、晝晴れたり。雪いと白う、木の末に降りたり。それを見て、彼の行く人の中に、唯一人詠みける、

昨日今日雪の起ち舞ひ隠さふは花の林を憂しとなりけり

第六十七段

昔、男、和泉の國へ往きけり。津の國、住吉の郡、住吉の里、住吉の濱を往くに、いと面白ければ、下り居つゝ行く。ある人、住吉の濱を詠めと云ふに、

雁鳴きて菊の花咲く秋はあれど春の海邊にすみよしの濱
と、詠めりければ、皆人詠ますなりにけり。

第六十八段

昔、男ありけり。その男、伊勢の國に、狩の使に往きけるに、彼の齋宮なりける人の親、常の使よりは、この人、能く勞れと云ひ遣りけり。親の云ふ事なりければ、いと懇に勞りけり。朝には、狩に出し立て、遣り、夕さは、此處に歸り來させけり。斯く懇に勞りける程に、云ひ付きにけり。二日と云ふ夜、男、強れて逢はむと云ふ。女も、はた逢はじとも思へらず。されど、いと人目繁ければ、得逢はず。使實とある人なれば、遠くも宿さず。女の聞も近くありければ、女、人を寢めて、子一つばかりに、男の許に來りけり。男、はた寢られざりければ、外の方を見出して臥せるに、月の朧なるに、人の影するを見れば、小さき童を先に立て、人立てり。男、いと嬉しくて、我が寢る所に率て入りて、子一つより、丑三つ迄あるに、未だ何事も語らひあへぬ程に歸りにけり。男いと悲しくて、寢ずなりにけり。晨、鬱悒しけれど、我が人を遣るべきにしもあらねば、いと心もとなくて、待ち居れば、明け離れて、暫しある程に、女の許より、詞はなくて、君や來しわれや行きけむ思ほえず夢か現か寢てか覺めてか

男、いといたる泣きて詠める、

かきくらす心の闇に惑ひにき夢現とは今宵定めよ

と、詠みて遣りて、狩に出でぬ。野に歩けど、心は空にて、今宵だに人寢めて、いと疾く逢はむと思ふに、國の守、齋宮の頭兼けたる、狩の使ありと聞きて、一夜、酒飲みしければ、専ら、逢ふ事も得せで、明けば、尾張の國へ越さむとすれば、男も女も、人知れず血の涙を流せど、え逢はず。夜、漸う明けなむとする程に、女がたより出す盃に、歌を書きて出したり。取りて見れば、

徒歩人の涉れど濡れぬえにしあれば

と書きて末はなし。その盃の裏に續松の炭して、歌の末を書き繼ぐ。

また逢坂の關は越えなむ

明くれば、尾張の國へ越えにけり。

第六十九段

昔、男、狩の使より歸り來けるに、大淀の邊に宿りて、齋宮の童に云ひ懸けゝる。
海松布かる方は何處ぞ棹さして我に教へよ海人の釣船

第七十段

昔、男、伊勢の齋宮に、内の御使にて参れりければ、彼の宮に好色事云ひける女、私事にて、千早振る神の忌垣も越えぬべし大宮人の見まく欲しさに

男、返し

戀しくば來ても見よかし千早振る神の禁止むる道ならなくに

第七十一段

昔、男、伊勢の國なりける女に、又も得逢はで、隣の國へ往くとて、いみじう怨みければ、女、大淀の松は辛くもあらなくにうらみてのみも返る浪かな

第七十二段

昔、其處にはありと聞けど、消息をだに云ふべくもあらぬ女の邊を歩いて、男の思ひける、目には見て手には取られぬ月のうちの桂の如き君にぞありける

第七十三段

昔、男、女をいたう怨みて、

岩根踏み重なる山に隔てねど逢はぬ日多く戀ひ渡るかな

第七十四段

昔、男、伊勢の國なる女に、「京に率て往きて逢はむ」と云ひければ、女、

大淀の濱に生ふてふみるからに心は和ぎぬ語らはねども

と云ひて、まして、つれなかりければ、男、

袖濡れて蟹の刈り干す渡津海のみるを逢ふにて止まむとやする

女、

岩間より生ふるみるめし常ならば潮干潮満ちかひもありなむ

又、男、

涙にぞ濡れつゝ絞る世の人の辛き心は袖の雫か

世に逢ふこと難き女になむ。

第七十五段

昔、二條の後の、未だ東宮の御息所と申しける時、氏神に詣で給ひけるに、近衛府に候ひける翁、人々の祿賜はる序に、御車より賜はりて、詠みて奉りける、

大原やをしほの松も今日こそは神代の事を思ひ出づらめ
とて、心にも悲しとや思ひけむ、如何思ひけむ、知らずかし。

第七十六段

昔、田村の帝と申す帝おはしましけり。其の時の女御、たかき子と申す在所かりけり。それ失せ給ひて、後の御佛事、安祥寺にて三月の下旬にしけり。人々、捧物奉りけり。奉り集めたる物、千捧ばかりありけり。若干の捧物を木の枝に付けて、堂の前に立てたれば、山も更に堂の前に、動き出でたるやうになむ、見えける。その頃、右大將に在所かりける藤原の常行と申す在所かりき。講の終る程に、歌詠む人々を召し集めて、今日の御佛事を題にて、春の心ばへある歌奉らせ給ふ。右の馬の頭なりける翁、目は違ひながら詠みける、

山の皆移りて今日に逢ふ事は春の別れを弔ふとなるべし

と詠みたりけるを、今見れば佳くもあらざりけり。當時は、これや勝りけむ、面白がりけり。

第七十七段

昔、たかき子と申す女御、おはしましけり。失せ給ひて、七々日の御佛事、安祥寺にてしけり。右大將、藤原の常行と云ふ人、在所かりけり。その御佛事に詣で給ひて、歸さに山科の禪師の親王おはします、その山科の宮に、瀧落し、水走らせなどして、面白く作られたるに、參で給ひて、「年頃よそには仕う奉れど、近くは未だ仕う奉らず。今宵は此處に候はむ」と申し給ふ。親王喜び給ひ

て、夜の御座の設備せさせ給ふ。然るに彼の大将出で、人に謀り給ふやう、「宮仕への初めに、唯黙止やはあるべき。三條の太行幸せし時、紀の國の千里の濱にありける、いと面白き石奉れりき。太行幸の後、奉れりしかば、或人の御曹子の前の溝に据ゑたりしを、島好み給ふ君なり。此の石を奉らむ」と宣ひて、御隨身舎人して、取りに遣はす。幾程もなく持て來ぬ。此の石、聞きしよりは見るに勝れり。これを直に、奉らば、漫なるべしとて、人々に歌詠ませ給ふ。右の馬の頭なりける人なむ、青き苔を刻みて、蒔繪の形に、この歌を付けて、奉りける。

飽かねども岩にぞ代ふる色見えぬ心を見せむ山縁のなれば

となむ詠めりける。

第七十八段

昔、氏の中に親王生れ給へりけり。御産屋に、人々歌詠みけり。御祖父方なりける翁の詠める、我が門に千尋ある竹を植ゑつれば夏冬誰か隠れざるべき

(これは貞數の親王、時の人、中將の子となむ云ひける。兄の中納言行平の娘の腹なり。)

第七十九段

昔、衰へたる家に、藤の花植ゑたる人ありけり。いと面白う咲けりけり。三月の晦日に、雨そぼ

降るに、折りて、人の許へ奉るとて、詠める。

濡れつゝぞ強ひて折りつる藤の花春は幾日もあらじと思へば

第八十段

昔、左の大^{おほい}臣^{みこと}在所^{ところ}かりけり。賀茂川の邊^{ほとり}に、六條邊^{むじろ}に、家をいと面白く造りて、住み給ひけり。十月^{かみづき}の下旬^{つごもり}方^{がた}、菊の花變^{うら}ろへる盛り、紅葉の千種^{ちかぐさ}に見ゆる折、親王^{みこと}達おはしまさせて、夜^よ一^{ひと}夜^よ、酒飲みし遊びて、夜明けもて行く程に、この殿の面白きを賞むる歌詠む。其處^{そのところ}にありける卑賤^{ひじけん}翁^{おきな}、板敷^{いたじき}の下^{しも}に這^わひ歩^あきて、人に皆詠ませ果て、詠める、

鹽竈^{しほがき}に何日^{いつ}か來^きにけむ朝風^{あさかぜ}に釣^あする船^{ふね}は此處^{このところ}に寄らなむ

となむ詠みける。陸奥^{むつ}の國^{くに}に往^いきたりけるに、あやしく面白き所々多かりけり。我が朝^{あさ}六十餘國^{むそじゆこく}の中に、鹽竈^{しほがき}と云ふ所に、似たる所なかりけり。然ればなむ、彼の翁^{おきな}、更に此處^{このところ}を愛^あで、鹽竈^{しほがき}に何日^{いつ}か來^きにけむとは、詠めりける。

第八十一段

昔、惟喬^{これたか}の親王^{みこと}と申^{まを}す親王^{みこと}おはしましけり。山崎^{やまざき}の彼方^{あなた}に、水無瀬^{みなせ}と云ふ所に、宮ありけり。年毎^{としごと}の櫻の花盛^{さくら}には、其の宮へなむ、おはしましける。其の時、右の馬の頭^{うまのかぶ}なりける人を、常に率^あて



おはしましけり。時世經て久しくなりにければ、其の人の名、忘れにけり。狩^かは、懸^{けん}にも爲^なで、酒を飲みつゝ、和歌^{わが}に掛^かかれりけり。今^{いま}狩^かする、交野^{かたの}の渚^{なぎさ}の院^{いん}の櫻^{さくら}、殊^{こと}に面白し。その木の下^{きのした}に下^{くだ}り居^ゐて、枝^{えだ}を折^おりて、挿頭^{かざし}に挿^さして上中下^{かみなかしも}、皆歌詠^{うた}みけり。馬の頭^{うまのかぶ}なりける人の詠める、

世の中に絶えて櫻の咲かざらば春の心は長閑^{のほほ}からまし
となむ詠みたりける。又、人の歌、
散ればこそいと櫻はめでたけれ憂き世に何か久しかるべき

とて、其の木の下^{きのした}は立ちて歸るに、日暮^{ひぐし}になりぬ。御供^{みけ}なる人、酒^{さけ}を持たせて、野より出で來たり。この酒^{さけ}を飲みてむとて、好き所^{このころ}を素^{もと}め行くに、天の川^{あまのがは}と云ふ所に到りぬ。親王^{みこと}に、馬の頭^{うまのかぶ}、大御酒^{おほみき}獻^{たま}る。親王^{みこと}の宣^{のたま}ひける、「交野^{かたの}を狩^かりて、天の川の畔^{ほとり}に至るを題^{だい}にて、歌詠^{うた}みて、盃^{さか}はさせ」と宣^{のたま}ひければ、詠^{うた}みて奉^{たご}りける。

狩^かり暮^{くれ}らし織^{たなほ}女^{むすめ}に宿借^{しゆくせ}らむ天^{あま}の河原^{かはら}に我^{われ}は來^きにけり
と聞^きえければ、此^{この}の歌^{うた}を、親王^{みこと}返^{かへ}すく誦^よし給^{たま}ひて、返^{かへ}し得^え爲^な給^{たま}はず。紀^きの有常^{ありつね}、御供^{みけ}に仕^{つか}う奉^{たま}れり。それが返^{かへ}し、

一年^{ひととせ}に一度^{ひとたび}來^きます君^{きみ}待^{まち}てば宿貸^{しゆくた}す人もあらじと思^{おも}ふ

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで酒飲み、物語して、主人の親王、酔ひて入り給ひなむとす。十一日の月も隠れなむとすれば、彼の馬の頭の詠める。

飽かなくに夙も月の隠るゝか山の端逃げて入れずもあらなむ

親王に代りて、紀の有常、

押並べて峯も平になりなゝん山の端なくば月も隠れじ

第八十二段

昔、水無瀬に通ひ給ひし惟喬の親王、例の狩しにおはします。供に馬の頭なる翁、仕う奉れり。日頃經て宮に歸り給ひけり。御送りして疾く歸なむと思ふに、大御酒賜ひ、祿賜はむとて遣さざりけり。この馬の頭、心もとながりて、

枕とて草引き結ぶ事もせじ秋の夜とだに頼まれなくに

と詠みける。時は三月の晦日なりけり。親王、大殿籠らで明かし給ひてけり。斯く爲つゝ參で仕う奉りけるを、思ひの外に御髪おろさせ給ひて、小野と云ふ所に住み給ひけり。正月に拜み奉らむとて參でたるに、比叡の山の麓なれば雪いと高し。強ひて御室に參で、拜み奉るに、徒然といと物悲しくて御座しましければ、やゝ久しく候ひて、古の事など思ひ出で、聞えさせけり。さても候ひ

てしがなと思へど、公事どもありければ、え候はで、夕暮に歸るとて、

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏み分けて君を見むとは

とてなむ、泣くゝ來にける。

第八十三段

昔、男ありけり。身は賤しながら、母なむ内親王なりける。その母、長岡と云ふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕しければ、參づとしけれど屢え參です。一人子にさへありければ、いと悲しうし給ひけり。さる程に、十二月ばかりに、頓の事とて御文あり。驚きて見れば、異事は無くて、

老いぬればさらぬ別れのありと云へば、愈見まく欲しき君かな

となむありける。これを見て、馬にも乗りあへず參るとて、いといたう打ち泣きて、道すがら思ひける。

世の中にさらぬ別れの無くもがな千代もと祈る人の子のため

第八十四段

昔、男ありけり。童より仕う奉りける君、御髪おろし給ひてけり。正月には必ず參でけり。公の宮仕しければ、常には得參です。されど、舊の心失はで參でけるになむありける。昔仕う奉りし人、

俗なる、禪師なる、數多參り集りて、正月なれば異だつとて、大御酒賜ひけり。雪、雫すが如降りて、終日に止まず。皆人酔ひて、雪に降り籠められたりと云ふを題にて、歌詠みけり。

思へども身をし分けねば目離れせぬ雪の積るぞ我が心なる

と詠めりければ、親王、いといたうあはれがり給うて、御衣脱ぎて給へりけり。

第八十五段

昔、いとわかき男、若き女をあひ云へりけり。各、親ありければ、包みて云ひさして止みにけり。年頃経て、女の許より、猶この事遂げむと云へりければ、男、歌を詠みて遣れりけり。如何思ひけむ。

今までに忘れぬ人は世にもあらじ己がさま／＼年の經ぬれば

とて止みけり。男女のあひはなれぬ宮仕になむ出でにける。

第八十六段

昔、男、津の國兎原の郡、蘆屋の里に領る由縁して、往きて住みけり。昔の歌に、

蘆の屋の灘の鹽焼き暇なみ黄楊の小櫛も挿さず來にけり

と詠みけるは、此の里を詠みけるなりけり。此處をなむ、蘆屋の灘とは云ひける。此の男、生宮仕

しければ、それを便にて、衛府の佐ども集り來にけり。此の男の兄も、衛府の督なりけり。其の家の前の海の邊に遊び歩いて、いざ、此の山の上にと云ふ布引の瀧見に登らむ」と云ひて、登りて見るに、その瀧物より異なり。高さ二十丈、廣さ五丈ばかりなる石の面に、白衣に岩を包めらむ様になむありける。然る瀧の上に、圓座の大きさに差し出でたる石あり。其の石の上に走り掛かる水は、小柑子栗の大きさにて零れ落つ。其處なる人に皆瀧の歌詠ます。彼の衛府の督、先づ詠む。

我が世をば今日か明日かと待つ間の涙の玉と何れ勝れり

主人、次に詠む。

貫き亂る人こそあるらし白玉の隙なくも散るか袖の狭きに

と詠めりければ、傍の人笑ふ事にやありけむ、此の歌を詠みて止みけり。歸り來る道遠くて、失せにし宮内卿もちよしが家の前過ぐるに、日暮れぬ。宿りの方を見やれば、海人の漁火多く見ゆるに、彼の主人の男詠む。

晴る、夜の星か川邊の螢かも我が住む方の海人の焚く火か

と詠みて、家に歸り來ぬ。その夜、南の風吹きて、名残の浪いと高し。つとめて、其の家の下婢共

出で、浮海松の浪に寄せられたる拾ひて、家の内に持て來ぬ。女がたより、その海松を高杯に盛りて、柏を覆ひて出したたり。その柏に、斯く書けり。

海神の挿頭に挿すと齋ふ藻も君が爲には惜しまざりけり
田舎人の歌にては、餘れりや、足らずや。

第八十七段

昔、いと若きにはあらぬ、これかれ友達ども集りて、月を見て、それが中に一人、おほかたは月をも愛でじこれぞこの積れば人の老となるもの

第八十八段

昔、賤しからぬ男、我よりは勝りたる人を思ひ懸けて、年經にけり。
人知れず我戀ひ死なば味氣なく何れの神に無き名負ふせむ

第八十九段

昔、男、つれなき人を、いかでと思ひ戀ひ渡りければ、憐れとや思ひけむ、さらば、明日物越にて物ばかりを云はむと云へりけるを、限りなく嬉しく、又疑はしかりければ、面白かりける櫻に付けて、

櫻化今日こそ斯くは匂ふとも噫頼み難明日の夜の事
と云ふ心ばへもあるべし。

第九十段

昔、月日の經くをさへ歎く男、三月の下旬に、
惜しめども春の限りの今日の日の夕暮にさへ成りにけるかな
聞き知る人も無しや。

第九十一段

昔、男、戀しさに來つゝ歸れど、女に消息をだにえ爲で詠める。
蘆邊漕ぐ棚無し小舟幾十度行き歸らむ知る人なしに

第九十二段

昔、男、身は賤しくて、いと貴き人を想ひ懸けたりけり。少しも頼みぬべき様にあらずやありけむ、臥して思ひ、起きて思ひ、思ひ侘びて詠める、
あふなく思ひはすべしなぞへなく貴き賤しき苦しかりけり
昔も斯かる事ありけり。世の道理にやありけむ。

第九十三段

昔、男、女ありけり。如何ありけむ、その男すまずなりにけり。後に、男ありけれど、子ある中なりければ、濃にこそあらねど、時々物云ひおこせけり。女の方に、繪描く人なりければ、扇に描きに遣れりけるを、今の男のものすとて、一日二日おこせざりけり。彼の男、いと辛くて、「己が聞ゆる事をば、今までして給はねば、道理と思へど、猶、人をば恨みつべきものになむありける」とて、詠みて遣れりける。時は秋になむありける。

秋の夜は春日忘るゝものなれば霞に霧や立ち勝るらむ
となむ詠めりける。女、返し、

千々の秋一つの春にむかはめや紅葉も花も共にこそ散れ

第九十四段

昔、二條の後に仕う奉る男ありけり。女の仕う奉りけるを常に見交して、よばひ渡りけり。いかに、物越にだに對面して、覺束なく思ひ詰めたる事、少し晴るかさむと云ひければ、女、いと忍びて、物越に逢ひにけり、物語などして、男、

彦星に戀は勝れり天の川隔つる關を今は止めてよ

此の歌に愛で、逢ひにけり。

第九十五段

昔、男ありけり。女を兎角云ふ事、月日經にけり、石木にしあらねば、心苦しとや思ひけむ、漸う、あはれと思ひけり。其の頃、六月の十五日ばかりなり。女、身に瘡一つ二つ出でたりければ、云ひおこせたる。「今は何の心もなし。身に瘡も一つ二つ出で來にけり。時もいと暑し。少し、秋風吹き立ちなむ時、必ず逢はむ」と云へりけり。秋立つ頃ほひ、女の父、其の人の許に行くべかなる事聞きて、云ひ喧呼りて、口舌出で來にけり。然りければ、此の女の兄、俄に迎へに來りければ、女、楓の初紅葉を拾はせて、歌を詠みて書き置く。

秋掛けて云ひしながらもあらなくに木の葉降りしく江にこそありけれ

と書き置きて、「彼處より人おこせば、これを遣れ」とて往ぬ。さて後、遂に善くてやあるらむ、悪しくてやあるらむ、往にし所も知らず。彼の男は、天の逆手を拍ちてなむ、呪詛ひ居るなる。むくつけき事、「人の呪詛ひ事は、負ふものにやあらむ、負はぬものにやあらむ、今こそは見め」とぞ云ふなる。

第九十六段

昔、堀河の太政大臣と申す、在所かりけり。四十の賀、九條の家にてせられける日、中將なりける翁、

櫻花散り交ひ曇れ老らくの來むと云ふなる道紛ふ爲に

第九十七段

昔、太政大臣と聞ゆる、御座しけり。仕う奉る男、九月ばかりに、梅の造り枝に雉を付けて奉るとて、

我が頼む君が爲にと折る花はときしも別かぬ物にぞありけると詠みて、奉りたりければ、いとかしこく、面白がり給ひて、使に祿賜へりけり。

第九十八段

昔、右近の馬場の眞手番の日、向ひに立てたりける車に、女の顔の、下簾より仄に見えければ、中將なりける男の詠みて遣りける、

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくば理なく今日や悵望め暮さむ返し

知る知らぬ何か理なく別きて云はむ思ひのみこそ嚮導なりけれ

後は、誰と知りにけり。

第九十九段

昔、男、後涼殿の狭間を渡りければ、ある高貴き人の御局より、忘草を、忍草とや云ふとて、差し出させ給へりければ、賜はりて、

忘草生ふる野邊とは見るらめど此は忍ぶなり後も頼まむ

第一百段

昔、左兵衛の督なりける、在原の行平と云ふ人ありけり。其の人の家に、よき酒ありと聞きて、殿上^{うへ}にありける人々、飲まむとて來りけり。左中辨藤原の良近と云ふ人をなむ、客人ざねにて、其の日に饗應まうけしたりける。風雅心ある人にて、瓶に花を挿せり。其の花の中に、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸ばかりなむありける。それを題にて歌詠む。詠み果て方に、主人の同胞なる、饗應まうけし給ふと聞きて、來りければ、捕へて詠ませける。元より、歌の事は知らざりければ、辭退ひけれど、強ひて詠ませければ、斯くなむ、

咲く花の下に隠るゝ人多みありしに勝る藤の蔭かも

「何故、斯くしも詠む」と云ひければ、「太政大臣の榮花の盛にみまそかりて、藤氏の殊に榮ゆるを

思ひて詠める」となむ云ひける。皆人、謗らすなりにけり。

第一百一段

昔、男ありけり。歌は詠まざりけれど、世の中を思ひ知りたりけり。高貴なる女の尼になりて、世の中を思ひ倦じて、京にもあらず、遙なる山里に住みける許に、もと親族なりければ、詠みて遣りける。

背くとて雲には乗らぬものなれど世の憂き事ぞ餘所になるてふ

第一百一段

昔、深草の帝に仕う奉りける男ありけり。いと眞實に、實様にて、徒なる心なかりけり。然るに、心誤りや爲たりけむ、親王たちの使ひ給ひける女を、あひ知りにけり。さて朝に云ひ遣る。

寝ぬる夜の夢を儚み微睡めばいや果敢なくもなり勝るかな

となむ、詠みて遣りける。さる歌のきたなげさよ。

第一百三段

昔、殊なる事なくて、尼になりける人ありけり。貌を變したれど、物や慕しかりけむ、賀茂の祭見に出でたりけるを、男、歌詠みて遣る。

世をうみのあまとし人を見るからにめくはせよとも思ほゆるかな

第一百四段

昔、男、斯くては死ぬべしと云ひ遣りたりければ、女、

白露は消なば消なくむ消えずとて玉に貫くべき人もあらしを

と云へりければ、嫉しと思ひけれど、志は彌勝りけり。

第一百五段

昔、男、親王たちの逍遙し給ふ所に参で、立田川の邊にて、

千早振る神代も聞かず立田川唐紅に水紋纏るとは

第一百六段

昔、生上品なる男の許に御達ありけり。それを、内記なりける藤原の敏行と云ふ人、よばひけり。この女、顔貌は好けれど、未だ若ければにや、文もをさくしからず、詞も云ひ知らず、況や歌は詠まざりければ、彼の主人なる人、案を書きて、書かせて遣りけり。愛で惑ひにけり。さて男の詠める、

徒然のながめに勝る涙川袖のみ濡ちて逢ふ由縁もなし

返し、例の女に代りて、

浅みこそ袖は濡づらめ涙川身さへ流ると聞かば頼まむ

と云へりければ、男いたう愛で、文箱に入れて、持て歩くとぞ云ふなる。同じ男、逢ひて後、文
おこせたり。参で来むとするに、雨の降りぬべきなむ、見煩ひ侍る。身幸あらば、この雨は降らじ」
と云へりければ、例の男、女に代りて、詠みて遣らす。

かすくゝに思ひ思はず問ひ難み身をしる雨は降りぞ増れる

と、詠みて遣れりければ、篋も笠も取りあへで、しとどに濡れて惑ひ來にけり。

第一百七段

昔、女、人の心を怨みて、

風吹けば常に浪越す岩なれや我が衣手の乾く時なき

と、常の言種に云ひけるを、聞き及びける男、

宵毎に蛙の數多鳴く田には水こそ増れ雨は降らねど

第一百八段

昔、男、友だちの、人を失へるが許に遣りける。

花よりも人こそ徒になりにつれ何れを先に戀ひむとか見し

第一百九段

昔、男、密に通ふ女ありけり。其女が許より、今宵夢になむ、見え給ひつると云へりければ、男、
思ひ餘り出でにし魂のあるならむ夜深く見えば魂結びせよ

第一百十段

昔、男、高貴き女の許に、亡くなりける女を弔ふ様にて、云ひ遣りける。

古はありもやしけむ今ぞ知る未だ見ぬ人を戀ふるものとは

第一百十一段

昔、男、つれなかりける人の許に、

戀しとは更にも云はじ下紐の解けむを人はそれと知らなむ

返し

下紐の證とするもあらなくに斯かる託言は懸けずぞあるべき

第一百十二段

昔、男、懇に云ひ契りける女の、ことさまになりければ、

須磨の海人の鹽焼く煙風を痛み思はぬ方にたなびきにけり

第一百十三段

昔、男、寡にて居て、

長からぬ命の程に忘るゝは如何に短き心なるらむ

第一百十四段

昔、仁和の帝、芹川に行幸し給ひける時、生翁の、今は然る事、似氣なく思ひけれど、もとつきにける事なれば、大鷹の鷹飼にて候はせ給ひける。摺狩衣の袂に、鶴の形を作りて、書き付けゝる。

翁さび人な咎めそ狩衣今日ばかりとぞ田鶴も鳴くなる

天皇の御氣色悪しかりけり。己が齡を思ひけれど、若からぬ人は、聞き負ひけりとや。

第一百十五段

昔、陸奥の國にて、男女住みけり。都へ歸なむと云ふ。此の女、いと悲しうて、馬の餞をだに爲むとて、興井、都島と云ふ所にて、酒飲ませて詠める。

おきのゐて身を焼くよりも悲しきは都島邊の別れなりけり

と詠めりけるに、愛でゝ、泊りにけり。

第一百十六段

昔、男、漫に、陸奥の國まで惑ひ往きけり。京に、思ふ人に云ひ遣る。

浪間より見ゆる小島の濱ひさぎ久しくなりぬ君に逢ひ見で

何事も、皆好く直りにけりとなむ、云ひ遣りける。

第一百十七段

昔、帝、住吉に行幸し給ひけり。

我が見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾代經ぬらむ

御神、現形し給ひて、

睦まじと君は知らずや瑞籬の久しき世より齋ひ初めてき

第一百十八段

昔、男、久しく音もせで、忘るゝ心もなし。参り來むと云へりければ、女、玉葛這ふ木數多になりぬれば絶えぬ言の葉嬉しげもなし

第一百十九段

昔、女、徒なる男の形見とて、置きたる物どもを見て、

形見とて今は徒なれ是なくば忘るゝ時もあらましものを

第一百二十段

昔、男、女の未だ世經すと覺えたるが、人の許に忍びて、物聞えて後、程經て、近江なる筑摩の祭疾く爲なむつれなき人の鍋の數見む

第一百二十一段

昔、男、梅壺より、雨に濡れて人の罷り出づるを見て、鶯の花を縫ふてふ笠もがな濡るめる人に著せて歸さむ
返し

鶯の花を縫ふてふ笠は否おもひをつけよ干して歸らむ

第一百二十二段

昔、男、契れる事、あやまれる人に、山城の井手の玉水手に掬ひ頼みし甲斐もなき世なりけりと、云ひやれど、返答もせず。

第一百二十三段

昔、男ありけり。深草に住みける女を、漸う、厭き方にや思ひけむ、斯かる歌を詠みけり。年を経て住み來し宿を出で、往なばいと深草野とやなりなむ
女、返し、

野とならば鶉となりて鳴き居らむ狩にだにやは君は來ざらむと詠めりけるに愛で、往かむと思ふ心、無くなりけり。

第一百二十四段

昔、男、如何なりける事を思ひける折にか、詠める。

思ふ事云はでぞたゞに止みぬべき我と均しき人しなれば

第一百二十五段

昔、男、病ひて、心地死ぬべく覺えければ、終に逝く道とは豫て聞きしかど昨日今日とは思はざりしを

伊勢物語 終

大和物語

上之卷

第一一段

亭子院の帝、今はおり居給ひなむとする比、弘徽殿の壁に、伊勢の御の書きつけける。

別るれどあひもをしまぬ百敷を見さらむ事の何か悲しき

とありければ、帝御覽じて、その傍に書きつけさせ給ひける。

身一つにあらぬばかりをおしなべて行き廻りても何か見さらむ

となむありける。

第二一段

帝おり居給ひて、又の年の秋、御髪おろし給ひて、所々山踏し給ひて、行ひ給ひけり。備前の掾にて、橘良利といひける人、内裏におはしましける時、殿上に候ひて、御髪おろし給ひければ、やがて御供に頭おろしてけり。人にも知られ給はで、歩き給ひける御供に、これなむ後れ奉らで候

ひける。かゝる御ありきし給ふ、いと悪しき事なりとて、内裏より少將、中將など、此彼候へとて、奉らせ給ひけれど、遣ひつゝ歩き給ふ。和泉國に至り給ひて、日根といふ所におはします夜あり。いと心細うかすかにておはします事を思ひて悲しかりけり。さて日根といふ事を、歌に詠めと仰事ありければ、この良利大徳

故郷のたびねの夢に見えつるは恨みやすらむまたと問はねば
とありけるに、皆人泣きてえ詠ますなりにけり。其の名をなむ、寛蓮大徳といひて、後までもさぶらひける。

第三段

故源大納言宰相におはしける時、京極御息所より、亭子院の御賀仕うまつり給ふとて、「かゝる事をなむせむと思ふ。捧物、一枝二枝せさせて賜へ」と聞え給ひければ、鬘籠を數多せさせたまひて、俊子に色々に染めさせ給ひけり、敷物の織物ども色々に染め、よりくみ何かと皆預けてせさせ給ひけり。その物どもを、九月晦日に、皆いそぎはててけり。さてその十月朔日の日、この物、急ぎ給ひける人の許におこせたりける。

千々の色にいそぎし秋は過ぎにけり今は時雨に何を染めまし

その物急ぎ給ひける時は、まもなく、これよりも彼よりも言ひかはし給ひけるを、それより後は、その事とやなかりけむ、消息もいはで、十二月の晦日になりければ、

かたかけの船にや乗りし白浪の騒ぐ時のみ思ひ出づる君

となむ言へりけるを、その返しをもせて、年越えにけり。さて二月ばかりに、柳のしなひ、物よりけに長きなむ、この家にありけるを折りて、

青柳のいとうちはへて長閑なる春日しもこそ思ひいでけれ

とてなむ、遣り給へりければ、いと二なく愛でて、後までなむ語りける。

第四段

野大貳、純友が騒ぎの時、討手の使にされて、少將にて下りけり。公にも仕うまつり、四位にもなるべき年に當りければ、正月の加階賜りの事、いとゆかしう覺えけれど、京より下る人もさ／＼聞えず。或人に問へど、四位になりたりともいふ。或人はさもあらずといふ。定なる事いかで聞かむと思ふ程に、京の便あるに、近江守公忠君の文をなむ持て來たりけり。いとゆかしう嬉しうて、あけて見れば、萬の事ども書きもていきて、月日など書きて、奥に、

玉櫛笥ふたとせ逢はぬ君が身をあけながらやはあらむと思ひし

これを見て、限なく悲しくてなむ泣きける。四位にならぬ由、文の詞にはなくて、只かくなむありける。

第五段

前坊の君失せ給ひにければ、大輔、限なく悲しくのみ覺ゆるに、後の宮、後に立ち給ふ日になりければ、ゆゝしとて隠しけり。さりければ、詠みて出しける。

わびぬれば今はと物を思へども心に似ぬは涙なりけり

第六段

朝忠中將、人の妻にてありける人に、忍びて逢ひ渡りけるを、女も思ひかはして住みける程に、かの男、他國の守になりて下りければ、これもかれも、いとあはれと思ひけり。さて詠みて遣しける。

たぐへやる我が魂をいかにしてはかなき空にもて離るらむ

となむ、下りける日いひやりける。

第七段

男女、相知りて年経けるを、聊なる事によりて離れにけり。飽くとしもなくて、止みにしかばに

やあらむ、男も哀と思ひけり。かくなむ云ひ遣りける。

逢ふ事は今は限と思へども涙は絶えぬものにぞありける

女、いとあはれと思ひけり。

第八段

監の命婦の許に、中務宮おはしまし通ひけるを、方の塞がれば、今宵はえなむ参でぬ」と宣へりければ、その御返事に、

逢ふ事のかたはさのみぞ塞がらむ一夜めぐりの君となれば

とありければ、方塞がりたりけれど、おはしましてなむ、大殿隠りにける。かくて又、久しく音もし給はざりけるに、嵯峨の院に狩すとてなむ、久しく消息なども物せざりける。いかに覺束なく思ひつらむ」など宣へりける、御かへりごとに、

大澤の池の水ぐき絶えぬとも何か恨みむさかのつらさは

御返しはこれにや劣りけむ、人忘れにけり。

第九段

桃園の兵部卿宮うせ給ひて、御はて九月晦日にし給ひけるに、俊子、かの宮の北方に奉りける。

大かたの秋のはてだに悲しきに今日はいかでか君暮すらむ
限なく悲しと思ひて、泣き居給へりけるに、かくいへりければ、
あらばこそ初も終も思ほえめ今日にも逢はで消えにしものを
となむかへし給ひける。

第十段

監の命婦、堤にありける家を、人に賣りて後、粟田といふ所に住きけるに、其の家の前を渡りければ、詠みたりける。

ふる里をかはと見つつも渡るかな淵瀬ありとは宜もいひけり

第十一段

故源大納言君、忠房のぬしの御女、東の方を、年比思ひてすみ渡り給ひけるを、亭子院の若宮につき奉り給ひて程程にけり。子供などありければ、事も絶えず、同じ所になむ住み給ひける。さて詠みてやり給ひける。

住の江の松ならなくに久しくも君と寝ぬ夜のなりにけるかな
とありければ、かへし、

久しくは思ほえねども住の江の松やふたたび生ひ代るらむ
となむありける。

第十二段

同じ大臣、かの宮をえ奉り給ひて、帝のあはせ奉り給へりけれど、はじめごろ忍びて、夜々通ひ給ひける比、かへりて、

あくといへば静心なき春の夜の夢とや君をよるのみは見む

第十三段

右馬允藤原千兼といふ人の妻に、俊子といふ人なむありける。子ども數多出で来て、思ひて棲みける程に、なくなりければ、限なく悲しくのみ思ひ歩く程に、内の藏人にてありける一條君といひける人は、俊子をいとよく知れりける人なりけり。かくなりける程にしも、訪はざりければ、怪しと思ひ歩く程に、訪はぬ人の従者の女なむ逢ひたりけるを見て、かくなむ。

思ひきや過ぎにし人の悲しきに君さへつらくならむものとは
と聞えよといひければ、かへし、

なき人を君がきかくにかけじとて泣く泣く忍ぶほどな恨みそ

第十四段

本院の北方の御おとうとの童名をおほつぼねと言ふいまそかりけり。陽成院の帝に奉りけるに、おはしまさざりければ、詠みて奉りける。

あらたまの年は經ねども猿澤の池の玉藻は見つべかりけり

第十五段

又釣殿の宮に、若狭の御と云ひける人を召したりけるが、又も召しなかりければ、詠みて奉りける。

數ならぬ身に置く宵の白玉は光見えさすものにぞありける

と詠みて奉りければ、見給ひて、「あな面白の玉の歌よみや」となむ宣ひける。

第十六段

陽成院のすけの御、繼父の少將の許に、

春の野ははるけながらも忘草生ふるは見ゆるものにぞありける

少將、かへし、

春の野に生ひじとぞ思ふ忘草つらき心の種しなければ

第十七段

故式部卿宮の、出羽の御に、繼父の少將のすみけるを、離れて後、女薄に文をつけて遣りたりければ、少將、

秋風に靡く尾花は昔見し袂に似てぞ戀しかりける

出羽の御、かへし、

袂ともしのばざらまし秋風をなびく尾花の驚かさずば

第十八段

故式部卿、二條の御息所に絶え給ひて、又の年の正月の七日の日、若菜奉り給ひけるに、ふるさとと荒れにし宿の草の葉も君が爲とぞまづは摘みけるとありけり。

第十九段

同じ人、同じ親王の許に、久しくおはしまさざりければ、秋の事なりけり。世に經れど戀もせぬ身の夕されば漫に物の戀しきやなぞとありければ、かへし、

夕暮に物思ふ時は神無月われも時雨におとらざりけり
となむありける。心に入らで悪しくなむ詠み給ひける。

第二十段

故式部卿宮を、桂の皇女、切によばひ給ひけれど、おはしまさざりける時、月のいと面白かりける夜、御文奉り給へりけるに、

久方の空なる月の身なりせば行くとも見えで君は見てまし
となむありける。

第二十一段

良少將、兵衛佐なりける頃、監の命婦になむ住みける。女の許より、

柏木の森の下草老いぬとも身をいたづらになさずもあらなむ

かへし、

柏木の森の下草老の世にかかる思ひはあらじとぞ思ふ

となむいひける。

第二十二段

良少將、太刀の緒にすべき革を求めければ、監の命婦なむ、我が許にありといひて、久しく出さざりければ、

あだ人のたのめ渡りしそめかはの色の深さを見でや止みなむ
と詠めりければ、監の命婦めでくつがへりて、もとめてやりけり。

第二十三段

陽成院の二の皇子、俊蔭中將の女に、年比すみ給ひけるを、女五の皇女を得奉り給ひて後、更に訪ひ給はざりければ、今はおはしますまじきなめりと思ひ絶えて、いと哀にて居給へりけるに、いと久しくありて思ひがけぬ程に、おはしましたりければ、え物も聞えで、逃げて戸の内に入りけり。歸り給ひて、皇子あしたに、なごか、年比の事も申さむとて、まうで來たりしに、隠れ給ひにし」とありければ、詞はなくてかくなむ。

せかなくに絶えと絶えにし山水のたれ忍べとか聲を聞かせむ

第二十四段

先帝の御時に、右大臣の女御、うへの御局にまうのぼり給ひて、おはしましやすると、下待ち給ひけるに、おはしまさざりければ、

日ぐらしに君まつ山の郭公はつこう間はぬ時にぞ聲も惜しまぬ
となむ聞えけり。

第二十五段

比叡ひえいの山に、念覺ねんかくといふ法師の山籠やまごもりにてありけるに、師徳しとくにてましくける大徳だいてくの早う死にける
が、室むろに松の木まつの枯れたるを見て、

主ぬしもなき宿の枯れたる松見れば千代過ぎにける心地こそすれ

と詠みければ、かの室むろに泊とまりたりける弟子ども、あはれがりけり。この念覺は俊子せうとが兄せうとなりけり。

第二十六段

桂かぢの皇女みかみ、密ひそに逢あふまじき人に逢あひ給たまひたりけり。男おとこの許もとに、詠よみて遣つかせ給たまへりける。

それをだに思ふ事とて我が宿を見きとないひそ人の聞かくに
となむありける。

第二十七段

かいせうといふ人法師になりて、山に住あむ間に、洗濯せんたくなどする人のなかりければ、親おやの許もとに、衣き
をなむ洗せんひに遣つかせたりけるを、いかなる折まにかありけむ、むづかりて、親おや兄弟あにのいふ事も聞かで、

法師になりぬる人は、かくうるさき事いふものか」と言ひければ、詠よみて遣つかりける。

今は我いづち行かまし山にても世の憂き事は猶も絶えぬか

第二十八段

同じ人、かの父の兵衛佐ひやうゑのすけ、失せにける年の秋、家にこれかれ集りて、宵よひより酒飲みなどす。いま
すからぬ事の哀なる事を、客人きやくども主人あなも戀こひけり。朝あぼらけに霧きり立ち渡れりけり。客人きやくど、

朝霧の中に君ますものならば晴るるまにまに嬉うれしからまし

と云ひけり。かいせう、かへし、

ことならば晴れずもあらなむ秋霧の紛まれに見えぬ君と思はむ

客人きやくどは、貫つらゆき之の、友則ともりのりなどになむありける。

第二十九段

故式部卿宮こしきぶけののみやに、三條右大臣さんじょうのうぢの、他上達部たかたつたべなど類るして参り給ひて、碁ごうち御遊おんあそびなどし給ひて、夜更よふ
けぬれば、此これ彼かれ酔よひて、物がたりし、かづけ物などせらる。女郎花やうらなはしをかざし給ひて、右大臣みぎのうぢの、

女郎花折る手にかかる白露は昔の今日にあらぬ涙か

となむありける。他人たにん々の多かれど、よからぬは忘れにけり。

第三十段

故右京大夫宗于君、なりいづべき程に、我が身のえなり出でぬ事を、思ひけるころほひ、亭子の帝に、紀伊國より石つきたる海松をなむ、奉りたりけるを題にて、人々歌よみけるに、右京大夫、沖つ風ふけの浦に立つ波のなごりにさへやわれは沈まむ

第三十一段

同じ右京大夫、監の命婦に、よそながら思ひしよりも夏の夜の見はてぬ夢ぞはかなかりける

第三十二段

亭子の帝に、右京大夫よみて奉りける。

あはれてふ人もあるべく武藏野の草とだにこそ生ふべかりけり
また、

時雨のみ降る山里の木の下は居る人からや漏りすぎぬらむ
とありければ、顧み給はぬ心ばへなりけり。帝御覽じて、何事ぞ、これを心得ぬ」とて、僧都の君に見せ給ひけると聞きしかば、「甲斐なくなむありし」と語り給ひける。

第三十三段

躬恒が、院に詠みて奉りける。

立ち寄らむ木のもともなき蔦の身は常磐ながらに秋ぞ悲しき

第三十四段

右京大夫の許に、女、

色ぞとはおもほえずとも此の花は時につけつつ思ひ出でなむ

第三十五段

堤中納言、内裏の御使にて、大内山に、院の帝おはしますに参り給へり。物心細げにておはします、いとあはれなり。高き所なれば、雲は下よりいと多く立ち昇るやうに見えければ、かくなむ。

白雲のこののへに立つ峰なれば大内山といふにぞありける

第三十六段

伊勢國に、前齋宮おはしましたし時に、堤中納言、勅使にて下り給ひて、
吳竹のよよの都と聞くからに君は千年の疑ひもなし
御かへしは聞かず。かの齋宮のおはします所は、多氣の都となむいひける。

第三十七段

出雲が兄弟、一人は殿上して、我はえせざりける時に詠みたりける。
かく咲ける花もこそあれ我が爲に同じ春とやいふべかりける

第三十八段

先帝の五の皇子の御女は、一條君といひて、京極御息所の御許に候ひ給ひけり。よくもあらぬ事ありて、罷出給ひて、靱負督の妻にいたしますがりて、
たまさかに問ふ人あらばわたの原歎きほに擧げていぬと答へよ

第三十九段

伊勢守もろみちの女を、正明中將君に婚せたりける時に、其處なりける髻髪をば、右京大夫
呼び出でてかたらひて、朝によみておこせたりける。

置く露の程をも待たぬ朝顔は見すぞなかなかあるべかりける

第四十段

桂の皇女に、式部卿宮すみ給ひける時、その宮に候ひける髻髪なむ、この男宮を、いとめでたし
と思ひかけ奉りけるをも、え知り給はざりけり。螢の飛び歩きけるを、「かれ捕へて」と、この童に

宣はせければ、汗衫の袖に螢を捕へて、包みて御覽せさすとて聞えさせける。

包めども隠れぬものは夏蟲の身より餘れる思ひなりけり

第四十一段

源大納言君の御許に、俊子は常に参りけり。曹司して住む時もありけり。をかしき人にて、萬の
事を常に云ひかはし給ひけり。徒然なる日、このおとど、俊子、またこのむすめ、姉にあたるあや
つ子といひてありけり。母に似て心もをかしかりけり。又をとこの許に、よぶ子といふ人ありけり。
それも物のあはれ知りて、いと心をかしき人なりけり。これ四人集ひて、萬の物語し、世の中のは
かなき事、世間の哀なる事いひて、かのおとどの詠み給ひける。

いひつつも世ははかなきを形見には哀といかで君に見えまし
と詠み給ひければ、誰もく返しはせで、集りてよとなむ泣きける。怪しかりける者どもにこそ
はありけれ。

第四十二段

惠秀といふ法師の、或人の御驗者仕うまつりける程に、とかく世の中にいふ事ありければ、詠み
たりける。

里は言ふ山には騒ぐしら雲の空にはかなき身とやなりなむ
となむありける。又この人の御許に詠みたりける。

朝ぼらけわが身は庭のしもながら何を種にて心おひけむ

この大徳、坊にしける所の前に、切懸をなむせさせける。そのけづり屑に書きつけける。

籬する飛驒の匠のたつき音のあなかしがましなぞや世のなか

などいひて、「おこなひしに、深き山に入りなむとす」といひて往にけり。程へて「何處にかあらむ」

と云ひて、「深き山に籠り給ひぬとありしは、何處ぞ」と云ひ遣り給ひたりければ、

何ばかり深くもあらず世の常の比叡を外山と見るばかりなり

となむいひたりける。横川といふ所にあるなりけり。

第四十三段

同じ人に、或人、「山へ登り給ふべき日は遠くやある、いつぞ」といへりければ、

登りゆく山の雲居の遠ければ日も近くなるものにぞありける

とぞいひ遣せたりける。かくのみ、よからぬ事の、あるがうへに出で來ければ、

のがるとも誰か著さらむぬれ衣あめの下にし住まむ限は

第四十四段

堤中納言君、十三の皇子の母御息所を、内裏に奉りける初に、帝はいかゞ思し召すらむなど、

いとかしこく思ひ歎き給ひけり。さて帝に詠みて奉り給ひける。

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな

先帝いとあはれに思し召したりけり。御返しはありけれど、人え知らず。

第四十五段

平仲、閑院の御に絶えて後、程經て逢ひたりけり。さて後に云ひおこせたる。

うちとけて君は寝つらむ我はしも露のおきゐて戀にあかしつ

女、かへし、

白露のおきふし誰を戀ひつらむ我は聞きおはすいそのかみにて

第四十六段

陽成院の一條君

奥山に心を入れて尋ねずば深き紅葉の色を見ましや

第四十七段

先帝の御時、刑部君とて、候ひ給ひける更衣の、里に罷り出で給ひて、久しう参り給はざりけるに遣しける。

大空をわたる春日のかけなれや他處にのみしてのどけかるらむ

第四十八段

同じ帝、齋院の皇女の御許に、菊につけて、

行きて見ぬ人の爲にと思はずば誰か折らまし我が宿の菊

齋院の御かへし、

我が宿に色をりとむる君なくばよそにもきくの色を見ましや

第四十九段

戒仙、山に登りて、

雲ならで小高き嶺にゐるものはうき世を背く我が身なりけり

第五十段

齋院より、うちに、

同じ枝をわきて霜おく秋なれば光もつらく思ほゆるかな

御かへし、

花の色を見ても知りなむ初霜の心わきてはおかじとぞ思ふ

これも、うちの御、

わたつ海の深き心をおき乍らうらみられぬる物にぞありける

第五十一段

陽成院にありける、坂上のとほみちといふ男、同じ院にありける女、障る事ありて逢はざりければ、

ば、

秋の野をわくらむ鹿も我が如や繁きさはりに音をば鳴くらむ

第五十二段

右京大夫宗于君の三郎にあたりける人、博奕をして親にも、兄弟にも憎まれければ、足の向かむ

方へ行かむ」とて、他國へいきける。さて思ひける女だちの許へ、詠みて遣せたりけり。

しをりして行く旅なれどかりそめの命しらねば歸りしもせじ

第五十三段

男、限なく思ひける女を置きて、他國へ往にけり。いつしかと待ちけるに、死にきといひて來た

りければ、
今來むといひて別れし人なればかぎりと聞けど猶ぞ待たるる
となむいひける。

第五十四段

越前權守兼盛、兵衛君といふ人にすみけるを、年比はなれて又往きけり。さて詠みける。
夕されば道も見えねど故郷はもとこし駒に任せてぞ行く
女、かへし、

駒にこそ任せたりければかなくも心のくると思ひけるかな

第五十五段

近江介平中興、女をいといたうかしづきけるを、親なくなりて後、兎角零落て、他國にはか
き所にすみけるを、あはれがりて、兼盛が詠みておこせたりける。

をちこちのひと目まれなる山里に家居せむとは思ひきや君

と詠みてなむ遺せたりければ、返事もせで、よゝとぞ泣きける。女もいとらうある人なりけり。

第五十六段

同じ兼盛、陸奥國にて、閑院の三の御子の女にありける人、黒塚といふ所にすみけり。その女ど
もにおこせたりける。

みちのくの安達の原の黒塚に鬼こもれりと聞くはまことか

といひたりけり。かくて「その女を得む」といひければ、親「まだいと若くなむある。今さるべか
らむ折にを」と云ひければ、京にいくとて、山吹につけて、

花さかり過ぎもやするとかはづ鳴く井手の山吹うしろめたしも

といひけり。かくて名取の御湯といふ事を、恒忠君の妻詠みたりけるといふなむ、この黒塚の主人
なりける。

大空の雲の通路見てしがなとりのみゆけばあとはかもなし

となむ詠みたりけるを、兼盛大君同じ所を、

鹽釜の浦には海人や絶えにけむなどすなとりのみゆる時なき

となむよみける。さてこの心がけし女、他男して京へ上りたりければ、聞きて、兼盛「上りものし
給ふなるを、告げ給はせで」と云ひたりければ、「井手の山吹うしろめたし」といへりける文を、「こ
れなむ陸奥國の土産」とて、おこせたりければ、男、

年を経てぬれわたりつる衣手を今日のなみだに朽ちやしぬらむ
といへりけり。

第五十七段

世の中を倦じて、筑紫へ下りける人、女の許におこせたりける。
忘るやと出でて來しかどいづくにもうさは離れぬ物にざりける

第五十八段

五條の御といふ人ありけり。男の許に我が像を繪に書いて、女の燃えたる像を書きて、烟をいと
多く薫らせて、かくなむ書きたりける。

君を思ひなましくし身を焼く時はけぶり多かるものにざりける

第五十九段

亭子院と、御息所だち數多、御曹司して住み給ふ事、年比ありて、河原院のいと面白く作られた
りけるに、京極の御息所、一所の御曹司をのみして渡らせ給ひにけり。春の事なりけり。とまり給
へる御曹司ども、いと思の外にさうくしき事を思ほしけり。殿上人など通ひ参りて、藤の花のい
と面白きを、「これが盛をだに御覽ぜで」などいひて見歩くに、文をなむ結びつたりける。あけて

見れば、

世の中の浅き瀬にのみなり行けば昨日のふぢの花とこそみれ
とありければ、人々見て限なくめで哀がりけれど、誰が御曹司のし給へるともえ知らざりけり。男
どもの云ひける。

藤の花色のあさくも見ゆるかな移ろひにけるなごりなるべし

第六十段

のうさんの君といひける人、淨藏とはいと二なう思ひかはす中なりけり。限なく契りて、思ふ事
をも言ひかはしけり。のうさんの君、

思ふてふ心はことにありけるを昔の人に何をいひけむ

といひ遣せたりければ、淨藏大徳のかへし、

行末の宿世を知らぬ心には君にかぎりの身とぞいひける。

第六十一段

故右京大夫、人の女を忍びて得たりけるを、親聞きつけて、罵りて逢はせざりければ、侘びて滞
りにけり。さて朝に詠みてやりける。

さもこそは峰の嵐は荒らからめ靡きし枝をうらみてぞ來し

第六十二段

平仲、にくからず思ふ若き女を、妻の許に率て來て置きたりけり。憎げなる事どもを云ひて、妻遂に逐ひ出しけり。この妻に隨ふにやありけむ、らうたしと思ひながら得留めず。いちはやく云ひければ、近くだにえ寄らで、四尺の屏風に寄りかゝりて、立てりて云ひけり、「世の中の思ひの外にある事、異世界にもものし給ふとも、忘れて消息し給へ。おのれもさなむ思ふ」と言ひけり。この女包みに物など入れて、車取りに遣りて待つ程なり。いとあはれと思ひけり。さて女往にけり。とばかりありて遣せたりける。

忘らるな忘れやしぬる春霞今朝立ちながら契りつること

第六十三段

南院の五郎、三河の守にてありける。承香殿にありける伊豫の御を懸想しけり。來むと云ひければ、御息所の御許に、「内裏へなむ参る」といひ遣せたりければ、

玉簾うちとかくるはいとどしく影を見せじと思ふなりけり

といへりけり。又、

歎きのみ茂き深山のほとゝぎす木がくれ居ても音をのみぞ鳴く
などいひけり。かくて來たりけるを、「今はかへりね」とやらひければ、

死ねとてやとりもあへずばやはるるいといき難き心地こそすれ

返し、をかしかりけれどえ聞かず。又雪の降る夜來たりけるを、物は云ひて、「夜更けぬ。歸り給ひね」といひければ、歸りける程に、戸を鎖してあざけりければ、

我はさは雪ふる空に消えねとや立ちかへれどもあけぬ板戸は

となむ云ひてゐたりける。かく歌も詠みあはれに云ひゐたれば、如何せましと思ひて、のぞきて見れば、顔こそ猶いとにくげなりしか、となむ語りしとか。

第六十四段

俊子、千兼を待ちける夜、來ざりければ、

小夜更けていなおほせ鳥の鳴きけるを君が叩くと思ひけるかな

第六十五段

又俊子、雨の降りける夜、千兼を待ちけり。雨にや障りけむ、來ざりけり。こぼれたる家にて、いたく漏りけり。雨の甚く降りしかば、え参らずなりにき。さる所に、いかで物し給ひつる」とい

へりければ、俊子、

君を思ひひまなき宿と思へども今宵の雨は漏らぬ間ぞなき

第六十六段

枇杷殿より、俊子が家に柏木のありけるを、折りにたまへりけり。折らせて書きつけ奉りける。

我が宿をいつかは君が檜柴の馴らし顔には折りにおこせる

御かへし、

柏木に葉守の神のましけるを知らでぞ折りし崇なさるな

第六十七段

忠文が、陸奥の將軍になりて下りける時、それが息子なりける人を、監の命婦忍びてあひ語りひけり。餞別に、絞染の狩衣、桂、幣などやりたりける。この得たる男、

宵々に戀しさまさる狩衣心づくしのものにぞありける

とよみたりければ、女めでて泣きけり。

第六十八段

同じ人に、監の命婦、楊梅を遣りたりければ、

みちのくの安達の山ももろともに越えばわかれの悲しからじをとなむいひける。さて堤なる家に住みける。さて鮎をなむ取りて遣りける。

賀茂川の瀬にふす鮎のいを取りて寝てこそあかせ夢に見えつや

かくてこの男、陸奥國へ下りける便につけて、哀なる文ども遣せけるを、道にて病してなむ死にけると聞きて、女いと哀となむ思ひける。かく聞きて後、篠塚驛といふ所より、便につけて、哀なる事どもを書きたる文をなむ持て來たりける。いと悲しくて、「これは何時のぞ」と問ひければ、使の久しくなりて、もて來たるになむありける。女、

篠塚のうまやうまやと待ちわびし君は空しくなりぞしにける

と詠みてなむ泣きける。童にて殿上して、大七といひけるを、冠して、藏人所におりて、金の使かけて、親の供に往くになむありける。

第六十九段

故式部卿宮失せ給ひける時は、二月の晦日、花の盛になむありける。堤中納言の詠み給ひける。

咲き匂ひ風まつ程の山さくら人の世よりは久しかりけり

三條右大臣の御かへし、

春々の花は散るとも咲きぬべしまた逢ひ難き人の世ぞ憂き

第七十段

同じ宮おはしましける時、亭子院に住み給ひけり。この宮の御許に、兼盛参りけり。召し出でて、物ら宣ひなどしけり。亡せ給ひて後、かの院を見るにいとあはれなり。池のいと面白きに、哀なりければ詠みける。

池はなほ昔ながらの鏡にて影見し君がなきぞ悲しき

第七十一段

人の國の守にて下りける餞別を、堤中納言して待ち給ひけるに、暮るゝまで來ざりければ、云ひ遣り給ひける。

別るべきこともあるものを終日に待つとてさへも歎きつるかな

とありければ、まどひ來にけり。

第七十二段

同じ中納言、かの殿の寢殿の前に、少し遠く立てりける櫻を、近く掘り植ゑ給ひけるが、枯れざまに見えければ、

宿近く移して植ゑし甲斐もなくまちどほにのみ見ゆる花かな

第七十三段

同じ中納言、藏人にてありける人の、加賀の守にて下りけるに、わかれ惜みける夜、中納言、君が行く越の白山知らねどもゆきのまにまにあとは尋ねむとなむ詠み給ひける。

第七十四段

桂の皇女の御許に、喜種が來たりけるを、母御息所聞きつけ給ひて、門を鎖せ給ひければ、一夜立ち煩ひて歸るとて、「かく聞え給へ」とて、門の間よりいひ入れける。

今宵こそ涙の川にゐる千鳥なきてかへると君は知らずや

これも同じ皇女に、同じ男、

永き夜をあかしの浦に焼く鹽のけぶりは空に立ちや昇らむ

かくて忍びて逢ひ給ひける程に、院に八月十五夜せられけるに、「参り給へ」とありければ、参り給ふに、院にては逢ふまじければ、「せめて今宵はな参り給ひそ」と留めけり。されど召しなりければ、得留まらでいそぎ参り給ひければ、喜種、

竹取がよよに泣きつつ留めけむ君はきみにと今宵しも行く

第七十五段

監の命婦、朝拜の威儀の命婦にて出でたりけるを、彈正の親王見給ひて、俄に惑ひ懸想し給ひけり。御文ありける御返事に、

うちつけに惑ふ心と聞くからに慰めやすく思ほゆるかな

親王の御歌はいかゞありけむ、忘れにけり。また同じ親王に、同じ女、

こりすまの浦にかづかむ浮海松は浪騒がしくありこそはせめ

第七十六段

宇多院の花面白かりける比、南院の君達、これかれ集りて歌よみなどしけり。右京大夫宗子

來て見れど心もゆかず故里は昔ながらの花は散れども

他人のもありけらし。

第七十七段

季繩少將の女右近、故后宮に候ひける頃、故權中納言の君おはしける。頼め給ふ事などありけるを、宮に参る事絶えて、里にありけるに、更に訪ひ給はざりけり。内裏邊の人來たりけるに、「い

かにぞ参り給ふや」と問ひければ、「常に候ひ給ふ」といひければ、御文奉りける。

忘れじと頼めし人はありと聞く言ひし言の葉いづちいにけむ

となむありける。

第七十八段

同じ女の許に、更に音もせで、雉子をなむ遣せ給へりける。返事に、

栗隈の山に朝立つ雉よりもかりには逢はじと思ひしものを

第七十九段

同じ女、内裏の曹司にすみける時、忍びて通ひ給ふ人ありけり。頭なりければ、殿上に常にありけり。雨の降る夜、曹司の蔀のつらに立ちより給へりけるも知らで、雨の漏りければ、礎を引き返すとして、

思ふ人雨と降りくるものならば我がもる床はかへさざらまし

となむうち云ひければ、哀と聞き給ひて、ふと這ひ入り給ひにけり。

第八十段

同じ女、男の忘れじと、萬の事をかけて誓ひけれど、忘れにける後にいひやりける。

忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな
かへしはえ聞かず。

第八十一段

同じ右近、桃園宰相君なむ、すみ給ふなど云ひの、しりけれど、虚言なりければ、かの君に詠みて奉りける。

よし思へ海士の拾はぬ空貝空しき名をば立つべしや君
となむありける。

第八十二段

正月の朔日ごろ、大納言殿に兼盛参りたりけるに、物など宣はせて、すゞろに「歌よめ」と宣ひければ、ふと詠みたりける。

今日よりは萩の焼原かき分けて若菜つまむと誰をさそはむ
とよみたりければ、二なくめで給ひて、御かへし、
片岡にわらび萌えずば尋ねつつ心やりにや若菜つままし
となむよみ給ふ。

第八十三段

但馬國に通ひける兵庫頭なりける男の、かの國なりける女をおきて、京へ上りければ、雪の降りけるに云ひ遣せたりける。

山里に我を留めてわかれ路のゆきのまにまに深くなるらむ
と云ひたりければ、

山里に通ふ心も絶えぬべし行くもとまるも心細さに
となむ返したりける。

第八十四段

同じ男、紀伊國に下るに、寒しとて、衣をとりて遣せたりければ、女
紀のくにのむろの郡に行く人は風の寒さも思ひ知られじ
かへし、男

紀の國の牟婁の郡に行きながら君とふすまの無きぞ悲しき

第八十五段

修理の君に、右馬頭すみける時、方の塞がりければ、方違にまかるとて、え参りこぬ」といへり

ければ、

これならぬ事をも多く違ふれば恨みむ方もなきぞわびしき
かくて、右馬頭行かすなりにける比、詠みて遣せたりける。

いかでなほ網代の氷魚にこととはむ何によりてか我を問はぬと
といへりければ、かへし、

網代より外には氷魚のよるものか知らずばうちの人に問へかし

第八十六段

又同じ女に通ひける時、翌朝詠みたりける。

明けぬとて急ぎもぞする逢坂の霧立ちぬとも人に聞かすな

男はじめごろ詠みたりける。

いかにして我は消えなむ白露のかへりて後の物は思はじ

かへし、

垣ほなる君が朝顔見てしがな歸りて後は物や思ふと

同じ女に、氣近く物など云ひて、歸りて後に詠みてやりける。

修理がかへし、

心をし君にとどめて來にしかば物思ふ事は我にやあるらむ

魂はをかしき事もなかりけり萬のものは骸にぞありける

第八十七段

同じ女に、故兵部卿宮御消息などし給ひけり。「おはしまさむ」と宣ひければ聞えける。

高くとも何にかはせむ吳竹のひとよふたよのあだのふしをば

第八十八段

三條右大臣、中將にいますかりける時、祭の使にさされて、出で立ち給ひけり。通ひ給ひける女の、絶えて久しくなりにけるに、かゝる事になむ出で立つ。扇持たるべかりけるを、騒しうてなむ忘れにける。一つ賜へ」と云ひ遣り給へりけり。よしある女なりければ、よくて遣せてむと思ひ給ひけるに、色などもいと清らなる扇の、香などもいとかうばしうて遣せたり。引き返したる裏の、端の方に書きたりける。

ゆゆしとて忌むとも今はかひもあらじ憂きをば是に思ひよせてむ
とあるを見て、いと哀と思して、かへし、

ゆゆしとて忌みける物を我が爲になしといはぬは誰がつかきなる

第八十九段

故權中納言、左大臣の君をよばひ給ふ、年の十二月の晦日に、

物思ふと月日のゆくも知らぬ間に今年も今日にはてぬとか聞く

となむありける。又かくなむ。

いかにしてかく思ふてふ事をだに人傳ならで君に語らむ

かくいひくゝて、遂に逢ひにける朝に、

今日そへに暮れさらめやはと思へども堪へぬは人の心なりけり

第九十段

これも同じ中納言、齋宮の皇女を年頃よばひ奉り給ひて、今日明日逢ひなむとしける程に、伊勢

齋宮の御占に合ひ給ひにけり。言ふかひなく口惜しと、男思ひ給ひけり。さてよみて奉り給ひける。

伊勢の海千尋の濱に拾ふとも今はかひなく思ほゆるかな

となむありける。

第九十一段

故中務宮の北方亡せ給ひて後、小き君達を引き具して、三條の右大臣殿にすみ給ひけり。御忌

など過しては、遂に一人は過し給ふまじかりければ、かの北方の御弟九の君をやがて得給はむと思

しけるを、何かはさもと親兄弟も思したりけるに、如何ありけむ、左兵衛督君、侍従に物し給ひけ

る比、その御文持て來となむ聞き給ひける。扱心づきなしと思しけむ、もとの宮になむ渡り給ひ

にける。其の時に、御息所の御許より、

なき人の巢守にだにもなるべきに今はとかへる今日の悲しさ

宮の御かへし、

巢守にと思ふ心はとどむれど甲斐あるべくも無しとこそ聞け

となむありける。

第九十二段

同じ右大臣の御息所、帝おはしまさずなりて後、式部卿宮なむすみ奉り給ひけるを、如何あ

りけむ、おはしまさざりける比、齋宮の御許より、御文奉り給へりけるに、御息所、宮のおはしま

さぬ事など聞え給ひて、奥に、

白山にふりにし雪のあと絶えて今はこしちの人も通はず

となむありける。御かへしあれど、本になしとあり。

かくて九の君、侍従の君にあはせ奉り給ひてけり。同じ比御息所を、宮おはしまさずなりにければ、左大臣の右衛門督におはしける比、御文奉り給ひけり。かの君御どられ給ひぬと聞き給ひて、大臣、御息所に、

浪の打つ方も知らねどわたつ海のうらやましくも思ほゆるかな

第九十三段

太政大臣の北方うせ給ひて、御はての月になりて、御わざの事急がせ給ふ頃、月の面白かりけるに、端に出でる給ひて、物のいと哀に思されければ、

隠れにし月はめぐりてきにしかど影にも人は見えすぞありける

第九十四段

同じ太政大臣、左大臣の御母、菅原君かくれたまひにける。御服はて給ひにける比亭子の帝、内裏に御消息きこえ給ひて、色聽され給ひける。さりければ、大臣いと清らに蘇芳襲など著給ひて、后宮に参り給ひて、院の御消息のいと嬉しく侍りて、かく色聽され侍ることなど聞え給ふ。さて詠み給ひける。

ぬぐをのみ悲しと思ひしなき人のかたみの色は又もありけり

とてなむ泣き給ひける。その程は中辨になむ物し給ひける。

第九十五段

亭子の帝の御供に、太政大臣、大井に仕うまつり給へるに、紅葉小倉山に、いろ／＼いと面白かりけるを、限なくめで給ひて、「行幸もあらむに、いと興ある所になむありける。必ず奏してせさせ奉らむ」など申し給ひて、ついでに、

小倉山峯のみち葉心あらば今ひとたびのみゆき待たなむ

となむありける。かくて歸り給ひて奏し給ひければ、いと興ある事なりとて、大井の行幸といふ事はじめ給ひける。

第九十六段

大井に季繩少將すみける頃、帝宣ひける、「花面白くなりなば、必ず御覽せむ」とありけるを、思し忘れておはしまさざりければ、少將、

散りぬればくやしきものを大井川岸の山吹今日さかりなり

とありければ、いたう哀がり給ひて、急ぎおはしましてなむ御覽じける。

第九十七段

同じ少將、病にいたう煩ひて、少しおこたりて、内裏に参りたりけり。近江守公忠君、掃部助にて藏人なりける比なりけり。その掃部助に逢ひて云ひけるやう、「亂心地はまだおこたりはてねど、いとむつかしう、心もとなく侍ればなむ参りつる。後は知らねど、かくまで侍る事。罷り出でて、明後日ばかり参り來む。よきに奏し給へ」など云ひ置きて罷出ぬ。三日ばかりありて、少將の許より、文をなむ遣せたりけるを見れば、

悔しくぞ後に逢はむと契りける今日を限といはましものを

とのみ書きたり。いとあさましくて、涙をこぼして使に問ふ、「いかゞ物し給ふ」と問へば、使も「いと弱くなり給ひにたり」といひて泣くを、聞くに「更にも聞えず、自ら只今参りて」と云ひて、里に車とりによりて待つ程いと心もとなし。近衛御門に出で立ちて、待ちつけて乗りて馳せゆく。五條にぞ少將の家あるに、往きつきて見れば、いとみじく騒ぎのゝしりて門鎖しつ。死ぬるなりけり。消息いひ入るれど何のかひなし。いみじう悲しくて、泣くゝ歸りにけり。かくてありけることを、上の條奏しければ、帝も限なく哀がり給ひける。

第九十八段

土佐守にありける酒井人眞といひける人、病して弱くなりて、鳥羽なりける家に行くとして詠みける。

行く人はそのかみ來むといふものを心細しや今日の別れは

第九十九段

平仲が色好みけるさかりに市に行きけり。中比はよき人々市に行きてなむ、色好むわざはしける。それに故后宮の御達、市に出でける日なむありける。平仲色好みかゝりて、「二なう懸想しけり。後に文をなむ遣せたりける。女ども「車なりし人は多かりしを、誰にある文にか」となむ云ひやりける。さりければ男の許より、

百敷の袂のかずは見しかどもわきておもひの色ぞ戀しき

といへりけるは、武藏守の女になむありける。それなむいと濃き搔練著たりける。それをと思ふなりけり。さればその武藏なむ、後は返事はしていひつきにける。かたち清げに髪長くなどして、よき若人になむありける。いといたう人々懸想しけれど、思ひあがりて男などもせでなむありける。されど切によばひければ逢ひにけり。この朝文をも遣せず、夜まで音もせず。心憂しと思ひ明して、又の日待てど文も遣せず。その夜下待ちけれど、朝に、使ふ人など、いとあだにものし給ふと聞き

し人を、あり／＼てかく逢ひ奉り給ひて、自らこそ暇もさはり給ふ事ありとも、御文をだに奉り給はぬ、心憂き事などこれかれ云ふ。心地にも思ひぬたる事を人も云ひければ、心憂く悔しと思ひて泣きけり。その夜もしやと思ひて待てど又來ず。又の日も文も遣せず、すべて音もせで、五六日になりぬ。この女、音をのみ泣きて物も食はず。使ふ人など大方は「な思しそ、かくてのみ止み給ふべき御身にもあらず。人には知らせでやみ給ひて、ことわざをもし給ひてむ」と云ひけり。物も言はで籠り居て、使ふ人にも見えで、いと長かりける髪をかい切りて、手づから尼になりけり。使ふ人集りて泣きけれど、いふかひもなし。いと心憂き身なれば、死なむと思ふにも死なれず。かくだになりて、行をだにせむ。かしがましく斯くな人々いひ騒ぎそ」となむいひける。かゝりけるやうは、平仲その逢ひける翌朝、人遣せむと思ひけるに、司長官、俄に物へいますとて、よりいまして、寄り臥したりけるを、おひ起して、「今まで寝たりける」とて、逍遙しに遠き所へ率ていまして、酒飲みの、しりて、歸し給はず、辛うじて歸るまゝに、亭子の帝の御供に、大井に率ておはしましぬ。其所に又二夜候ふに、いみじう酔ひにけり。夜更けて歸り給ふに、この女の許いかむとするに、方の塞がりければ、大方みな違ふ方へ、院の人々類していにけり。この女、いかに覺束なく怪しと思ふらむと戀しきに、今日だに日も疾く暮れなむ、行きて有様も自らいはむ、かつ文を遣らむと、

酔ひ覺めて思ひけるに、人なむ來てうち叩く。「誰ぞ」と問へば、猶「尉の君に物聞えむ」といふ。さしのぞきて見ればこの家の女なり。胸潰れて、「此方來」と云ひて、文を取りて見れば、いと香しき紙に、切なる髪を少し搔いわがねて包みたり。いと怪しう覺えて、書いたる事を見れば、

あまの川そらなるものと聞きしかど我が目の前の涙なりけり

と書きたり。尼になりたるなるべしと見るに、目もくれぬ。心肝を感はして、この使に問へば、「早う御髪おろし給ひてき。かゝれば御達も、昨日今日いみじう泣き感ひ給ふ。下種の心地にも、いと胸痛くなむ。さばかりに侍りし御髪を」といひて泣く時に、男の心地いといみじ。なでふかゝる色好歩行をして、かく怪しき目を見るらむと思へどかひなし。泣く／＼返事書く。

世をわぶる涙流れて早くともあまの川にはさやはなるべき

いとあさましきに、え物も聞えず、「自ら只今参りて」となむ云ひたりける。かくて即ち來にけり。そのかみ女は塗籠に入りけり。事のあるやう、さばかりを、使ふ人々に云ひて泣く事かぎりなし。「物をだに聞えむ。御聲をだにし給へ」といひけれど、更に答をだにせず。「かゝるさはりをば知らで、なほ只いとほしさに、いふとや思ひけむ」とてなむ、男は世にいみじきことにしける。

第一百段

滋幹少將に、女、

戀しさに死ぬる命を思ひ出でて問ふ人あらばなしと答へよ

少將、かへし

骸にだに我來たりてへ露の身の消えば共にと契り置きてき

第一百一段

中興の近江介が女、物の怪に煩ひて、淨藏大徳を驗者にしける程に、人兎角いひけり。猶しもはたあらざりけり。忍びてあり經て後、人の物いひなどもうたてあり、猶世に經じなど思ひ云ひてうせにけり。鞍馬といふ所に籠りて、いみじう行ひ居り。さすがにいと戀しう覺えけり。京を思ひやりつゝ、萬の事いと哀におぼえて行ひけり。泣くくうち伏して、傍を見れば、文なむ見えける。何ぞの文ぞと思ひて取りて見れば、この我が思ふ人の文なり。書けることは、

墨染のくらまの山に入る人は辿るくもかへり來なむ

と書けり。いと怪しく誰して遣せつらむと思ひ居り。持て來べき便もおぼえず、いと怪しかりければ、又一人惑ひ來にけり。かくて又山に入りにけり。さておこせたりける。

からくして思ひ忘るる戀しさをうたて鳴きつる鶯の聲

かへし、

さても君忘れけりかし鶯の鳴く折のみや思ひ出づべき

となむいへりける。又淨藏大徳、

我がために辛き人をば置きながら何の罪なき世をや怨みむ

ともいひけり。この女は二なくかしづきて、皇子たち上達部よばひ給へど、帝に奉らむとてあはせざりけれど、この事出で來れば、親も見ずなりにけり。

第一百一段

故兵部卿宮、この女のかゝる事、まだしかりける時、よばひ給ひけり。親王、

萩の葉のそよぐごとにぞ恨みつる風にうつりてつらき心を

これも同じ宮、

淺くこそ人は見るらめ關川の絶ゆる心はあらじとぞ思ふ

かへし、

關川の岩間をくぐる水淺み絶えぬべくのみ見ゆる心を

かくて、この女出でて物聞えなどすれど、逢はでのみありければ、親王おはしましたりけるに、月

のいと明かりければ、詠み給ひける。

夜な夜なに出づと見しかど儂くて入りにし月といひてやみなむと宣ひけり。かくて扇を落し給へりけるを、取りて見れば、知らぬ女の手にてかく書けり。

忘らるる身はわれからのあやまちになしてだにこそ君を恨みめと書けりけるを見て、その傍に書きつけて奉りける。

ゆゆしくも思ほゆるかな人ごとに疎まれにける世にこそありけれとなむ。又この女、

忘らるゝときはの山のねをぞなく秋野の蟲の聲に亂れて

かへし、

なくなれどおぼつかなくぞ思ほゆる聲聞く事の今はなければ

又同じ宮、

雲井にて世をふる頃は五月雨のあめの下にぞ生けるかひなき

かへし、

降ればこそ聲も雲井に聞えけやいとど遙けき心地のみして

同じ宮に、こと女

逢ふことの願ふばかりになりぬればただに歸しし時ぞ戀しき

第三百三段

南院の今君といふは、右京大夫宗子君の女なり。それ太政大臣の尙侍君の御かたに候ひけり。それを兵衛君、あや君と聞えける時、曹司にしばくおはしけり。おはし絶えにければ、床夏の枯れたるにつけて、かくなむ。

かりそめに君がふしみし床夏の根も枯れにしをいかで咲きけむ

となむありける。

第三百四段

同じ女、巨城が牛を借りて、又後に借りたりければ、「奉りし牛は死にき」と云ひたりける、返事に、

我が乗りし事をうしとや消えにけむ草にかかれる露の命は

第三百五段

同じ女、人に、

おほ空は曇らすながら神無月としの経るにも袖は濡れけり

第一百六段

大膳大夫公平の女ども、縣井戸といふ所に住みけり。おほい子は、后宮に少將の御といひて候ひけり。三にあたりけるは、備前守信明、まだ若男なりける時になむ、初の男にしたりける。住まざりければ、詠みて遣りける。

この世にはかくてもやみぬ別路の淵瀬をたれに問ひて渡らむ
となむありける。

第一百七段

同じ女、後に兵衛尉庶忠に逢ひて、詠みて遣せたりける。風吹き雨降りける日のことになむ。

こち風はけふ日暮しに吹くめれど雨もよにはたよにもあらじな
とよみけり。

第一百八段

兵衛尉離れて後、臨時祭の舞人にさされて行きけり。この女ども、物見に出でたりけり。さて歸りて詠みてやりける。

昔著て馴れしをすれる衣手をあな珍らしとよそに見るかな
かくて兵衛尉、山吹につけておこせたりける。

もろともに井出の里こそ戀しけれひとりをりうき山吹の花
となむ。かへしは知らず。かくてこれは、女通ひける時に、

大空もただならぬかな神無月我のみしたにしぐると思へば
これも同じ人、

逢ふ事のなみの下草水がくれて靜心なく音こそ泣かるれ

第一百九段

桂の皇女、七夕の比、忍びて逢ひ給へりけり。さて遣り給へりける。
袖をしもかさざりしかど七夕のあかぬ別れにひぢにけるかな

第一百十段

右大臣の、頭におはしける時に、少貳の乳母の許に詠みて給ひける。
秋の夜を待てと頼めし言の葉に今もかかれる露のはかなさ
となむ。

秋も來ず露も置かねど言の葉は我が爲にこそ色變りけれ

第一百一段

公平の女、死ぬとて、

ながけくも頼みけるかな世の中を袖に涙のかかる身をもて

第一百二段

桂の皇女、よしたねに、

露しげみ草の袂を枕にて君まつむしの音をのみぞなく

第一百三段

閑院のおほい君、

昔より思ふ心はありそ海の濱のまさごは數も知られず

第一百四段

同じ女に、陸奥國の守にて死にし藤原眞樹が、詠みて遣せたりける。病いと重くしておこたりける比なり、「いかで對面給はらむ」とて、

からくして惜みとめたる命もて逢ふ事をさへやまむとやする

といへりければ、おほい君、かへし、

諸共にいざとはいはで死出の山などかはひとり越えむとはせし

といひたりけり。さて來たりける夜もえ逢ふまじき事やありけむ、え逢はざりければ歸りにけり。

さて朝に、男の許より云ひ遣せたりける。

曉はゆふつけ鳥のわび聲におとらぬ音をぞ鳴きて歸りし

おほい君、かへし、

曉の寢覺の耳に聞きしかど鳥よりほかの聲はせざりき

第一百五段

太政大臣は、大臣になり給ひて年比おはするに、枇杷大臣は、えなり給はであり渡りけるを、終に大臣になり給ひける御悦に、太政大臣、梅を折りてかざし給ひて、

遅く疾くつひに咲きける梅の花たが植ゑおきし種にかあるらむ

とありけり。その日の事どもを、歌など書きて、齋宮に奉り給ふとて、三條右大殿の女御、やがて

これに書きつけ給ひける。

いかでかく年嫌もせぬ種もがなあれゆく庭の陰とたのみむ

とありけり。その御返し、齋宮よりありけり。忘れにけり。かくて願ひ給ひけるかひありて、左大臣の中納言、渡り住み給ひければ、種皆ひろごり給ひて、陰多くなりけり。さりける時に、齋宮より、

花ざかり春は見に来む年嫌もせずといふ種は生ひぬとか聞く

第一百十六段

實任少貳といひける人のむすめの男、

笛竹のひとよも君と寝ぬ時は千種のこゑに音こそなかるれ

といへりければ、女かへし、

千千の音は言葉のふきか笛竹のこちくの聲も聞え來なくに

第一百十七段

俊子が志賀に詣でたりけるに、増基君といふ法師ありけり。それは比叡にすむ院の殿上もする法師になむありける。それこの俊子の詣でたる日、志賀に詣であひにけり。はし殿に局をしてゐて、萬の事をいひかはしけり。今は俊子歸りなむとしけり。それに増基の許より、逢ひ見ても別るる事のなかりせばかつが物と思はざらまし

かへし

いかなればかつが物を思ふらむ名残もなくぞわれは悲しきとなむありける。詞もいと多くなむありける。

第一百十八段

同じ増基君、遣れる人の許は知らず、かう詠めりけり。

草の葉にかかれる露の身なればや心動くになみだ落つらむ

第一百十九段

本院の北方、まだ帥大納言の妻にいますかりける折に、平仲が詠みて聞えける。春の野に緑にはへるさねかづら我が君實と頼むいかにぞ

といへりける。その後左大臣の北方にて、のしり給ひける時、詠みて遣せたりける。

行末の宿世も知らず我が昔契りしことはおもほゆや君

となむいへりける。その返し、それより前々も、歌は多かりけれど、え聞かず。

第一百二十段

泉大將、故左大臣に參で給へりけり。ほかにて酒などまゐり、酔ひて夜いたく更けて、ゆく

りもなくものし給へり。大臣驚き給ひて、「何處にもものし給へる便にかあらむ」など聞え給ひて、御格子あげ騒ぐに、王生忠岑御供にあり、御階の下に松ともしながら、ひさまづきて御消息申す。

かささぎの渡せる橋の霜の上を夜半に踏み分けことさらにこそ

となむ宣ふ」と申す。主人の大臣、いと哀にをかしと思して、その夜一夜、御酒まわり遊び給ひて、大將に物かづけ、忠岑も祿賜はりなどしけり。

第二百一段

この忠岑が女ありと聞きて、或人なむ得むといひけるを、いと善き事なりといひけり。男の許より「かのたのめ給ひし事、この頃の程にとなむ思ふ」といへりける返事に、

我が宿の一本薄うら若み結びどきにはまだしかりけり

となむ詠みたりける。誠にまだいと小き女になむありける。

第二百二段

筑紫にありける檜垣の御といひけるは、いと勞あり、をかしくて世を経ける者になむありける。年月かくてあり渡りけるを、純友が騒に遭ひて、家も焼け亡び、物具も皆捕られはて、いとみじろなりにけり。かゝりとも知らず、野大貳追討使にくだり給ひて、それが家のありし邊を尋ねて、

「檜垣の御と云ひけむ人に、いかで逢はむ。何處にか住むらむ」と宣へば、「この邊になむ住み侍りし」など、供なる人もいひけり。「あはれかゝる騒に、いかになりにけむ。尋ねてしがな」と宣ひける程に、頭白き姫の水波めるなむ、前より怪しきやうなる家に入りける。或人ありて、「これなむ檜垣の御」と云ひけり。いみじうあはれがり給ひて呼ばすれど、恥ぢて來で、かくなむいへりける。

ぬばたまの我が黒髪はしら川のみづはぐむ迄なりにけるかな

と詠みたりければ、あはれがりて、著たりける袖一襲脱ぎてなむ遣りける。

第二百三段

又同じ人、大貳の館にて、秋の紅葉を詠ませければ、

鹿の音はいくらばかりの紅ぞふり出づるからに山の染むらむ

この檜垣の御、歌なむ詠むといひて、すき者ども集りて、「詠み難かるべき末をつけさせむ」とて、かくいひけり。

わたつ海の中にぞ立てるさを鹿は

とて、末をつけさするに、

秋のやまべやそこに見ゆらむ

とぞつけたりける。

第二百二十四段

筑紫なりける女、京に男を遣りてよみける。

人を待つ宿はくらくぞなりにける契りし月のうちに見えねば
となむいへりける。

第二百二十五段

これも筑紫なりける女、

秋風の心やつらき花すすき吹き來る方をまづそむくらむ

第二百二十六段

先帝の御時、四月の朔日の日、鶯の鳴かぬを詠ませ給ひける。公忠、

春はただ昨日ばかりを鶯のかぎれるごとも鳴かぬ今日かた
となむ詠みたりける。

第二百二十七段

同じ帝の御時、躬恒を召して、月のいと面白き夜、御遊などありて、「月を弓張といふは何の意ぞ、

そのよし仕うまつれ」と仰せ給ひければ、御階の下に候ひて仕うまつりける。

照る月を弓はりとしもいふ事は山邊をさしていればなりけり

祿に大桂かづきて、又、

白雲のこのかたにしもありゐるは天つ風こそ吹きて來つらし

第二百二十八段

同じ帝、月の面白き夜、密に御息所たちの御曹司どもを、見歩かせ給ひけり。御供に公忠候ひけり。それにある御曹司より、濃き桂一襲著たる女の、いと清げなる出で來て、いみじう泣きけり。公忠を召して見せ給ひければ、髪を振り覆ひていみじう泣く。などて泣くぞ」といへど、答もせず。帝いみじう怪しがり給ひけり。公忠、

思ふらむ心のうちは知らねどもなくを見るこそ悲しかりけれ
と詠めりければ、いと二なくめで給ひけり。

大和物語

下之卷

第二百二十九段

先帝の御時に、ある御曹司にきたなげなき童ありけり。帝御覽じて、密に召してけり。これを人にも知らせ給はで、時々召しけり。さて宣はせける。

飽かでのみ経ればなるべし逢はぬ夜もあふ夜も人を哀とぞ思ふ

と宣はせけるを、童の心地にも、限なく哀におぼえければ、忍びあへで、友だちに「さなむ宜ひし」と語りければ、この主なる御息所、聞きて追ひ出で給ひけるものか。いみじう。

第三百十段

三條右大臣の女、堤中納言に逢ひ始め給ひける間は、内藏助にて、内裏の殿上をなむしたまひける。女は逢はむの心やなかりけむ、心もゆかすなむいますかりける。男も宮仕し給ひければ、え常にもいまさざりける頃、女、

薰物のくゆる心はありしかどひとり絶えて寝られざりけり

かへしは、上手なればよかりけめど、え聞かねば書かず。

第三百十一段

又男「日比騒がしくてなむえ参らぬ。かく急ぎ罷りありく中にも、え参り來ぬ事をなむ、いかにと限なく思ひ給ふる」とありければ、女、

騒ぐなるうちにも物は思ふなり我が徒然を何にたとへむ

となむありける。

第三百十二段

志賀の山越の道に、岩江といふ所に、故兵部卿宮、家をいとをかしう造り給ひて、時々おはしましけり。いと忍びておはしまして、志賀に詣づる女どもを見たまふ時もありけり。大方もいと面白う、家もいとをかしうなむありける。俊子、志賀に詣でける序に、この家に來て廻りつゝ見て、哀がりめでなどして書きつけたりける。

かりにのみ來る君待つとふり出でて鳴くしか山は秋ぞ悲しきとなむ。

第三百三十三段

小薬師久曾といひける人、或人をよばひて遣せたりける。
隠れ沼の底の下草みがくれて知られぬ戀は苦しかりけり
かへし、女、

水隠にかくるばかりの下草は長からじとも思ほゆるかな
この小薬師といひける人は、丈なむいと短かりける。

第三百三十四段

先帝の御時に、承香殿の御息所の御曹司に、中納言君といふ人候ひけり。それを故兵部卿宮。
若男にて、一宮と聞えて色好み給ひける頃、承香殿は、いと近き程になむありける。らうあり、を
かしき人々あり、と聞き給ひて、物など宣ひかはしけり。さりける頃ほひ、この中納言君に、忍び
て寝給ひそめてけり。時々おはしまして後、この宮をさく訪ひ給はざりけり。さる頃、女の許よ
り奉りける。

人をとくあくた川てふ津の國の名には違はぬ君にぞありける
かくて物も食はで、泣くく病になりて戀ひ奉りける。かの承香殿の前の松に、雪の降りかゝりた

りけるを折りて、かくなむ聞え奉りける。

來ぬ人をまつ葉にふる白雪の消えこそかへれ逢はぬ思ひに
とてなむ、「ゆめこの雪おとすな」と、使にいひてなむ奉りける。

第三百三十五段

故兵部卿宮、昇大納言の女にすみ給ひけるを、例の御座所にはあらで、廂に御座敷きて、大殿
籠などして歸り給ひて、程久しうおはしまさざりけり。かくて宣へりける、「かの廂に敷かれたりし
物は、さながらありや、取りたてやし給ひてし」と宣へりければ、御返事に、

敷きかへすありしながらに草枕塵のみぞゐる拂ふ人なみ

とありければ、御返しに、

草枕塵拂ひには唐ごろも袂ゆたかにたつを待てかし

とありければ、又、

唐衣たつを待つ間の程こそは我がしきたへの塵も積らめ

となむありければ、おはしまして、又「宇治へ狩しになむ往く」と宣ひける。御かへしに、
御狩するくりこま山の鹿よりもひとり寝る夜ぞわびしかりける

第三百三十六段

良殖といひける宰相の兄弟、大和掾といひてありけり。それが本妻の許に、筑紫より女を率て来てすゑたりけり。本妻も心よく語ひ居たりけり。かくてこの男は、此處彼處ひとの國がちにのみ歩きければ、二人のみなむゐたりける。この筑紫の妻、忍びて男したりけり。それを人のとかく云ひければ詠みたりける。

夜半に出でて月だに見ずば逢ふ事を知らず顔にも言はましものを

となむ。かゝるわざをすれど、本妻いと心よき人なれば、男にも言はでのみなむあり渡りけれども、外の便より、かく男すなりと聞きて、この男思ひたりけれど、心にも入れて、只さるものにて置きたりけり。さてこの男、女他人に物云ふと聞きて、「その人と我といづれをか思ふ」と問ひければ、女、

花すすき君がかたにぞ靡くめる思はぬ山の風は吹けども

となむいひける。よばふ男もありけり。世中心憂し。猶男せじ、などいひけるものなむ、この男をやうく思ひやつきけむ、この男の返事などして遣りて、この本妻の許に、文をなむひき結びて遣せたりける。見れば、かく書けり。

身を憂しと思ふ心のこりねばや人をあはれと思ひそむらむ

となむ、こりすまに詠みたりける。かくて心の隔もなく哀なれば、いとあはれと思ふ程に、男は心かはりにければ、ありし如もあらねば、かの筑紫に、親兄弟などありければ往きけるを、男も心變りければ、留めでなむやりける。本妻なむ諸共にありならひにければ、かくていく事をいと悲しと思ひける。山崎に諸共に往きてなむ、船に乗せなどしける。男も來たりけり。この後妻前妻、一日一夜萬の事を云ひ語ひて、翌朝船に乗りぬ。今は男、本妻は、歸りなむとて車に乗りぬ。これもかれもいと悲しと思ふ程に、船に乗り給ひぬる人の文をなむ持てきたる。かくのみなむありける。

ふたり來し道とも見えぬ浪の上を思ひかけでも歸すめるかな

といへりければ、男も本妻も、いといたう哀がり泣きけり。漕ぎ出でて往ぬれば、え返事もせず、車は船の行くを見て得往かず、船に乗りたる人は車を見ると、面をさし出でて漕ぎ行けば、遠くなる儘に、顔はいと小くなる迄見遣せければ、いと悲しかりけり。

第三百三十七段

故御息所の御姊、おほい子に當り給ひけるなむ、いとらうくしく、歌よみ給ふ事も、おとうとたち、御息所よりも勝りてなむいますかりけり。若き時に、女親は失せ給ひにけり。繼母の手にい

ますかりければ、心に物の叶はぬ時もありけり。さて詠み給ひける。

ありはてぬ命まつ間の程ばかり憂きこと繁く歎かずもがな

となむよみ給ひける。梅の花を折りて、また、

かかる香の秋も變らず匂ひせば春戀してふながめせましや

とよみ給へりける。いとよしづきて、をかしくいますかりければ、よばふ人もいと多かりけれど、

返事もせざりけり。女といふもの、遂にかくて終て給ふべきにもあらず。時時は返事し給へ」と、

親も繼母もいひければ、責められて、かくなむいひ遣りける。

思へどもかひなかるべみ忍ぶればつれなきともや人の見るらむ

とばかり云ひやりて、物も言はざりけり。かく云ひける心ばへは、親など男あはせむといひけれど、

一生に男せでやみなむといふ事を、世と共にいひける。さ言ひけるも著く、男もせで二十九にてな

む、亡せ給ひにける。

第三百三十八段

昔在中將の御息子、在次君といふが妻なる人なむありける。女は山蔭中納言の御姪にて、五條の

御となむ云ひける。かの在次君の妹の、伊勢守の妻にて、いますかりけるが許に往きて、守の召人

にてありけるを、この妻の兄の在次君は、忍びてすむになむありける。我のみと思ふに、この男の兄弟なむ、又あひたる氣色なりける。さりければ女の許に、

忘れなむと思ふ心の悲しさはうきも憂からぬものにぞありける

となむ詠みたりける。今は皆ふるごとになりたる事なり。

第三百三十九段

この在次君、在中將の東に往きたる故にやあらむ、この子供も、他國通ひをなむ時々しける。心

ある者にて、他國の哀に心細き所にては、歌詠みて書きつけたなどなむしける。小總驛といふ所は、

海邊になむありける。それに詠みて書きつけたりける。

わたつ海と人や見るらむ逢ふことの涙をふさに泣きつめつれば

又箕輪の里といふ驛にて、

いつとは別かねど絶えて秋の夜ぞ身の侘しさは知り勝りける

と詠みて書きつけたりけり。かくて他國ありきく、甲斐國に到りて住みける程に、病して死ぬ

とて、詠みたりける。

かりそめのゆきかひ路とぞ思ひしを今はかぎりの門出なりけり

とよみてなむ死にける。この在次君の一所に具して知りたりける人、三河國より上るとて、この驛どもに宿りて、この歌どもを見て、手は見知りたりければ、見つけていと哀と思ひけり。

第四百四十四段

亭子の帝、河尻におはしましにけり。遊女に白といふものありけり。召しに遣したりければ、参りてさぶらふ。上達部、殿上人、皇子達の數多候ひ給ひければ、下に遠くさぶらふ。かう遙に候ふよし、歌仕うまつれ」と仰せられければ、即ち詠みて奉りける。

濱千鳥飛び行くかぎりありければ雲立つ山をあはとこそ見れ
と詠みたりければ、いとかしこくめで給ひて、かづけ物賜ふ。

命だに心に叶ふものならば何かわかれの悲しからまし

といふ歌も、この白が詠みたる歌なりけり。

第四百四十一段

亭子の帝、鳥飼の院におはしましにけり。例のごと御遊あり。この邊の遊女ども數多参りて候ふ中に、「聲面白く、よしある者は侍りや」と問はせ給ふに、遊女ばらの申すやう、「大江玉淵が女といふ者なむ、珍らしう参りて侍る」と申しければ、見させ給ふに、さまかたちも清げなりければ、あ

はれがり給ひて、うへに召し上げ給ふ。「そもそも實か」など問はせ給ふに、鳥飼といふ題を、人々に詠ませ給ひにけり。仰せ給ふやう、「玉淵はいと勞ありて、歌などよくよみき。この鳥飼といふ題を、よく仕うまつりたらむにしたがひて、實の子とは思ほさむ」と仰せ給ひけり。承りて、すなはち、

浅みどりかひある春に逢ひぬれば霞ならねど立ちのぼりけり

と詠む時に、帝の、「しり哀がり給ひて、御しほたれ給ふ。人々もよく酔ひたる程にて、酔泣いと二なくす。帝、御桂一襲、袴賜ふ。」ありとある上達部、皇子達、四位五位、これに物ぬぎて取らせざらむ者は、座より立ちね」と宣ひければ、片端より上下皆かづけたれば、かづき餘りて、二間はかり積みてぞ置きたりける。かくて歸り給ふとて、南院の七郎君といふ人ありけり、それなむこの遊女の住む邊に、家造りて住むと聞しめして、それになむ宣ひあづけらる。「彼が申さむ事、院に奏せよ。院より賜はせむ物も、かの七郎君許遣さん。すべてかれに侘しき目な見せそ」と仰せられければ、常になむ訪ひかへりみける。

第四百四十二段

昔、津の國に住む女ありけり。それをよばふ男、二人なむありける。一人は、その國に住む男、

姓は菟原になむありける。今一人は、和泉國の人になむありける。姓は血沼となむいひける。かくてその男ども、年齢、顔容貌、人の程、たゞ同じ許りになむありける。志の優らむにこそはあはめと思ふに、志の程只同じやうなり。暮るれば諸共に來あひぬ。物遣すれば、只同じやうにおこす。何れ優れりといふべくもあらず。女思ひ煩ひぬ。この人の志の疎ならば、何れにも逢ふまじけれど、此も彼も月日を経て、家の門に立ちて、萬に志を見えければ、しわびぬ。此よりも彼よりも、同じやうに遣する物ども、取りも入れねど、いろ／＼に持ちて立てり。親ありて、かく見苦しく年月を経て、人のなげきを、徒に負ふもいとほし。ひとり／＼に逢ひなば、今一人が思ひは絶えなむ」といふに、女「こゝにもさ思ふに、人の志の同じやうなるになむ思ひ煩ひぬ。さらば如何すべき」と言ふに、そのかみ生田川の畔に、平張をうちて居にけり。かかれば、そのよばひ人どもを呼びに遣りて、親のいふやう、「誰も御志の同じやうなれば、この幼き者なむ思ひ煩ひにて侍る。今日いかにまれ、この事を定めてむ。或は遠き所よりいまする人あり。或は此處ながらそのいたつき限なし。此も彼も、いとほしきわざなり」といふ時に、いとかしこく喜びあへり。「申さむと思ふ給ふるやうは、この川に浮きて侍る水鳥を射給へ。それを射中て給へらむ人に奉らむ」といふ時に、「いとよき事なり」といひて射る程に、一人は頭の方を射つ。今一人は尾の方を射つ。そのかみ何れとい

ふべくもあらぬに、女思ひ煩ひて、

住みわびぬわが身なげてむ津の國の生田の川は名のみなりけり

と詠みて、この平張は川に臨みてしたりければ、つぶりと落ち入りぬ。親あわて騒ぎののしる程に、このよばふ男二人、やがて同じ所に落ち入りぬ。一人は足をとらへ、今一人は手をとらへて死にけり。そのかみ親いみじく騒ぎて、取り上げて泣きの、しりて、葬す。男どもの親も來にけり。この女の塚の傍に、また塚ども作りて掘り埋む。時に津の國の男の親いふやう、「同じ國の男をこそ同じ所にはせめ。他國の人の、いかでかこの國の土をば犯すべき」といひて妨ぐる時に、和泉の方の親、和泉國の土を船に運びて此處にもて來てなむ遂に埋みてける。されば女の墓をば中にて、左右になむ男の塚ども今もあなる。かゝる事どもの昔ありけるを、繪にみな書きて、故后宮に人の奉りければ、これがうへを、皆人々、この人に代りて詠みける。

伊勢の御息所、男の心にて、

影とのみ水のしたにて逢ひ見れば魂なき骸はかひなかりけり

女になり給ひて、女一の宮、

かぎりなく深く沈める我が魂は浮きたる人に見えむものかは

また、宮、

何處にか魂を求めむわたつ海のここかしことも思ほえなくに

兵衛命婦

東の間も諸共にとぞ契りける逢ふとは人に見えぬものから

絲所の別當、

勝ちまけもなくてやはてむ君により思ひくらぶの山は越ゆとも

生きたりし折の女になりて、

逢ふ事のかたみに植うるなよ竹のたちわづらふと聞くぞ悲しき

また、人、

身を投げて逢はむと人に契らねどうき身は水にかけをならべつ

又、一人の男になりて、

同じ江に住むは嬉しきかなれどなど我とのみ契らざりけむ

かへし、女、

うかりける我が水底をおほ方はかかる契のなからましかば

又、一人の男になりて、

われとのみ契らずながら同じ江にすむは嬉しきみぎはとぞ思ふ

さてこの男は、吳竹の節ながきを切りて、かぎりて、狩衣・袴・烏帽子、帯などを入れて、弓・胡籙・太刀などを入れてぞ埋みける。今一人は、おろかなる親にやありけむ、さもせずぞありける。かの塚の名をば、處女塚とぞいひける。ある旅人、この塚のもとに宿りたりけるに、人のいさかひする音のしければ、怪しとは思ひて見せけれど、「さる事もなし」と言ひければ、怪しと思うく眠りたるに、血に塗れたる男、前に来て跪きて、「われ敵にせめられてわびにて侍り。御太刀暫時貸し給はらむ。妬き者の報し侍らむ」といふに、恐しと思へど貸してけり。覺めて夢にやあらむと思へど、太刀は誠にとらせて遣りてけり。とばかり聞けば、いみじう前の如評ふなり。暫時ありて初の男来て、いみじう喜びて、「御徳に年比妬き者うち殺し侍りぬ。今よりは長き御守護となり侍るべき」とて、この事の初より語る。いとむくつけしと思へど、珍しき事なれば、問ひ聞く程に、夜も明けにければ人もなし。朝に見れば、塚のもとに血などなむ流れたりける。太刀にも血つきてなむありける。いとうとましく覺ゆる事なれど、人の云ひける儘なり。

第四百十三段

津の國の難波の邊に、家して住む人ありけり。あひ知りて年比ありけり。女も男も、いと下種にはあらざりけれど、年比活計などもいと悪くなりて、家も毀れ、使ふ人なども徳ある所に行きつゝ、只二人棲み渡る程に、さすがに下種にもあらねば、人に雇はれ使はれもせず、いと侘しかりける儘に、思ひわびて二人云ひけるやう、「猶いとかう侘しうてはえあらじ」。男は「かくはかなくていきますかめるを見捨てては、いづちもいづちもえ行くまじ」。女も「男を捨てては、何方かいかむ」とのみ云ひ渡りけるを、男「己はとてまかくても經なむ、女のかく若き程に、斯くてあるなむいといとほしき。京に上りて宮仕をもせよ。宜しきやうにもならば、我をも訪へ。己も人の如もならば、必ず尋ね訪はむ」など、泣く／＼いひ契りて、便の人にいひつきて、女は京に來にけり。さしはへ何處ともなくて來れば、このつきて來し人の許にゐて、いと哀と思ひやりけり。前に荻薄いと多かる所になむありける。風など吹きけるに、かの津の國を思ひやりて、いかであらむなど悲しくてよみける。

ひとりしていかにせましと侘びつればそよとも前の荻ぞ答ふる

となむ獨語ちける。さてとかう女流浪へて、或人のやごとなき所に宮たてたり。さて宮仕しありく程に、装束清げにし、むつかしき事などもなくてありければ、いと清げに顔容貌もなりにけり。か

かれど、かの津の國を片時も忘れず、いと哀と思ひやりけり。便の人に文つけて遣りたりければ、「さいふ人も聞えず」など、いとはかなく云ひつゝ來けり。我が陸じう知れる人もなかりければ、心ともえやらす、いと覺束なく如何あらむとのみ思ひやりけり。かゝる程に、この宮仕する所の北方うせ給ひて、此彼ある人を召し使ひ給ひなどする中に、この人を思ひ給ひけり。思ひつきて妻になりにけり。思ふ事もなくめでたげにてゐたるに、只人知れず思ふ事一つなむありける。いかにしてあらむ、悪しうてやあらむ善くてやあらむ、我が在所もえ知らざらむ。人を遣りて尋ねさせむとすれど、うたて、我が男聞きてうたてある様にもこそあれと念じつゝあり渡るに、猶いと哀に覺ゆれば、男に云ひけるやう、「津の國といふ所のいとをかしげなるに、いかで難波に祓しがてら罷らむ」と云ひければ、「いとよき事、我も諸共に」といひければ、「其許にはな物し給ひそ。おのれ獨罷らむ」といひて、出で立ちていにけり。難波に祓して歸りなむとする時に、「この邊に見るべき事なむある」とて、「今少しとやれかくやれ」といひつゝ、この車を遣らせつゝ、家のありし邊を見るに、屋もなし人もなし、何方へいにけむと悲しう思ひけり。かゝる心ばへにてふりはへ來たれど、我が陸しき從者もなし。かゝれば尋ねさすべき方もなし。いと哀なれば、車を立て、眺むるに、供の人は「日暮れぬべし、とく御車促してむ」といふに、「暫し」といふ程に、蘆荷ひたる男の、乞兒のやうなる

姿なる、この車の前よりいきけり。これが顔を見るに、その人といふべくもあらず、いみじき様なれど、我が男に似たり。これを見てよく見まほしさに、「この蘆持ちたる男呼ばせよ、蘆買はむ」といはせけり。さりければ、用なきもの買ひ給ふとは思ひけれど、主の宣ふことなれば、呼びて買はず。車のもと近く荷ひ寄せさせよ、見む」など云ひて、この男をよく見るにそれなりけり。いと哀に、「かゝる物商ひて世に經る人、いかならむ」と云ひて泣きければ、供の人は、なほ大方の世を哀がるとなむ思ひける。かくて「この蘆の男に物など食はせよ。物いと多く蘆の價に取らせよ」といひければ、「すゞろなる者に、何か物多く賜はむ」など、ある人々いひければ、強ひてもえ云ひにくくて、いかで物を取らせむ、と思ふ間に、下簾の間のあきたるより、この男まれば我が妻に似たり。怪しさに、心ををさめて見るに、顔も聲もそれなりけりと思ふに、思ひあはせて、我が様のいといらなくなりけるを思ひ量るに、いとはしたなくて、蘆もうち捨てて走り逃げにけり。暫しと云はせけれど、人の家に逃げ入りて、竈の後方に屈まり居りけり。この車より、「猶この男尋ね率て來」といひければ、供の人、手を分ちて覓め騒げり。人、「そこなる家になむ侍る」といへば、この男に「かく仰事ありて召すなり。何の打ち引かせ給ふべきにもあらず、物をこそ賜はせむとすれ。幼き者なり」といふ時に、硯を乞ひて文を書く。それに、

君なくてあしかりけりと思ふにもいと難波の浦ぞ住みうき

とかきて、封じて、「これを御車に奉れ」といひければ、怪しとおもひて持て來て奉る。あけて見るに、悲しき事物に似ず、よゝとぞ泣きける。さて返しは如何したりけむ、知らず。車に著たりける衣脱ぎて包みて、文など書き具してやりける。さてなむ歸りける。後はいかゞなりにけむ、知らず。

あしからじとてこそ人の別れけめ何かなにはの浦は住みうき

第四百四十四段

昔、大和國葛城郡に住む男女ありけり。この女、顔容貌いと清らなり。年比思ひかはしてすむに、この女、いとわろくなりければ、思ひ煩ひて、限なく思ひながら妻をまうけてけり。この今の妻は、富みたる女になむありける。殊に思はねど、往けばいみじういたはり、身の装束いと清らかにせさせけり。かく賑はしき所に慣ひて來れば、この女いとわろげにて居て、かく外に歩けど、更に妬げにも見えすなどあれば、いと哀と思ひけり。心地にも限なく妬く心憂く思ふを、忍ぶるになむありける。留まりなむと思ふ夜も、猶「往ね」と言ひければ、我がかくありきするを、妬まで他事するにやあらむ、さるわざせずば恨むる事もありなむなど、心のうちに思ひけり。さて出でて往くと見えて、前裁の中に隠れて、男や來ると見れば、端に出で居て、月のいとみじう面白きに、

頭かしらかい梳けちりなどして居り。夜更よふくるまで寝ず、いといたううち歎なげきて眺ながめければ、人待ひとまちつなめりと見るに、使つかふ人の前まへなりけるに云いひける。

風吹かぜけば沖おきつしらなみたつた山夜半やまよなはんにや君きみがひとり越こゆるむ

と詠よみければ、我が上かみを思おもふなりけりと思おもふに、いと悲かなしうなりぬ。この今の妻めかけの家いへは、立田山越たちだやまこえてゆく道みちになむありける。かくて猶見居なほみゐりければ、この女おんなうち泣なきて臥ふして、鏡かみなりに水みづを入れて、胸むねになむすゑたりける。怪あやし、如何いかにするにかあらむとてなほ見る。さればこの水みづ、熱湯あつゆに沸たぎりぬれば、湯捨ゆすてつ。又水またみづを入いる。見るにいと悲かなしくて、走り出はでて、「いかなる心地こころし給たまへば、かくはし給たまふぞ」と云いひて、搔かきてなむ寝ねにける。かくて外ほかへも更さらに往いかで、つと居ゐにけり。かくて月日つきひ多く経たて思おもひやるやう、つれなき顔かほなれど、女の思おもふ事こといといみじき事ことなりけるを、かく往いかぬを、いかに思おもふらむと思おもひ出いでて、ありし女の許かたが往いきたりけり。久ひさしくいかざりつれば、つゝましくて立たてりけり。偕いかいまめば、我われにはよくて見えしかど、いと怪あやしきさまなる衣きぬを着おつて、大櫛おほくしを面櫛おもてくしにさしかけて居ゐり。手てづから飯盛いひもり居ゐりけり。いとみじと思おもひて、來きにけるまゝに往いかすなりにけり。この男おとこは王おほきみなりけり。

第四百四十五段

昔むかし、平城帝ならのみかどに仕つかうまつる采女うねありけり。顔容かほかたちいみじう清きよらにて、人々ひとびとよばひ、殿上人てんじやうびとなどもよばひけれど、逢あはざりけり。その逢あはぬ心こころは、帝みかどを限かぎなくめでたきものになむ思おもひ奉たごりける。帝みかど召ましてけり。さて後あと又またも召まさざりければ、限かぎなく心憂こころをしと思おもひけり。夜晝よるひる心こころにかゝりて覺おぼえ給たまひつゝ、戀こひしく侘わびしう覺おぼえ給たまひけり。帝みかどは召まししかど、事こととも思おもさず。さすがに常とこには見みえ奉たごる。なほ世よに經かまじき心地こころしければ、夜密よみかに出いでて、猿澤池さるさほのいけに身みを投なげてけり。かく投げつとも、帝みかどは得えしろし召まさざりけるを、事ことの次ついでありて、人の奏そうしければ聞きし召ましてけり。いといたう哀あはれ給たまひて、池いけの邊ほとりにおほ行幸あほぎし給たまひて、人々ひとびとに歌詠うたませ給たまふ。柿木人丸かきのものひとまる、

わぎも子がねくれたれ髪かみを猿澤池さるさほのいけのたまもと見るぞ悲かなしき

とよめる時に、帝みかど、

猿澤池さるさほのいけもつらしなわぎも子が玉藻たまもかづかば水みづぞひなまし

とよみ給たまひけり。さてこの池いけに慕こせさせ給たまひてなむ、歸かへらせおはしましけるとなむ。

第四百四十六段

同じ帝みかど、立田川たちだがはの紅葉もみぢいと面白おもしろきを御覽ごらんじける日ひ、人丸ひとまる、

立田川たちだがはもみぢ葉流はなるかみなびの三室みむろの山やまにしくれ降ふるらし

みかど、

立田川もみぢ亂れて流るめり渡らば錦中や絶えなむ
とぞ遊ばしたりけり。

第四百七段

同じ帝、狩かりいとかしこく好み給ひけり。陸奥國岩手郡みちのくにいわてのこほりより奉れる御鷹おんたか、世になくかしこかりければ、二なる覺おぼして御手鷹おんてたかにし給ひけり。名をば岩手いはてとなむつけ給へりける。それを、かの道に心ありて、預り仕うまつり給ひける大納言に預け給へりける。夜晝よるひるこれを預りて、取り養かひ給ふ程に、いかがし給ひけむ、そらし給ひてけり。心肝こころももを惑まどはして覓もとむるに更にえ見出です。山々に人をやりつゝ、覓もとめさすれど更になし。自らも深き山に入りて、惑まどひ歩き給へどかひもなし。この事を奏そうせて暫時しばしもあるべけれど、二日三日ふつかみかにあげず御覽みませぬ日なし。如何いかんせむとて内裏うちに參りて、御鷹おんたかの失せたる由を奏し給ふ時に、帝物も宣はせず。聞し召しつけぬにやあらむとて、又奏し給ふに、面おもてをのみまもらせ給ひて、物も宣はず。怠々たいぐしと思おぼしたるなりけりと、我にもあらぬ心地して、畏かしこまりていますかりて、「この御鷹おんたかの覓もとむるに侍らぬ事、いかさまにかし侍らむ。などか仰事おほせこともし給はぬ」と奏し給ふ時に、帝みかど、

いはで思ふぞ言ふにまされる

と宣ひけり。かくのみ宣はせて、こと事も宣はざりけり。御心にいと言ふかひなく、惜しく思さるるになむありける。これをなむ世の中の人、もとをば兎角つけたる。元もとは斯くのみなむありける。

第四百八段

平城帝ならのみかど、位におはしましける時、嵯峨帝さやまのみかどの坊におはしまして、詠みてたてまつれ給ひける。

皆人のその香にめづる藤袴君がみためと手折りつるけふ

帝、御かへし、

折る人の心にかなふ藤袴うべ色ことに匂ひたりけり

第四百九段

大和國やまとのくになりける人の女むすめ、いと清らにてありけるを、京より來たりける男の、かいまみて見けるに、いとをかしげなりければ、偷ひそみてかき抱いだきて、馬にうち乗せて逃げて往にけり。いとあさましう恐しう思ひけり。日暮れて立田山に宿りぬ。草の中に泥障ぬいぢりを解とき敷しきて臥せり。女恐しと思ふ事限なし。侘わびしと思ひて、男の物云へど、答こたへせで泣きければ、男、

誰が御祓みそぎゆふつけ鳥かからごろも立田の山にをりはへて鳴く

女、かへし、

立田川岩根をさして行く水のゆくへも知らぬ我がごとやなく
と詠みて死にけり。いとあさましようてなむ、男いだき持ちて泣きける。

第一百五十段

昔、大納言の女、いと美しうて持ち給ひたりけるを、帝に奉らむとてかしづき給ひけるを、殿に仕うまつりける内舎人にてありける人、いかでか見けむ、此の女を見てけり。顔容貌いと美しげなるを見て、萬の事覚えす心にかゝりて、夜晝いと侘しく病になりて覺えければ、「一切に聞えさすべき事なむある」と云ひ渡りければ、「怪し、何事ぞ」といひて出でたりけるを、さる心設けして、ゆくりもなくかき抱きて、馬に乗せて、陸奥國へ、夜ともいはず晝ともいはず逃げて往にけり。安積郡安積山といふ所に庵を造りてこの女をすゑて、里に出でつゝ、物など求めて來つゝくはせて、年月を経てありへけり。この男いぬれば、たゞ一人、物も食はで山の中に居たれば、限なく侘しかりけり。かかる程に孕みにけり。この男物求めに出でにける儘に、三四日來ざりければ、待ち侘びて立ち出でて、山の井にいきて影を見れば、我がありしかたちにもあらず、怪しきやうになりけり。鏡もなければ、顔のなりたらむやうも知らでありけるに、俄に見れば、いと恐しげなりけるを、い

と恥かしと思ひけり。さて詠みたりける。

安積山かげさへ見ゆる山の井の淺くは人を思ふものは

と詠みて、木に書きつけて、庵にきて死にけり。男、物など求めて持て來て、死にて伏せりければ、いとあさましと思ひけり。山の井なりける歌を見て、歸り來てこれを思ひ死にに、傍に臥せりて死にけり。世の故事になむありける。

第一百五十一段

信濃國更級といふ所に男棲みけり。若き時に親は死にければ、伯母なむ親の如くに若くよりあひ添ひてあるに、この妻の心いと心憂き事多くて、この姑の老い屈まりて居たるを常に憎みつゝ、男にもこの伯母の御心のさがなく悪しき事を云ひ聞かせければ、昔の如くにもあらず、疎なる事多く、この伯母の爲になり行きけり。この伯母といたう老いて、「二重にてゐたり。これを猶この嫁所狭がりて、今迄死なぬ事と思ひて、よからぬ事をいひつゝ、「持ていまして、深き山に捨てたうびよ」とのみ責めければ、責められ侘びて、さしてむと思ふなり。月のいと明き夜、「娘どもいざ給へ、寺に尊き業すなる。見せ奉らむ」と云ひければ、限なく喜びて負はれにけり。高き山の麓に棲みければ、その山に遙々と入りて、高き山の嶺の下り來べくもあらぬに、置きて逃げて來ぬ。「や」とい

へど、答もせで家に來て思ひ居るに、言ひ腹立てける折、腹立ちてかくしつれど、年比親の如く養ひつゝあひ添ひにければ、いと悲しく覺えけり。この山のかみより、月もいと限なく明くて出でたるを眺めて、夜一夜寝もねられず悲しく覺えければ、かく詠みたりける。

我が心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て

と詠みてなむ、またいきて迎へ持て來にける。それより後なむ、姨捨山といひける。慰めがたしとは、これが由になむありける。

第百五十二段

下野國に男女棲みわたりけり。年比すみける程に、男妻をまうけて、心變りはて、この家にありける物どもを、今の妻の許かき拂ひ持て運びいく。心憂しと思へど猶させて見けり。塵ばかりの物も残さず皆持ていぬ。只残りたる物は、馬槽のみなむありける。それをこの男の從者、眞楫といひける童を使ひけるして、この槽をさへ取りに遣せたり。この童に女の云ひける、「汝も今は此處に見えじかし」などいひければ、「なごてか候はさらむ。主おはせずとも候ひなむ」など云ひ立てり。女「主に消息聞えば申してむや。文は世に見給はじ。只詞にて申せよ」といひければ、「いとよく申し候はむ」と云ひければ、かくいひける。

船もいぬまかぢも見えじ今日よりはうき世の中をいかで渡らむ

と申せ」と云ひければ、男にいひければ、物かきふるひ往にし男なむ、しかながら運び返して、もとの如くあからめもせで添ひ居にける。

第百五十三段

大和國に男女ありけり。年月限なく思ひて棲み渡りけるを、如何しけむ女を得てけり。猶もあらすこの家に率て來て、壁を隔てて棲みて、我が方には更に寄りこす。いと憂しと思へど、更にいひも嫉まず、秋の夜の永きに、目を覺して聞けば、鹿なむ鳴きける。物もいはで聞きけり。壁を隔てたる男「聞き給ふや、西こそ」と云ひければ、「何事」と答へければ、「この鹿の鳴くは聞き給ふや」といひければ、「さ聞き侍り」と答へけり。男「さてそれを如何聞き給ふ」と云ひければ、女ふと云ひける。

我もしかなきてぞ人に戀ひられし今こそよそに聲をのみ聞け

と詠みたりければ、限なくめでて、この今の妻をば送りて、元の如なむ棲みわたりける。

第百五十四段

染殿の内侍といふいますかりけり。それを能有大臣と申しけるなむ、時々すみ給ひける。物をよ

くし給ひければ、御衣どもをなむ預けさせ給ひけるに、綾どもを多く遣はしたりければ、「雲鳥の紋の綾をや染むべき」と聞えたりしを、兎も角も宣はせねば、「得なむ仕うまつらぬ。定め承はらむ」と申し奉りければ、大臣御返事に、

雲鳥のあやの色をも思ほえずひとをあひ見で年の経ぬれば
となむ宣へりける。

第五百五十五段

同じ内侍に、在中將すみける時、中將の許にのみてやりける。

秋萩をいろどる風の吹きぬれば人の心も疑はれける

とありければ、かへし、

秋の野をいろどる風は吹きぬとも心は枯れじ草葉ならねば

となむ言へりける。かくて住ますなりて後、中將の許より、衣をなむしに遣せたりける。「それに洗濯などする人なくて、いと侘しくなむある。なほ必ずして給へ」となむありければ、内侍「御心も
てある事にこそあなれ。

大幣となりぬる人の悲しきはよるせともなく鹿ぞなくなる

となむ云ひ遣りたりける。中將、

流るとも何とか見えむ手に取りてひきけむ人ぞ幣と知るらむ

となむいひける。

第五百五十六段

在中將、二條后宮、まだ帝にも仕うまつり給はで、平人におはしましけるよに、よばひ奉りける時、鹿尾菜といふ物おこせて、かくなむ。

思ひあらば葎の宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも

となむ宣へりける。返しを人なむ忘れにける。さて后宮、東宮の女御と聞えて、大原野に詣で給ひけり。御供に上達部、殿上人、いと多く仕うまつりけり。在中將も仕うまつれり。御車のあたり、生暗き折に立てりけり。御社にて、大方の人々祿賜はりて後なりけり。御車の後より奉れる、御單衣の御衣をかづけさせ給へりけり。在中將賜はる儘に、

大原やをしほの山も今日こそは神代のことと思ひ出づらめ
と忍びやかにいひけり。昔を思し出でて、をかしとおぼしけり。

第五百五十七段

また在中將内裏にさぶらふに、御息所の御方より、忘草をなむ、「これは何とかいふ」とて賜へりければ、中將、

忘草おふる野邊とは見るらめどこはしのぶなり後も頼まむ

となむありける。同じ草をしのぶ草、わすれ草といへば、それによりてなむ詠みたりける。

第二百五十八段

在中將に、后宮より菊召しければ、奉りけるついでに、

植ゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

と書いつけて奉りける。

第二百五十九段

在中將の許に、人の飾粽をおこせたる返しに、かく云ひやりける。

あやめかり君は沼にぞ惑ひけるわれは野に出でてかるぞ侘しき

とて、雉子をなむやりける。

第二百六十段

水尾帝の御時、左大辨の女、辨御息所とていますかりけるを、帝御髪おろし給ひて後に、一

人いますかりけるを、在中將忍びて通ひけり。中將、病いと重くして煩ひけるを、本妻どももあり、これはいと忍びてある事なれば、え往きも訪ひ給はず、忍び忍びになむ訪ひける事、日々によりけり。さるに訪はぬ日なむありける。病もいと重りて、その日になりけり。中將の許より、

つれづれといとど心の侘しきに今日は訪はずて暮してむとや

とて遣せたり。「弱くなりたり」とて、いといたく泣き騒ぎて、返事などもせむとする程に、死にけりと聞きて、いとみじがりけり。死なむとする事、今々となりて詠みたりける。

終に行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを

と詠みてなむ絶えはてにける。

第二百六十一段

在中將物見に出でて、女のよしある車のもとに立ちぬ。下簾の間より、この女の顔いとよく見てけり。物など云ひかはしけり。此も彼も歸りて、明日に詠みて遣りける。

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくばあやなく今日や詠め暮さむ

とあれば、女かへし、

見もみずも誰と知りてか戀ひらるる覺東なみの今日のながめや

とぞいへりける。これらは物語にて、世にある事どもなり。

第百六十二段

男、女の衣を借り著て、今の妻の許いきて更に見えず。「この衣を皆著破りて返しおこす」とて、それに雉、雁、鴨を加へておこす。他國に、いたづらに見えける物どもなりけり。さりける時に、女かく云ひやりける。

いなやきじ人にならせるかり衣わが身にふればうきかもぞつく

第百六十三段

深草帝と申しける御時、良少將といふ人いみじき時にてありけり。いと好色みなむありける。忍びて時々あひける女、同じ内裏にありけり。今宵必ず逢はむと契りたる夜ありけり。女いたう化粧して待つに、音もせず。目をさまして、夜や更けぬらむと思ふ程に、時申す音のしければ、聞くに、丑三と申しけるを聞きて、男の許にふといひ遣りける。

人心うしみつ今は頼まじよ

といひやりたりけるに、驚きて、

夢に見ゆやとねぞ過ぎにける

とぞつけて遣りける。暫しと思ひてうち休みける程に、寝過ぎたるになむありける。かくて世にも勞あるものに仕うまつる、帝限なく思されてある程に、この帝失せたまふ。御葬の夜、御供に皆人仕うまつりける中に、其の夜よりこの良少將うせにけり。友達、妻もいかならむとて、暫しは此處彼處覓むれども、音耳にも聞えず。法師にやなりにけむ、身をや投げてけむ。法師になりたらば、さてなむあるとも聞えなむ。猶身を投げたるなるべしと思ふに、世の中にもいみじう哀がり、妻子どもは更にもいはず、夜晝精進齋をして、世間の神佛に願をたて惑へど、音にも聞えず。妻は三人なむありけるを、宜しく思ひけるには、「猶世に經じとなむ思ふ」と、二人にはいひける。限なく思ひて、子どもなどある妻には、塵許りもさる氣色も見せざりけり。この事をかけても言はげ、女もいみじと思ふべし。我もえかくなるまじき心地のしければ、寄りだに來で俄になむ失せにける。ともかくもなれ、かくなむ思ふとも言はざりける事の、いみじき事を思ひて泣きいられて、初瀬の御寺にこの妻詣でにけり。この少將は、法師になりて、簀一つを打ち著て、世間世界を行ひありきて、初瀬の御寺に行ふ程になむありける。ある局近う居て行へば、この女導師に云ふやう、「この人かくなくなりたるを、生きて世に在るものならば、いま一度逢ひ見せ給へ、身を投げ死にたるものならば、その道成し給へ。さてなむ死にをるとも、この人のあらむやうを、夢にても現にても聞